

---

# らきすた キミがいるセカイ

牛乳帝国

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らきすた キミがいるセカイ

### 【Nコード】

N2108F

### 【作者名】

牛乳帝国

### 【あらすじ】

あなたにはセカイはどのように写るだろう。その景色は色鮮やかだろうか？俺のセカイには色が無かった。だけどその色の無いセカイは彼女達との出会いで少しずつ鮮やかに染まっていく。『セイカ君！』その一言が俺の心とセカイを満ち足りたものにしていく。

すべての始まりは始業式だった。

## 第一話 セカイが変わる始業式

今日は4月1日、俺が通ってる陵桜学園の始業式だ。

春休みが終わり久々に見たこの学校は相変わらず嫌になるほど平和で・・・。

しょうじき、俺はこの2年間・・・つまりは3年になるまでの間この学校を好きにはなれなかった。

友達と言っても軽く挨拶を交わし適当に話す程度のもので・・・。

四六時中一緒にいたいとか卒業後も会いたいと思えるような奴はいなかった・・・。

今日、これから話す事件がなければな・・・。。。。。

「あゝ・・・クラス割見とかねえとな。」

俺の名前は平野征禍<sup>ひらのせいカ</sup>

今後は読みにくいし変換も面倒だからセイカと表示させてもらう。

今日から新学期、つまりは高校最後の一年だ。

正直「やっと終わるな」って感じだった

正直に言っただけ俺はこの学校が嫌いだ

今までの俺のクラスの奴も担任もほんとに面白みのない奴ばかりで  
当然そんな奴らと行う行事もつまらなかった

「って、今はそんな事どうでもいいだろ・・・。」

とりあえず人が群れてる掲示板の前へいく。

何とか人ごみを掻き分けて掲示されてるクラス表を見る

(え〜つと・・・A組・・・ないな、B組・・・お、あったあった)

3年B組には俺の名前がしっかり刻まれていた

(さてと長居する必要はないし、さっさと教室に・・・。)

と思っただけ

???「ぬをおおお！何この人ごみ!？」

???「クラス発表に決まってるでしょうが・・・。」

???「お姉ちゃんどうしょ?これじゃあクラスわかんないよ。」

???「困りましたね・・・時間もありませんし・・・。」

どうやら遅れてきた組のようだ

女の子4人

一人は蒼い髪の毛にピン！と立ったアホ毛があるやけにちっこい女子

一人は薄い紫がかったロングを両脇で結んでる、いわゆるツインテール

一人は髪の色こそ同じだがツインテールではなくショートヘアに大きな黄色いリボン

最後の一人はピンクのロングに軽くウェーブがかかってる・・・ついでにここからでもわかるほど

に胸がでかい。

（ま、俺には関係ないか。）

と、思ってB組に行くためその後ろを通ったとき。

???「うわっとと!!」

「うをつ!」

さっきの青髪の奴がちょうど俺が通ったときに後ろ・・・つまりは俺のほうに倒れた。

「あぶねっ!」

ついこういうときは関係なくても反射的に助けてしまう。

このあたりは今ごろ北海道でバターでも作っているんであるうオヤジに叩き込まれた。

オヤジ曰く『男たるもの、女性のピンチにはその身をかえりみずに駆けつけるべし!!』

と、豪快にわっはっはっと笑っていたのを思い出す。

まあ、そんなことより

「大丈夫か？人多いんだから気をつけろよ。」

と、抱きとめた青髪少女を立たせる。

「???」「いやー、ありがとありがと、ちょっと昨日ネットゲでドロップがうはうはでさあ〜。」

と、〃 〃 〃 こんな顔で礼を言ってきた。

ちなみにしゃべってる内容がわかってしまう俺に関しては突っ込まないでくれ・・・。

「???」「ちょっとあんた気をつけなさいよ！ごめんね？迷惑かけちゃって。」

と、ツインテの奴が青いのを叱りながら俺に礼を言ってきた。

「まあ、気にすんな、今度から気をつけろよ。」

と、これ以上はかわらない

さっさと手に持っていた荷物を拾ってその場を後にする。

後ろからありがとと聞こえたので振り向かず手を振ってその場を後にした

かつたんだが・・・。

???「ねえねえ！ちょっと待って!!」

と、青いのが走ってきて俺の腕をつかんだ

「あ？なんだよ。」

正直かわりたくないの少し青いのをにらんでに答える。

しかし、そんなことはお構いなく。

???「ねえねえ、迷惑ついでに頼みたいことがあるんだけど。」

「迷惑かけられんのはきらいだ。」

???「いやいや、少年。こーいうイベントをこなしておくと一気に高感度がアップするものだよ。」

今度は何を言ってるかさっぱりわからない。

だが、こういうしつこいのはさっさと無視していくべきなんだが・

「???」ちよつと困ってるの、とりあえず来てくれない?」

その「困ってる」に体が反応する。

オヤジめ、余計なことを体にしみこませやがって。

条件反射でついて行ってしまう。

「???」おゝい! つれてきたよ!」

「???」あのゝ、泉さん、さすがにそれはご迷惑なのは・・・。」

「???」そうだよこなちゃん、ほかの人に迷惑かけたら駄目だよ」

そうだ、そのリボンときよにゆ・・・ピンク! もつと行ってやつてくれ!」

「???」いいのいいの、来てくれたって事はやってくれるってことだしw」

お前に強引に連れてこられただけだっつ

「???」あんたの強引さに断りきれなかっただけでしょうが・・・。

」



ナイス！ツインテール！！もっと言ってやってくれ！！

「???」「まあいいじゃん、実際困ってるわけだし。」

また体が「困ってる」に反応する

「ああ・・・わかったよ、何してほしいんだ？さっさとしてくれ。」

そう言ってしまった・・・。

一話 セカイが変わる始業式 終わり

二話へ続く・・・

## 第二話 災難続きのセカイ

『あのね？頼みたいことがあるんだよ。』

という言葉条件反射で承諾してしまった

というわけでその続きを聞いてもらおう。

俺は頼みごとの前に自己紹介をされた。

「わたしは泉こなた、こなたでいーよ！」

「わたしは柊かがみ、あと、こっちは双子の妹でつかさ。」

「よ、よろしくおねがいます。」

「わたしは高良みゆきと申します、以後よろしくお願いします。」

と、自己紹介された。

ん？これはやっぱり俺も名乗るんだよね？

「あゝ、俺は平野セイカだ。」

よろしくとは言わない、どうせこの場限りの付き合いだ

そう、この場限りの・・・。

「で？何をしてほしいって？」

「あゝ、つとねクラス発表見てきてほしいの。」

「・・・つまりはお前らのクラスがどこかを見てきてくれと。」

「いや、私とこなたは自分で行くけどこの二人がね・・・。」

と柊（妹）と高良・・・さん（なぜかさんをつけなければいけない気がする）のほうを指した。

「えゝ！わたしもか弱い乙女なんだけど！」

「言いだしつぺはついてくる！！！」

「うう・・・かがみんながいじめるよおゝ。」

っていうか、漫才を見てるみたいだ。

「ってかあんたら二人が行くなら俺はいらねえじゃん。」

「いいのいいの、人手は多いにこしたことはないし」

「まあ、そういうことだから、よろしくね。」

いまだに納得がいかない俺を泉が背中から押してくる

「ちょ！おい！待てって！！！」

「さっき手伝うって言ったんだから早く汁!!」

汁の用法がわかる俺は死んだほうがいいかもナ・・・。

「ああ！わかったから押すな!!」

とにかくこいつらから解放されるには掲示板まで行って確認すればいい。

「んじゃあ、二人の分よろしくねー!」

と、叫んで泉はH組の掲示のほうへ行った。

なるほど、左右から分担して探すということか

かがみ「私たちはこっちな。」

と、俺を柵（姉）がひっぱる。

柵がA組を見ているので俺は再びB組を見る。

（えーっと柵つかさに高良みゆき・・・。）

上からクラスの子のところを見ていく

できれば誰もいないでほしかったんだが・・・。

（ん？泉こなた・・・って!!あいつと同じクラスかよ!?)

しかもその後、柵つかさ、高良みゆきと二人の名前も発見するので

あつた・・・。

「ああ・・・つかれた。」

ようやく人ごみから脱出した俺はさっきのところに戻ってきた。

「おつかれさま、どうだった？」

「ああ、泉も柊も高良・・・さんもみんなB組だった。」

「え、つと、どっちの柊かな？」

ああ、そういえば柊は二人いたな。

ややこしいな、双子って

「ああ、妹のほうな、姉のほうはちがうっぱいけど。」

俺は柊つかさと高良みゆきの名前を確認（泉はついで見つけた、  
“い”で始まるしな）してすぐに戻ってきた、あれ以上人ごみにいるのはごめんだっし。

「あ・・・じゃあ、おねえちゃんはまだ別のクラスなんだ。」

「まあ、普通は兄弟とか姉妹は同じクラスになったりするほうが珍しいんだけどな。」

つて！なにナチュラルに会話してんだああああ！！

さっさと教室に行こう、と思った矢先に泉が帰ってきた。

「おまたへー！いやあ、H組から見てたら時間がかっちゃったよ。」

「こなちゃん、また同じクラスだね。」

「泉さん、今年もよろしくお願いします。」

と、おのおの挨拶をしている。

「ああ、それと平野君もよろしくねー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「いやあ、まさかキミも同じクラスとは思わなかったよ、男子のほうも見てて正解だったね。」

うんうんとうなずいている泉。

「え？そっだったの？おしえてくれればいいのに。」

「これからよろしくお願いしますね、平野さん。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ああ・・・よろしく・・・・・・・・・・。」

そう返事するしかなかった。

第二話 おわり

第三話へ続く・・・。

### 第三話 始業式での妨害のセカイ

「ちゅーわけで、ウチがこのクラスの担任の黒井や、まあ、何人か始めましての奴はおるがほとんど顔見知りやな、まあ、今年もよろしゅうたのむでー。」

と、担任の黒井ななこ先生の挨拶が終わった。  
するとクラスの面々はおのおの会話を始める。

もちろん俺のところによってくる奴はいない……………。

「はずだっただがなあ……………」

俺の周りにはなぜか3人の女子がいた

「まあ、改めてよろしくね！平野君」

と、泉が先生の挨拶が終わって早々やってきた。

「……………」

軽く無視

「おーい、平野くん。」

無視

「……………」

よし、今までの奴もこうすると話しかける気を失ってどこかへ行く。  
はずなのに！！

「うりゃー！！」

と、襲い掛かってきた

「ぬをつー！！」

「こゝちよこちよこちよこちよ！！」

しかも脇をくすぐってきた！！

「だはははは！！わ、脇は！！脇はやめろー！！」



1分後

ちゅん

と、アニメだったら効果音を入れるはずだ。

そうだよな？音響監督？

「まったく！女の子が話しかけてるのに無視するとは！！」  
大変ご立腹な泉がいた。

「うるせえな・・・んのは俺の勝手・・・。」

「ほお〜（ニヤリ）」

と、また手をワキワキさせながら迫ってくる。

「ばっ！わかった！もう無視しない！！マジスンマセンでした！！」  
と、謝った。

「うむ！約束だからね！！」

と、勝ち誇った笑みをされる。

くそう、なんかむかつくな。

「こなちゃん、あんまり男の子をいじめたら駄目だよお」  
と、柊がやってきた。

その後ろには高良・・・さんもいる。

「何なんだよ、いったい俺に何のようだ？」

「何って、さっきのお礼。」

「あの拷問がお礼なのか？」

と泉をにらみつける。

別に柊はにらんでないのだが軽くビクツとなる

何でだろうか、こいつを怖がらせるとなんか罪悪感が。

「ちがうよ、さっきのお礼とお詫びもかねて、お昼奢ったげよう  
と思っで。」

「ほう？」

この学校は進学校な上に俺たちは三年生。

今日は始業式が終わった後は教科書の購入や何やかんやでプチ授業もある。

「だ、だから今日のお昼の誘いに来たんだけど……。」

ああ、しまった。柊の奴結構おびえてる。

「どうでしょうか？一緒にいていただけませんか？」

と、高良……さんも言っている。

確かにオヤジ&母さん（なぜ母親だけ呼び方が丁寧なのかはそのうち説明する。）は息子を残して北海道で牧場経営なんかやってるし俺は一人暮らしだ。

仕送りも生活するのには十分だが切り詰めないと自分のほしいものは何一つ買えない。

だから今日の昼食代が浮くのは嬉しい申し出だった。  
だが……。

「やめとく。」

「えええええ！なんで！？ってか空気読みなよ！！」  
と、泉が突っかかってくる。

俺は今までのクラスでいい評判なんかひとつもない。

俺は何言われようがもう慣れたが他人まで巻き込むのは正直いい気分はしない。

「ふう、しかたない。じゃあ最終手段だ！！」

と、こなたが叫ぶ。

「な、なんだ！？」

「平野保管計画を発動する！！！！」

「な、ちょ！まで！！A・フィールドを展開するな！！」

「あれ？意外〜。ネタが通じた。」

し、しまたああああ！！

「へえ〜、平野君ってそういう趣味が……。」

「ち、違う！！ネトゲの奴が口走ってたのを聞いただけで・・・」  
「へえー！！ネトゲやってるんだあー！！」

しまったああああああああ！！！！！！

「へえー、最初のイメージだとクールで他人を寄せ付けない感じだったけど・・・ネトゲとかやるんだあー・・・（ニヤニヤ）」  
「なっ！ちよっ！！おまッ！！」

「ふむふむ、そのあたりも語り合おうではないか・・・むふふふ。」

・・・弱みを握られてしまった。

つてなわけで始業式が始まる

席は自由なので俺はできるだけ後ろのほうに座る。

俺たちが来る前には入学式が行われており俺は一年生たちが前のほうの椅子に座っているのを見ながらできるだけ出入口に近い後ろの座席に座った。

これは途中で抜け出すためだ。

「お！平野君発見！！」

・・・早速計画が崩れた。

「おっす！さっきぶりね。」

「えーっと、柊姉か。」

こなたたちとやってきたのはC組になった柊かがみ

「うつわ、その呼び方やめてよ、名前で呼べばいいじゃない。」

「こう呼ばないと姉と妹の区別がつかないだろ、だいたい知り合ったばっかなのに下の名前で呼べるか。」

と、俺は言い返す。

「まあ、そうんだけどさ。」

柊は納得してないのか顔をしかめている。

「あの・・・そろそろ席に着きませんか。」

「おお！みゆきさんナイス！！」

と、いうと泉は俺の隣に座った。

「っておい！！何で俺の隣なんだよ！！」

そこに座られると途中で抜け出せないだろうが！！

「ん？もしかして照れてる？いや、平野君もなんだかんだで男の子だね。」

「ちっげーよ！」

「まあまあ、いいじゃないの。」

と言って柊姉はその反対側に座る

そして妹のほうと高良・・・さんはその両サイドに座る  
解説すると

柊妹・柊姉・俺・泉・高良さん となっている

お、ようやくさんづけになれてきたぞ。

って！そういうことじゃない！！

結局始業式を抜け出してサボる計画は意図せずに防がれてしまった  
のだった・・・。

第三話 始業式での妨害のセカイ おわり

### 第三話 始業式での妨害のセカイ（後書き）

一気に三話書いてみましたがどうだったでしょうか。

これからのお話ではセイカの変化やプチハーレム状態を楽しみにしててくださいね（笑）  
では

## 第四話 色づきはじめるセカイ

「いや、ようやく終わったね。」

と、泉が思いつきり伸びをした。

ちなみに今は始業式が終わって教室に戻る途中の廊下である。

「まったく、あの校長はいつも話が長すぎるのよ。」

と、不機嫌そうな柊姉

「うう、なんだかすごく眠くなっちゃった。」

と、あくびをかみ殺しているのは柊妹

「はい、私もさすがに疲れてしまいました。」

と、確かに少し疲れた様子で話すのは高良さん。

なぜか、俺はそのグループの真ん中にいた……………。

## 第四話

「はあ……………」

と、ため息をついてみる。

「うわあ、でつかいため息。どしたの？」

と泉が声をかけてくる。

ちなみに今のため息はこいつらのせいで始業式から抜け出せずに余計な体力を使ったせいだ。

「はあ……………」

これは簡単に弱みを握られている俺の情けなさのせいだ。

「うわ、さっきよりもでかいわね。どうしたのよ。」

「……………軽い自己嫌悪に浸ってるだけだ。気にすんな……………」

「

と、返しておく。

全員の頭の上に？が浮かんだのは言うまでもない。

だからといってわっしょいわっしょいと歌いだしたりはしないが。

「ふいゝ、やつと到着!!」

と、泉が教室に着くなり自分の席に戻っていった。

「んじゃあ、つかさ、みゆき、平野君、またお昼にね。」

「うん、またね、お姉ちゃん。」

「かがみさん、また後ほど。」

「ああ、またな。」

と一応俺も挨拶を返す。

ちなみに俺が昼飯に同席するのは了承済みだ。

泉がその話をしたら速攻で

「あ、いいよOK、OK。」

と俺の同席は許可された。

とりあえず自分の席につく。

するとちょうど黒井先生が入ってきた。

「ういゝす、席につけ。」

すると立っていた連中も席につく

「まあ、いまからは今年度の委員会とかウチのクラスの委員長とか決めるんやが、高良、委員長頼んでええか？」

「はい、わかりました。」

と、あっさり委員長が決まり拍手が起こる。

「んじゃあのこりの委員決めてくで。」

高良さんといいでに選ばれた副委員長が前に出る。

「それでは、残りの委員を決めていきたいと思いますので、皆さんよろしく願います。」

と丁寧な挨拶をして委員決めに入る。

「平野君、平野君。」

と、右前の席の泉が話しかけてきた。

「ん？なんだよ。」

もうこそぐりが怖いので無視はしない。

「なんか委員会入ったりする？」

「いや、めんどくさいからパスだ。」

委員会の仕事はいわゆる裏方、面白いモンではない。

「そかそか、そうだね、帰る時間遅くなるし夕方のアニメに間に合わないし！」

「さすがにアニメは見ないな、俺はネットだけが情報源だし。」

なんだか俺もそっち系の人間だと思われてるようだが決してそんなことはない。

某動画サイトとかを見てるとだんだんと覚えていくものなのだ。

「へえ……っと予鈴なった。」

キーンコーンカーンコーンと毎度おなじみのチャイムが鳴る。

「って事は昼飯か。」

そのチャイムが鳴るころには高良さんはすでに委員会決めを終えていた。

「…………めちゃくちや慣れてる！！

「んじゃあ、平野君！食堂にレッツゴー！！」

と、泉に手を引かれてその後に柊妹と高良さんがついてくる。

途中で柊姉とも合流し俺たちは食堂へと向かった

そのときの俺はまだ気づいていなかった

俺の生活は少しづつ、鮮やかな色に染まっていくことに。

#### 第四話 おわり



## 第四話 色づきはじめるセカイ（後書き）

と、言うわけで第四話でしたがいかがだったでしょうか？

ちなみに今回はリト スのネタを使ってみましたかわかりましたか？

次回はあの四人組が登場する予定です。

こうご期待！！

## 第五話 壁がなくなるセカイ

### 第五話

と、言うわけで泉たちと学食にやってきたのだが……………。

「ちょ！人大杉！！」

と、見たまんまの感想を叫んでいた。

「どうすんのよこなた！明らかに座る場所ないじゃない！！」  
あたりを見渡してみる

人、人、人、猫、人

ってちよつと待て！！なんか猫がいたぞ今！！

「あの、平野さんどうされました？」

「い、いや…………なんでもない。」

そくだ、見間違いに決まってるだろ……………。

「いや…………ほんとにどうしよつか？今日はコロネ買って来てないしなあ…………。」

コロネ？チヨココロネのことだろうか。

俺も実は甘党で時々購買で買って食べてたことがあった。

「お！いいこと思いついた！！」

と、泉が声を上げる。

「なにになに？どうすんのこなた？」

終姉が尋ねると泉はニマァッツと笑って俺の方を見た

「な、何だよ…………。」

文字でその顔を表現できないのがたまらなく悔しいところである。  
「平野君、ちよつと耳かして。」

そう言つて俺の耳にコシヨコシヨと作戦内容を伝えてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

正直乗り気ではないが早くしないと昼飯も食べないため俺は行動を起こした。

とりあえず辺りを見回し女子が固まっているところを探す。

そうするとやはり混雑しているにもかかわらず食事が終了した後も話している迷惑なグループはいるものだ。

そこへ行き話しかける。

「なあ、ちよつといいか？」

「へ？なんですか？」

と女子たちが反応する。

「悪いんだけど食い終わつたなら席を空けてくれないかな？俺、まだ飯食つてないからさ。」

と、できるだけ丁寧に言つた。

これで聞いてくれる物分りのいい奴らならいいんだが。

「えー、なんでー。ほかに私たちみたいないやつらいるじゃん。」

ほらきた、『ほかにもいるじゃん』攻撃。

よくいたよな、『あいつもやったのに何で俺だけ！』って逆切れする奴ら。

けどここでキレてはいけない。

できるだけ俺は自分の演技力を全開にして

「駄目・・・かな？」

と言つた。

「え・・・あ・・・駄目じゃ・・・ないです。」

とそういつとそのグループは引き上げていった。

ちなみに泉の作戦はこうだった。

『たぶん食べ終わつてもまだしゃべってる人たちがいると思うから

その人たちにどいてもらってきて。普通に言っただけで聞いてくれなかったらできるだけやさしく語りかけるみたいに「駄目・・・かな」って言えば完璧だよ！！」

といていたのだがまさかほんとに成功するとは・・・。

「つーわけで、席が空いたぞ。」

その席を陣取って泉たちを呼ぶ。

「へえ、やるじゃない。」

「こなちゃんの作戦が成功したんだね！」

「平野さん、お疲れ様でした。」

と、みんなが声をかける中なぜか泉はいなかった。

「あれ？泉はどこ行っちゃった？」

と、辺りを見回す。

もちろんこの人ごみから見つけられるわけもなく。

「ああ、あいつなら先に注文しにいつてくれたわよ。」

「は？席が空くかもわかんないのにか？」

「わたしもそう言ったんだけどこなたの奴『平野君なら絶対大丈夫

！！私が保証するよ！！』って言っちゃったよ。」

俺なら大丈夫、か・・・。

俺なんかを信用する人間がいるなんてな。

「っていうかちょっと待て！！俺が何にするかとかお構いなしのかあいつは！！」

「それは私たちも同じよ。何も訊かずに行っちゃったんだから。」

うわ・・・あいつ何を注文してくるつもりだ？

そもそも5人前なんて一人で運べるわけが・・・。

「おい！！みんなお待たせ！！」

と、響く泉の声。

「って！五皿同時にはこんでる！？」

泉は器用にうどんのどんぶりやらパスタの皿やらを腕に乗せて運んでいた。

「はわわわわ、こなちゃん、あぶないよお！」

「大丈夫よ、あいつはバイトで鍛えてるから。」

「バイト？レストランか何かか？」

柊姉に訊くとなぜか顔をしかめて

「あゝ・・・そんなところ。」

と言った。

「んじゃ、いただきます。」

と、手を合わせる。

それに釣られてみんなもいただきますと言っておのおの食べはじめる。

ちなみに俺はきつねそば、泉は塩ラーメンで柊姉はパスタ、妹のほうは焼きそばで高良さんは月見うどんだった。

「まあ、別に嫌いじゃないけど普通何にするか訊かないか？」

「いいのいいの、わたしのおごりなんだし。」

そついいながらラーメンをズルズルをすすっている。

まあ、奢ってもらっている身なのでそう強くは言わない。

きつねそばも結構好きだしな。

そこへ女の子が二人やってきていた。

「おねーちゃん！！！」

「あれ？こなちゃん、あれゆたかちゃんじゃない？」

と、柊妹のほうで泉に教える。

「へ？ほんとだ、おーい！ゆーちゃん！！！」

ぶんぶん手を振る。

その先には赤い髪の毛を両サイドで結んでいる子と俺ほどでもないが少し背も高めで緑の髪の子がいた。

「おゝ、ゆーちゃん、どうしたの？」

「席が見つからなくて、おねえちゃんの隣が空いてるみたいだったから。」

「・・・・・・・・（コクコク）」

と、一人は泉のことをお姉ちゃんと呼び、もう一人は話さずに黙って首だけ振っていた。

「柊先輩、高良先輩もこんにちわ。」

ぺこりと頭を下げる。

「・・・・・・・・こんにちわ。」

もう一人の方もぺこりと下げる。

「うん、こんにちわ。」

「ゆたかちゃん、ひさしぶり〜。」

「小早川さんもみなさんもこんにちわ。」

とおのおの挨拶してる中、俺は一人で蚊帳の外。

「えっと、お姉ちゃん、こっちの人は・・・？」

「ああ、えつとね。今年から同じクラスの平野セイカ君だよ。」

と、泉が紹介してくれた。

「は、はじめまして。小早川ゆたかです！」

「・・・・・・・・岩崎みなみです。」

と、自己紹介をされた。

「ああ、よろしく。ところで二人は姉妹なのか？」

と、泉にたずねる。

「うっん、従姉妹だよ。実家からは陵桜が遠いからウチに居候してるんだ。」

「はい、それに私体も弱いので、長距離の通学はつらくって・・・。」

「

なるほど、体が弱いのか。

その外見を見ると確かにひ弱そうな外見である。  
ただどちつくくつてもひ弱じゃない奴が・・・。

と、泉を見る。

「・・・・・・・・ん？」

目の前にいるしなあ

「・・・・・・・・今わたしもゆーちゃんみたいに小さいのにぜんぜん

ひ弱じゃないな、とか思ったでしょ。」

「勝手に人の心を読むな！！」

その会話にみんなが笑った。

俺は顔に手を当てながら、自分では気づかなかったが・・・・・・・・笑っていた。

なんだか俺はこいつらと話していると心の壁を作るのを忘れてしまっていた。

## 第五話 おわり

## 第五話 壁がなくなるセカイ（後書き）

第五話でしたがいかがでしょうか？

一日に5つも書くのは結構大変でしたが感想などいただければと思います。

今日はこれで終わりです、また明日もかけるかな？

うゝ、けどもうすぐ中間試験なのです。

こう見えても高校生なので。

では、〃 〃 ・ノシ



## 第六話 友達になりたい

「ああ・・・今日はマジで疲れた・・・・・・・・・・。」  
「なんなんだいったい。」

突然ぶつかつた女子の手伝いを問答無用でやらされ  
その女子によつて始業式脱出は拒まれ

その女子と昼食を食べ、さらには下級生と知り合つて・・・・・・・・・・。

「だーっ！今までの俺を帰せー！！」  
と、帰り道。

一人で叫んでる俺がいた。

自分の後をつける小さな影に気づかないまま・・・。

## 第六話

「って、何やってんだ俺は。」

いまさら叫んだところで何が変わるわけでもない。

きっと明日からもあいつらは俺に話しかけてくるだろう。

まるで友達のように。

「まあ、そこはしょうがないとしよう、こそぐりはいやだしな。」

なぜか俺はこそぐりに対する耐性値がまったくない。

この弱点さえなければ・・・・・・・・・・などと考えてしまう。

「まあ、なるようになるだろう、少なくとも我が家では平和だしな。」

そう、そう思っていたのに。

俺の認識は甘すぎたのだ・・・・・・・・・・。

「ふう、ただいま。」

家には誰もいないがとりあえずこれだけは言う。

なぜかって？なんとなくだ、悪りいかこんちくしょう。

「さつてと、さつさと着替えてくつろぐか。」

「うんうん、じゃあわたしもくつろがせてもらうね。」

「ああ、その辺で勝手に……………」

……………？

今俺は誰に対して返事をしたんだ？

後ろを振り向くが誰もいない。

「……………とうとう俺も寂しくなってきたんだろうか？」

そういえば高校生になって親が北海道に行っていていらい一人暮らしだつたし。

「……………幻聴なんか聞こえるとは……………」

正直ショックだ。

「大丈夫大丈夫、幻聴じゃないよ。」

「そうか、それはよかった……………」

……………。

後ろを振り向いた。

「やほ、平野君。」

蒼い髪

アホ毛

小さい背丈

ない胸……………。

「つて！…うをおおおお！！！！！」

そう、そこにいるのはまさしく……………。

「い、泉……………」

「いま、私の胸がどうか考えなかった？」

「いや、気のせいだ。」

しかし、今重要なのはそこではなく。

「なんで！お前が！！ここにいて！！！！！」

と、もつともなことを訊いてみた。

我ながら結構迫力があつたと思うが・・・。

「普通にキミの後をつけてきたんだけど？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いつからだ？」

「キミが学校でてから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いやゝ、なんか途中で叫びだすし、しかも私にまったく気づいてないし、いやゝ面白かったよ！GJ!!」

さ、最悪だ・・・・・・・・。

家では平和な時間を遅れると思っていたのに・・・・・・・・。

「帰れ。」

「ええゝ、いいじゃん少しくらい。」

「い・い・か・ら！帰れ!!」

「ええゝ、せつかく来たんだしゲームかなんかしようよ!!」

「しねえよ!!」

こうなったら実力行使

「さっさと帰れっつの!!」

何とか泉をリビングから押し出そうとする。

「ここまでできたら私だって意地だよ!!ぬぬぬぬ。」

泉は意地でも出ようとする。

「お前がここにいると迷惑なんだよ!!さっさと帰れ!!」

と、言った瞬間。

不意に泉の力が弱くなり。

「あ・・・・・・・・!!」

と、言うが早いか。

向かい合って押し合っていた俺たちは

泉を下にして

そのまま床に倒れこんだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・。」

お互い話さない

いや、話せないと言ったほうがいいだろうか。

顔の距離はほぼゼロ。

あごをちよつと出せばキスできてしまうような距離。

さ、さすがにこの体勢はまずい！！

「わ、悪い！！」

と、体を起こそうとすると。

泉が俺の制服をつかんでいた。

「・・・・・・・・ど、どうした？」

今日の泉と雰囲気違った

そして一言。

「・・・・・・・・そんなに迷惑かな？」

と、言った

「私ってやっぱり迷惑かな？」

「お、おい。泉・・・・・・・・？」

俺は起き上がる途中、泉に服をつかまれたままの体勢でいる。

簡単に振り払うことができるほどの小さな力だが、なぜかできなかった。

いつもの俺なら簡単に振り払っているのに。

「私こんなだからさ、このくらいしかキミと仲良くなる方法思いつかなかった。」

言っている意味がよくわからなかった

「俺と・・・・・・・・仲良く・・・・・・・・？」

そう言い返すしか考えられない。

そんな俺にはお構いなく泉は続ける。

「だって、話しててわかるもん。キミは人と話すときにどこかで壁を作ってて誰もその中に入れようとしてないって・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・！」

直球だった

俺は他人と接するとき、確かに心の壁を作ってる。

俺のことを全部見透かしてる。

このとき理解した。

こいつはおちやらけて見えて、結構他人の本質も見てるんだ。

「だけど！せっかく知り合っただから、わたしは仲良くなりた  
いよ。きつとかがみだつて！つかさも、みゆきさんも、きつとそう思  
ってる・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

何もしゃべれない。

そんな空気

・・・・・・・・を

ぶち壊したのは泉だった。

「・・・・・・・・まあ、それはそれとしてさあ。」

「・・・・・・・・あ？」

さつきと口調があからさまに違う。

「すごい度胸だねえ、自分の家に来た女の子を押し倒すなんて」

そういわれて自分の服を見ると

とつくに泉の手は放されていた。

「って！お前まさか！！今の話で時間稼ぎを！？」

「むふふふふ いやあ、キミがこんなにも大胆だったなんて、ち  
よつとどきどきしちゃったよ。」

「まさか、今話したのは・・・・・・・・？」

「ん？ああ、漫画の受け売り。なんか主人公の雰囲気君に似てた  
からさあ」

や、やられた・・・・・・・・。

「力抜いたらほんとにそのまま倒れるし。まあ、背中が痛かったけ  
どね。」

前言撤回

こいつはすごい奴でも何でもねえ!!

「まあまあ、そう怒らないですよ。」

「……………」

俺の機嫌が良いか悪いかなんて見ればわかる。

ああ、最悪だ。

「むう、一度へそを曲げるとなかなか元に戻らないタイプか……………」

「……………」

もちろん無視。

こそぐりが飛んでくる可能性もあったが、ここは無視をし続ける。

「……………さっきの話、半分は冗談じゃないよ。」

「……………漫画の受け売りじゃなかったのか？」

「確かにそうんだけどね、半分は。」

半分受け売り

と、言うことはもう半分は受け売りではないと言うことになる。

「……………もう半分は？」

「本音。キミと仲良くなりたいって奴。」

「マジか？」

「うん、マジ。」

なんというか、まあ。

「どうかな？」

まあ、うん。

「……………考えとく。」

## 第六話 友達になりたい（後書き）

第六話でしたが・・・。

寝不足で書いてる途中で意識が飛んだりしてしまいました。  
もしかしたらその影響で文章に変なところがあるかも・・・。  
ご了承ください。

## 第七話 回想シーンのセカイ

始業式翌日の登校中

「お！平野君！！おはよう！！」

「うげ！！」

「登校中に会った友達に対して『うげ！！』はあんまりじゃない？」  
「俺はまだお前と友達になるなんて一言も言っていない。」

そう言いつつ自分の周りをうるつく小動物にシッシととりあえず拒否の態度を示す。

「とかいいつつ、そこまで嫌がってないよねえ。」

「う、うっさい！！」

「っておい！そこは否定しろよ俺！！」

「ほうほう、平野君は結構ツンデレ属性だったのか……………」

「ざけんなっ！！」

そんないつもと違った朝のセカイ。

## 第七話

「おっす、こなた、平野君。」

「あ！こなちゃん、平野君、おはよう。」

「おふたりとも、おはようございます。」

朝、教室に入ったとたん3連コンボの挨拶がふってきた。

「おっはよう！」

「……………おっす。」

と、俺は力なく挨拶をする。



「どうしたのよ、なんか元気ないわよ？」

と、俺の異変にいち早く気づく柊姉。

「心配してんならこの馬鹿を何とかしてくれ……………」

そう言つて泉を猫のように持ち上げた。

「うおおおお！離せええええ！！」

「なに？その馬鹿がなんかしたの？」

「朝っぱらから深夜アニメがどうのギャルゲーがどうのってマシンガントークだ……………」

朝にあつてしまったのが運の尽き。

泉は学校に着くまで（着いても）延々とオタクトークを（一方的に）繰り広げたのだ。

「ああ……………そりゃあご愁傷様。」

「なに？二宮君？」

と、泉がわけのわからない返事をしていた。

「16世紀末には……………」

世界史の授業中。

泉からメモがまわつてきた。

『今日のお昼はお弁当？それとも学食？』

という文の下に「お弁当／学食」と書いてあつたので弁当に丸をつけて返した。

「そんじゃあ、この日には何があつたか……………泉」、答えてみ。」

「ローゼン麻生が登場しました！！」  
スコーン！！

（おおっ！チョーク投げ！！しかもきれいに命中してる）

黒井先生の放ったチョークは泉の額に命中し床にぽとりと落ちた。

「そんな時代に麻生がおるか！！」

先生、恐るべし……………。

そしてお昼・・・・・・・・

「こなちゃん、平野君、お昼食べようよ。」

「いや、平野君もお弁当でよかったねえ。」

「そうですね、食事はにぎやかなほうが楽しいですし。」

あんなメモが来た時点でこうなることは予想済みだったが・・・・・・・・

「・・・・・・・・なんで柊姉がいるんだ？」

なぜかそこには別のクラスのはずの柊姉がいた。

「ああ、それはね、かがみはクラスでハブられテッ！！！」

柊姉の鉄拳が炸裂した！こうかはばつぐんだ！！

「殴るぞ。」

「殴ってから言わないでよお！」

「ってか、マジでハブられてんのか？」

「んなわけあるか！！」

と、俺のほうにも鉄拳が飛んできたが左手で軽く受け流す。

「ちっ！避けられたか。」

もう一発来るかと思ったがあきらめたようだ。

「かがみん、出会って2日目で凶暴さをアピールとは・・・・・・・・  
フラグが立たなくなるよ。」

「立たんていいわ！！」

なんだこのどつき漫才。

「なあ、この二人は前からこんななのか？」

「あはは、うん。」

「まあ、喧嘩するほど仲がいいとも言いますし。」

「喧嘩というよりジャレあいだろ。」

とりあえず弁当の箸を進める。

「わあ、平野君のお弁当おいしそうだね。」

「そういえばそうですね、彩り豊かです。」

「ほんとだ、お母さん料理上手なのね。」

と、泉意外は感嘆の声を上げる。

「ん？違うぞ、これは俺が作った。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ん？なんだ、この沈黙。

「うそでしょ！！こんなに手が込んでるのに！？」

「すごいねえ！てつきりお母さんに作ってもらってるのかと思った！」

「本当においしそうです。私はここまで作れないのでうらやましいですね。」

そして一気にまくし立てられる。

「いや、驚きすぎだろ。」

「そりゃあ男子がこんなにできれば・・・・って、こなたぜんぜん驚いてないわね。」

その泉は黙々とチヨココロネを食べていた。

やっぱりすきなんだな、コロネ。

「あれ？そういえば何で自分で作ってるの？」

と、柊妹がもつともな質問を。

「ああ、俺一人暮らしだから。」

再び沈黙。

なんだ？いつたい。

「ねえ、平野君。もしかしてお父さんとお母さんって・・・・・・・・もう亡くなってる？」

ああ、その心配か。

「安心しろ、健在な上に息子を残して北海道で牧場経営してる。そついいながら玉子焼きをパクリ。」

うむ、我ながらうまい。

「はあああ！？なにそれ！息子をほったらかしなの！？」

「それは少し問題がある気がしますね・・・・・・・・。」

「そつだよ！平野君だけ残して行っちゃうなんて・・・・・・・・。」

「ああ、それも安心しろ。俺が追い出したから。」  
.....

いや、もう沈黙はいいって。

「えーっと、よくわかんないから説明してくれる？」

ちなみに昨日泉には回答済みだ。

じゃあ、少し回想モードに入ろう。

2年ほど前

つまりは俺が高校に入る直前。

「セイカああああ！今帰ったぞおおおお！！」  
バキッ！！

と、仕事から帰って早々抱きついてきた親父を蹴り飛ばした。

「いい加減にしろ！糞オヤジ！！」

「うう.....息子が強くて育ててくれてパパは嬉しいよ.....」  
.....

「そうか、じゃあその気持ちを持ったまま死ねっ！！」

と、とどめを刺そうとすると。

「はいはい、そこまでね。」

「.....母さん.....」

「おお！ママよ！助けてくれてありがベッ！！」  
母さんがとどめを刺した。

「はい、片付いたからセイカはお皿並べるの手伝ってね。」

「へいへい。」

と、リビングに行こうとする。

「なあ母さん。この死体はどうする？」

そっぴいながら親父を指す。

「そのままにしておけばそのうち生き返るわよ。」

「それもそうだな。」

これが俺の家族の日常風景だった。

「・・・・・・・・なんていうか、すごいお父さんね。」

「・・・・・・・・どんだけえ。」

まあ、まだ続きがある

「グスングスン、息子にも嫁さんにも蹴られてパパは悲しいっ!!」

「母さん、しょうゆ取ってくれ。」

「はい、しょうゆ。」

「しかも無視いいいいいい!!」

ドスッ!

「ぐおおおおおお!!」

「やっべ! わりい母さん。おっさんの血が箸についちまった。」

「しっかり洗剤で洗ってきなさい。」

「うい。」

これも日常茶飯事。

「ど、どんだけえ。」

「それよりもお父様は大丈夫なのですか?」

「問題ない、打たれづよいのがMの特性だ。」

「Mって・・・・おい。」

「そういえばもうすぐセイカも高校生ね。」

「そうだな、まあ中学みたいにただ適当にすごすだけだろうけど。」

「もう、少しはお友達作ったら? そのほうが何倍も楽しいわよ?」

「面白い奴がいたらな。」

「ふう、お母さん少し心配だわ。」

「パパも心配だぞおおおお!!」

ひよい。

ドガシャアアアン!!

飛びついたのを避けられた親父がいろいろなところにつづかりながら飛んでいく。

「ん?なんかいたか?母さん。」

「気のせいよ。」

「これも日常茶飯事だ。」

「もうコメントする気力もないわ……………」

「ねえ、やっぱりお母さん心配よ。セイカだけ残して北海道なんて……………」

「気にすんなって、今まで俺のせいで苦労かけたんだから。夢だっただろ?田舎暮らし。」

「それはそうだけど……………」

「それにあの生ごみ状態になってるのもいなくなるし、一石二鳥じゃない。」

「生ごみと二人きりで生活するのはちょっとね……………」

「その点では心配だ。」

「これも……………」

「もういいわ!!」

ってなわけで、俺になきながら抱きついてきた親父を母さんとの同

時攻撃で昏倒させて出発当日になってもまだ決めかねていた母さんを飛行機に乗せた時点で俺の一人暮らしは始まった。

「ってなかんじだ。」

「えらい楽しそうに話してたわね。」

「実際にオヤジを蹴り飛ばすのはストレス発散になって楽しかった。」

「ど、どんだけえ。」

「ほ、本当にお父様は大丈夫なのですか？」

生ごみにまで心配をするなんて…………。

高良さん、あんたはマジでいい奴だよ…………。

「それはそうと一番食いつきそうな奴が反応しなかったわね。」  
そう言つて柊姉が泉のほうを見る。

「ん？ああ、だつてわたし昨日訊いたもん。」

と、ようやく口を開いた。

「は？昨日そんな話してたっけ？」

「ううん。平野君の家で訊いた。」

……………………。

だから沈黙はいいつての！！

「いやあ、昨日試しに尾行したらさあ。家まで見事にたどり着いたわけよ。」

あれ？なんか柊姉の様子が…………。

「しかも家の中に入つてもまったく気づかないし、いやあおもしろかつ…………。」

あ、柊姉のなんかのボルテージがマックスになった気がする。

「……………よそ様の家に勝手に上がりこむなあああああ！！！！」

バキィ！！！！

その日、俺のオヤジに対する一撃と同じくらいの轟音が3・Bに響

き渡った・・・。

第七話 おわり



## 第七話 回想シーンのセカイ（後書き）

第七話投稿です。

これからはテスト週間のため毎日の投稿は無理になります。

土日のどっちかに息抜き程度に

ドS親子の話はどうでしたか？笑っていただけでしょうか？  
ひたすらにセイカ&セイカママのどSっぷりを書きたかったので書きました

ではまた次回！！

## 第八話 バトルのセカイ

俺たちはあまり人通りのない道にいた  
少ない通行人も俺たちを避けていく  
学校の帰り道

俺たちはからまれていた。

## 第八話

キンコンカンコン

と、何の変哲もないチャイムがなった。

「平野君、一緒にかえr……」

「さーで、今日も疲れたな。さっさと帰るか。」

「いや、だから一緒に……」

「おっと、そういえば食材切れたたな。買いに行かねえと。」

フォーメーション（デルタ）

簡単に言々とスルー。

え？一人なのになんでフォーメーションなのかって？

わかりいか、こんちくしょう。

と、泉に我慢の限界がきたのか

「何でさっきからスルーするのさ!!」

「また勝手に家に上がりこまれるのがいやだからに決まってんだろ  
うが!!!!!!」

そう、俺はこの予想外のことばかりする小動物に対して警戒する  
ということ覚えた。

フツ、成長したな、俺。

「もう勝手に上がり込んだりはしないよ、かがみのゲンコツは怖い

し……………」

「ほんとか？信用できん……………」

「どうせ今日ほかがみんなたちと一緒にだからやろうと思ってもできないよ……………」

「なるほど、それなら安心だ。」

柊姉の攻撃力はハンパないからな。

うむ、すばらしきかなツツコミ。

「おーい、こなたー。」

うわさをすれば何とやら。

柊姉妹と高良さんがやってきた。

「っていうか、わがクラスの二人組みは今までどこにいたんだ？」

そう、さっきからの会話に二人がいなかったのは二人が終礼そうそ  
うどこかに行ったからである。

「うん、今日の学級日誌を黒井先生に出してきたんだ。」

「私は図書室に本を返しに行っていました。」

「私は教室から直接来たわ。そんなことより早く帰りましょ？」

俺と泉以外はすでにかばんを持って準備万端である。

「……………やっぱりの面子で帰るのか……………」

俺はみんなに聞こえないようにため息をついた。

その帰り道

「おいおいあんた、何女はべらせてんだよ？」

と、「お前はどこの漫画の悪役だ」と突っ込みたくなるような奴が  
絡んできた。

「俺たちに少しは分けてくれても罰はあたらねえぜ？」

ああ……………なんかかわいそうな奴らだな。

制服を見た限りウチの学校の生徒じゃないようだが。

「なあなあ、キミたちも俺たちと遊びに行こうぜ？」

「はあ？何いってんのよあんたたち。」

「おお、強気な子いいねえ。」

「はあ、面倒なことに……………」

「悪いけど私たち帰る途中だからほかをあたってよ。」

と、泉

「うつ…………お姉ちゃん……………」

「なあ、いいじゃんかあ少しくらいよお。」

「きゃーや、やめてください。」

ああ、もううつとうしい！！

「なあ、あんたら。」

今までは黙っていたがそろそろ口を出す。

「あん？」

「こっちはさつきから時間を無駄にしてる上にあんたらの臭い口臭までかがされてるんだ。いい迷惑だからあきらめてさっさとどっかいってくれ。」

と、挑発してみる。

「ああ？てめえ喧嘩売ってんのか！？」

そう言って俺の胸ぐらをつかんできた。

「ちょ！平野君！？」

「は、離しなさいよあんた！」

二人が心配しているが俺はさらに挑発する。

「だいたい、あんたら今までに鏡見たことあるのか？まだないならいっぺん見てから自分の顔につりあう奴をナンパしてこいよ。」

お、そろそろマジ切れしたか？

「フツざけんなこのガキい！！」

と、そのまま殴りかかってきた。

パシィ

相手のこぶしを手のひらで受け止めた

「……………いま、殴りかかってきたな？」

その事実を口に出すことによって認識させる。

「へ？」

相手が素っ頓狂な声を上げたが無視して続ける。

「正当防衛成立だな。」

そう言つて俺の胸ぐらをつかんでいる手を払いのけ蹴り飛ばす。

「ぐはっ!!」

体のかいオヤジを何度も蹴り飛ばした俺の脚が相手を吹っ飛ばす。

「て、てめえ!!」

もう一人が殴りかかってくるが軽くよけて足払いで転ばせる

「こんのやろう!!」

「ちょ、ちよつと!!あいつナイフ持ってる!!」

「あんなゴツイナイフ確実に銃刀法違反よ!!」

「ど、どうしよう!!」

「け、警察に連絡を・・・!!」

女子組みがあわてているようだが

「いや、大丈夫だ。」

と、一声かける

それが相手をさらに怒らせたのか

「死ねえ!!」

思いつきりナイフを突き出してきた

だが俺は地面を蹴ってそれをよけ

さらに近くのコンクリ塀を蹴って

状況がつかめていない相手の顔に

「お前が死ね!!」

拳を叩き込んだ。

「は、鼻がああああああ!!」

おそろくさっきので骨が折れたのだろう  
オヤジだったら鼻血程度だろうが。

(ここでさらに追い討ちをかけておくか。)

そう思つてぼろぼろの二人に近づく

「ヒイツ!!」

完璧におびえているがここで静かに一言

「………さつさと消えろ。」

「はい!!」

悲鳴を上げて二人は一目散に逃げていった。

「ちよつと!平野君大丈夫!」

「あんたナイフ持つてる相手に無茶すぎよ!!」

「だいじょうぶ!?怪我してない!」

「どこも痛くありませんか!?ナイフで切られたりしてませんか!」  
「?」

「いや、心配すぎだろ、どこも痛くないし怪我もしてねえよ。」

まあ、しいて言うなら殴った右手が痛いだけだが。

「にしてもすごかったね。壁蹴つて跳躍するなんてリアルでできるんだ……」

「わたしもゲームとかでしか見たことないわ。」

「まあ、慣れだよ慣れ。」

正直1年や2年のときも絡まれたことはあつた。

だが今まで毎日のようにオヤジの脅威を跳ね除けていた俺からすれば相手にならなかった。

「けど平野君すごいね!ヒーローみたいだったよ!」

「はい、ですが……」

高良さんの表情が曇った。

「どうしたのよ、みゆき?」

「今回のことが学校で問題にならなければいいのですが……」

。

「みゆきさんは心配性だな。先に手を出したのはあっちだし大丈夫じゃない？」

「それはそうなんですがほかにも……」

「さっきの方々に仲間がいたら報復に来るんじゃないかと……」

「あ、それはあるかもな。」

「実際あったし、というのはよしておこう。」

「大丈夫大丈夫！そのときは私も戦うよ！」

と、なぜか自信満々に泉が名乗りを上げた

「はあ？さっき何もしてなかったくせに。」

「これでも昔は格闘術習ってたんだよ！さすがに壁蹴ったりはできないけど……」

「こなちゃんすごいんだよ。えっと、『たつまきせんぷうき？』がつかえるんだよ！」

「つかさ……それを言うなら竜巻旋風脚よ……」

俺が言いたかったことを柊が代弁してくれた

「ナイスツツコミー！」

「ふっふっふ、平野君、今度勝負してみるかい？」

「いやだ、めんどい。」

「ええ！そこは私とのライバルフラグを立てるところでしょ！？」

「だからフラグって何だよ……」

そしてこのあとなぜか4人が我が家に遊びに来ることになるのだがそれはまた次の話

第八話 おわり

## 第八話 バトルのセカイ（後書き）

お久しぶりです！テストが終わってようやく更新出来ました。

セイカ君の異常な身体能力を見ていただけましたか？

次回は話しの中にもあったとおりセイカの家でのお話です。

では、バイー



## 番外編 キャラクター紹介のセカイ

俺は、この世界にいちやいけないんだ

名前：平野征禍<sup>ひろのせいカ</sup>

身長：172cm

体重：53kg

家族構成：父・母

特技：料理（あくまで技能のひとつで趣味ではない）

喧嘩（決してやりたいわけではない）

勉強（同じくやりたいわけではない）

運動（同じく（ry）

ドラム（独学）

趣味：ネットゲーム（MMORPGがメイン）

某動画サイト（ニコニコ動画）

父親を蹴り飛ばすこと（気分爽快、ストレス解消）

好きなもの：小動物全般・甘いもの

嫌いなもの：クモ・ムカデ・テスト

苦手なもの：女性の涙・お酒

死ぬほど嫌いなもの：トマト（トマト）

特性：女心に鈍感（ギャルゲーの王道ですね）

蹴りで一般人なら5メートルほど吹き飛ばせる（全力でやってみぞおちに入ったら確実に死ぬ）

学業成績：（五段階評価）

現代文 5（現代人なんだからわかって当然だろ？）

古文 3（昔の言葉なんか知るか！！）

数学 5（ほんとなら10くらいほしいところだ）

理科 4（なんとなくわかる）

日本史 4（歴史ってやる意味あるのか・・・？）

世界史 4（黒井先生って寝るとゲンコツされるって本当だろうか・・・。）

英語 2（・・・外国の言葉なんか知らん。）

か知らん。）

体育 5（余裕だな・・・好きではないが）

家庭科 4（裁縫はそこまで得意じゃない）

その他

基本的にはほとんどのことをそつなくこなしてしまう天才肌・・・  
・・・なんだけど「ナゼお前は文型クラスに来たんだ！」といった  
いくらい文型教科より理系教科が得意

顔は一般レベルから見ればかなりのハイスペック（かなり中性的）  
つまり「こんなやつリアルにいねーよ。いや、探せばいるかもしれないけど。」って感じの奴です

小さいころから父親の指導で女性が困っていると無意識に反応してしまう。

この体質のせいで普段無反応な彼が女性を助けることによってフラグが簡単に立ってしまう。

父親を毎日のように蹴り飛ばし、飛びついてくるのをよけているうちに戦闘能力がかなりあがった

こんな完璧超人なセイカだが女心にはとこつつと鈍く、それによつて涙を呑んだ少女たちは数知れず。

一言で説明すれば『ギャルゲーの主人公』

## 第九話 押しかけJKのセカイ

台所を見た

泉と柊妹が料理をしている

リビングを見る

柊姉が掃除機をかけている

ソファーを見る

高良さんが洗濯物をたたんでいる

みんなは楽しそうにしゃべりながら作業をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ。」

俺はため息をついた

## 第九話

不良を撃退した後の帰り道。

泉がこんなことを訊いてきた

「ねえねえ、いつも家事とかは全部自分でやってるの?」

なぜこんなことを訊いてくるのかはわからなかったがとりあえず答える。

「まあ、料理は毎日やってるけど洗濯と掃除はやっぱり毎日とはいかないな・・・・・・・・。」

「やっぱり一人暮らしってたいへんなのね。」

と、柊姉

「慣れればそうでもないな、まあ最近洗濯物とか溜め込んでるけど・・・・・・・・。」

そういえば掃除もあんまりしてないな。

部屋のほうはこまめにやるけどリビングとかは結構埃がたまってるかも。

と、その瞬間泉の目がきらりと光った気がした。

こう、キュピーン！と。

「よし！これからみんなで平野君の家に行こう！！」

「はあ！？ちよつとこなた！いきなり何言い出すのよ！！」

「そうだぞ！見てみる！！あの二人は状況が飲み込めてないぞ！！」  
と、柊妹と高良さんを指差す。

「つまりはだね、今日平野君に助けてもらったお礼で事で私たちが今日だけ家事を手伝ってあげよう！！と、いうことなのだよ。」

「つまりはおまえ、今日も俺ん家に忍び込もうとしたのを柊に止められてたから堂々と来る理由がほしいんだろ。」

と、指摘すると（「」）こんな顔でにやりと笑った。

「イエイエ、ソナコトアリマセンヨ？」

「こなちゃん、すぐ棒読みだよ？」

「つまりはあるんだな？」

そういうと泉は駄々をこねだした。

「いいじゃん！せつかくかわいい女の子が4人も家事をやってくれるなんてギャルゲでもなかなかないイベントだよ！！？」

おい、こいつさりげなく自分もかわいって言いやがった。

確かに一般レベルから見ればまともだと思うが……………。

（胸がな……………。）

と、つい泉の胸元を見てしまった。

ぺったんぺったんつるぺったん

って感じで女性の持つふくらみがまったく見受けられない

「人の胸みてため息つかないでくれる？」

気づかれたようだ

「って言うかお前、前の昼飯のときもそうだったけどお礼とかいつて毎回俺にかまってくるよな？」

そもそもこいつらとかかわるようになったきつかけは泉だ。

「なあ、何で俺にかかわろうと思ったんだ？」

俺にはあまりいいうわさは無い

さつきみたいに不良に絡まれることもよくある

「ん？なんとなくだよ」

「なんとなく!？」

ああ、そうだった

こいつにまともな返答を期待しちゃいけないんだ……

「到着」。

「へえ、結構いいところに住んでるのね。」

「まあな。」

駅から徒歩10分

近くにコンビニにもあるからけっこう立地条件はいいだろう。

「平野君、お邪魔していい？」

柊妹が訊いてきたがいまさら答える必要はない。

「駄目だったらここまでつれてこねえよ。」

俺は玄関の鍵を開けた

「それでは、お邪魔します。」

俺を先頭にして四人も後ろからぞろぞろとついてくる。

リビングの扉を開けて中に入る

「それじゃあちよつと冷蔵庫の中見せてもらうね」。

と、泉は台所に飛んでいった

「ちよつとこなた！人様の家の冷蔵庫勝手に開けんじゃないわよ！

！」

「まあ、別にかまわないけどな。」

俺も台所に向かう

「へえ、ちゃんと食材も買ってある。」

「昨日買い物行ったしな。」

昨日はこの馬鹿が帰った後に速攻でスーパーまで走って買ってきたおばちゃんたちとの戦いのほうが不良との戦いよりきついぜ……

。。

「それじゃあ、私とつかさで晩御飯作るね。」

「えっ!!」

俺は思わずのけぞる

「柊も泉も・・・料理できるのか？」

「んなっ！失礼な!!」

だって、なあ？

「泉はこんなだし、この二日柊妹を見てきたが・・・」

柊妹を見る

「・・・ドジだろ？」

「はうっ!!」

柊妹が固まる。

「大丈夫よ、たしかにつかさは少しドジだけど料理は絶品よ？」

と、柊姉がお墨付きをくれた

「へえ、確かに言われてみると家庭的な雰囲気があるよな。」

「っていうか、こんなとか言わないでほしいな。」

泉が（．．．）こんな顔で文句を言うてくる

「ほう、って言うことは料理に自身あるのか？」

「まあね、家ではご飯とかたいてい私が作ってるし。」

そんな泉の言葉に疑問を感じた

「は？母親はどうしたんだよ。」

「ちよつと！平野君!!」

そんな俺の言葉を柊姉が止めに入った

「もう死んじやってるよ。」

「・・・え？」

俺は言葉に詰まった

「わ、悪い。」

そうか、だから柊姉は昼休みするとき俺の両親がいない理由を死んだからだと思ったんだな。

っていうか、もう少し察してやるべきだったかも

「いいよ別に。すつごく小さかったときで顔も写真でしか見たことないから。」

「泉、お前……………」

申し訳ない気持ちになってきた

以前の俺なら何も感じなかったかもしれないけど

それだけ俺はこいつに気を許し始めてるのかもしれない  
だからこそ、申し訳なかった。

「まあ、その代わりに家事はしっかりできるよ。少なくともかがみんよりは。」

「うわっ！空気がち壊しやがった！！」

「シリアスすぎるの嫌いだもん。」

そう言って泉は笑った

だけど、なぜだろう。

その笑いにはどこか無理しているような感じがした。

なんとなく

本当になんとかなくけど……………。

## 第九話 終わり

## 第10話 つづきのセカイ

第10話（これは九話のつづきです）

「それじゃあ、私たちは台所借りるねー。」

そう言っただけで泉と柊妹は台所へと消えた。

「私たちは何しようかしらね。」

柊姉が話しかけてきた

「平野さんが指示をして下さるとありがたいのですが。」

「ああ。」

どうしたもんか

とりあえず洗濯はやらせるわけにはいかない  
なぜかって？

洗濯物には俺のパンツなんかも混じってるからだ  
さすがにそれは恥ずかしい。

「それじゃあ、私は掃除でもやらせてもらおうかしら。」

柊姉が部屋の隅の掃除機へと走る

「それでは私は洗濯物を……………」

高良さんが動き出した

「ちょ、ちよつと待て!!」

「は、はい！なんでしよう？」

いきなり大声を上げたから驚いたようだ

「高良さんはここで待っていてくれ!!」

俺はダッシュで乾燥機の元へと急ぐ

確か結構な量の洗濯物を今日の朝に入れておいたはず！

「よし、ここから……………」

自分のパンツを抜き取りそれ以外をかごに入れパンツは乾燥機に再び  
放り込む



またダッシュでリビングに戻る

「こ、これたんでくれ……………」

高良さんにかごを差し出した

「はい、わかりました。」

そう言つと高良さんはかごを受け取つてソファ―に座り洗濯物をたたみ始めた。

「ふう……………」

ようやく一段らくした

やっぱり俺も何かやるべきだな

そう思つて俺は乾燥機の中に残したままのパンツを回収しにいった。

「お姉ちゃん、ゆきちゃん。ごはんできたよー。」

柊妹が皿を持つてリビングにもどつて来た

「なあ、量多くないか？」

「え？五人前だからこれでいいと思うけど……………」

ちよつとまて柊妹

「……………おまえら、ここで食つてくつもりか？」

柊妹はコクコクとうなずいた。

「いやいや、家の人が心配するだろ」

「もう連絡入れてあるから大丈夫よ」

くつ！用意周到だな柊姉！！

「だつて平野君いつも一人で食べてるんでしょ？」

と、泉

「まあな。」

「食事は大勢で食べたほうが楽しいですよ？」

と、高良さん

「まあ、もうあきらめてるけどな。」

もう逆らう気もない

「駄目っていつでも無駄だつていうことはよく分かったからな。」

「そういうこと。」

泉も料理の皿を持ってきた  
とりあえず椅子に座る。

「ちょーつとまった!!」

「は？」

料理に手を伸ばした俺を泉がとめた。

「これを食べたいなら……」

そう言うとき泉は携帯電話を取り出した

「アドレス教えてね!!」

「……いただきます」

四人はそう言うとき料理にてをつけ始めた

なんだかんだで全員とアドレスを交換した

もともとほとんど登録をしていなかった俺のアドレス帖は女子のばかりになっている。

「いただきます。」

とりあえず俺は目の前のさらに箸をつけて食べてみた

「へえ……ほんとにうまいな。」

自分もそれなりに自信はあったがこの料理は本当にうまい

「えへへ、ありがとう。」

照れくさそうに柊妹がはにかんだ

泉はむふふと嬉しそうに笑っている

「まあ、つかさは調理師目指してるくらいだしね。」

と、柊姉が言った

「へえ、調理師か……」

この腕なら本当になれるかもしれない

「お、おねえちゃん……」

ばらされた妹は恥ずかしそうにしていた

「まあ、がんばれよ。」

軽く言っただつてもりだが

「うん！」

本人は嬉しそうだった

「結構遅くまでお邪魔しちゃったわね。」

柊姉が時計を見た

「そろそろお暇させていただきますね。」

高良さんも荷物を持って立ち上がった

「お邪魔しました。」

妹のほうも立ち上がる

玄関までぞろぞろと歩いていき

「また明日ね！！」

最後に泉が玄関を出る

最後に一言

「セイカ君！！」

そう言つて

帰つていった。

「……………な、なんだ？いきなり……………」

なぜいきなり名前で呼ばれたのか分からないまま

今日は終わった

第十話 終わり

## 第十一話 女神がいるセカイ

### 第十一話

「おっはよう！セイカ君。」

「おはよう、セイカ君。」

「おはよう、セイカ君。」

「おはようございます、セイカさん。」

朝っぱらからのこの四連コンボ。

「……………ああ、おはよう。」

力なく挨拶を返す。

「どうしたの？セイカ君。」

調子悪いの？

柊妹が心配してきた

「なれない呼ばれ方に軽い抵抗を感じているだけだ。」

そう、昨日の泉が俺の名前を呼んだからかどうかは知らないが  
今ではこの四人が全員俺のことを下の名前で呼ぶ。

「だいたい、なんでいきなり呼び方変えてるんだよ。」

俺は疑問に思ったことはつい聞いてしまうタイプらしい。

「いやいや、いつまでも苗字だとちょっと堅苦しいしね！」

「まあ、私とつかさの呼ばれ方がいつまでも苗字＋姉とかって言う  
のもね？」

つまり

「お前らが俺のことを名前で呼ぶ代わりに俺も名前で呼べと？」

「わ、私は苗字でもかまわないのですが……………」

高良さんが軽く頬を染めている

まあ、出会ったばかりの野郎に下の名前って言うのは恥ずかしい  
のかもな。

「ねえねえ、ためしによんでみてよ！」

「いやだ。」

泉の提案をすぐに蹴る

「お前らが俺のことをどう呼ぼうと勝手だが、俺はいやだね。」

「ふーん、なるほどねえ。」

また泉が手をワキワキさせてこそぐりの体勢に入る。

「んなつー！や、やめろー！」

そんな泉を柊姉が制した。

「アホか！！そもそも、私は強制するつもりはないんだし本人が呼びたくなったらでいいじゃない。」

ま、今のところよぶ気はさらさらないけどな。

「わたしもセイカ君が慣れてからでいいよ。」

「さすがにいきなりというわけにはいきませんし。」

おお、泉が完全にアウェイになってる。

「むう、わかったよ。」

泉が元の体勢に戻った。

ふう、一安心

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

「あ、わたし自分のクラスに戻るわね。」

「うん、またねーおねえちゃん。」

そう言つて柊姉は自分のクラスに戻っていった

「私たちも席に戻りましょうか。」

「そうだな。」

つて言つてもみんなは俺の席に集まっているんだが

そしてあつという間に昼休み

え？ たった一度の改行で時間が過ぎすぎてる？

きにするな、俺は気にしない。

「さてと」

今日も自分で作った弁当を出す

「………つもりだったんだが。」

「あ、あれ？」

ない

ないないないないない！！

「べ、弁当が………ない。」

つまり

BENTOU IN MY HOUSE!!

しまったああああああああああ！！

「セイカ君、一緒にお昼しよう。」

泉が俺の席のほうに来るが返事をしている暇はない

俺は財布を持って教室を飛び出す

「え！ちょ！！どこ行くの!？」

その質問に

「購買!!」

とだけ答えて

再び走り出した

「し、しまった………。」

すでに時遅し

購買は大混雑していた

やろうと思えば全員蹴り飛ばせるがそれを行ったら俺は手が後ろに回ることになる。

ああ、この世には神も仏もない

まあ、信じちゃいないが

「あら？どうしました？こんなところでうなだれて。」

いや、前言撤回

「あ、天原先生!!」

俺の後ろに

女神がいた。

「すみません、弁当いただいちゃって。」

俺は今保健室にいる

「いえいえ、お気になさらず。」

この人は養護教諭の天原ふゆき先生

よく保健室にサボりに来る俺とは顔なじみだ

そしてもう一人顔なじみが

「まったく、弁当を忘れるとはお前らしくもない。」

こちらのちっこいのが桜庭ひかる先生

天原先生とは幼馴染らしくよく保健室に天原先生と話すために来ているためこれまた顔なじみである。

二人ともこの学校で数少ない尊敬できる先生である。

「って言うか、何で天原先生が桜庭先生の分まで弁当作ってんですか？」

目の前には三段の重箱

まあ、そのおかげで俺も昼飯にありつけるわけだが

「そんなこと決まっているだろう、ふゆきはわたしの嫁だからだ。」

「はいはい……。」

「もう、桜庭先生……！」

このやり取りもなれた

初めて「ふゆき」、結婚してくれ。」を聞いたときは盛大に飲んでいたお茶を吹いたが。

「それはそうと平野。」

「何ですか？」

「そろそろお前もプラモの道へ走らないか？」

「お断りします。」

実はこの桜庭先生は相当な模型好きで何度も俺をその道へ引き込もうとしてくるのだ

「うむう、ざんねんだ。お前は手先が器用だからいい職人になれると思うのだが……。」

やっぱり前に天原先生が保健室で仕事用に使っているパソコンを修理したのを見られたのが間違いだった。

「平野君、そろそろお昼休みが終わりますよ。」

そついわれて時計を見ると昼休みが終わるまで後5分

「おっと、それじゃあ失礼します。」

保健室を出ようと思ったがその前に一言

「お昼おいしかったです、ごちそうさまでした。」

「はい、もうサボりに来ちゃ駄目ですよ?」

最後のセリフは聞かなかったことにして俺は全速力で教室に向かって走った。

## 第十一話 おわり



## 第十二話 仮想セカイ

「何でいるんだ。」

目の前の青い小動物に向かって言う  
さて、問題だ。

問：ここはどこでしょう

答：俺のへや

問：今はいつでしょう

答：あつという間に時間が過ぎて土曜日の朝8時半

「忍び込んだんだよ。」

「さーて、警察警察。」

俺はあわてず騒がず携帯を取り出して110番を押そうとした  
が、青い小動物に携帯を持っていかれる

「ちよーっと！さすがにこれはないでしょー！」

何を言ってるんだ、お前のやってることは立派な不法侵入だ。  
警察に連絡して何が悪い。

「さあさあー！早く着替えてー！」

「な、何なんだよー！」

俺のタンスを勝手にあさって俺の服を投げてよこす

「今日はデートに行くよー！」

「はあ！？」

## 第十二話

「デートって……お前……」

デートというからどこに行くのかと思ったら

「ん？どうかした？」

「どうかしたもクソも……。」

駅の看板を見上げた

そこにはつきりと書かれている

『秋葉原』と

「帰る。」

クソツ、電車代が無駄になった

俺は帰りの切符を買おうと券売機へいく

「いやいや！！ちよつと待ってよ！！」

そんな俺を再び泉が引き止めた

「今日はセイカ君も喜べるイベントがあるんだよ！！」

「んなもんはアキバにはない。」

「いやいや、試しに見るだけ！！ね！？」

そこまで言うならばしょうがない

「くだらないことだったら昼飯一週間奢れよ！」

「ふふん、いいよ。」

なんだ、自信満々だな。

いったい何のイベントなんだ？

徒歩15分……

「こ、これは！！」

一軒の大型のネットカフェの看板に書かれた文字、それは

『新作オンラインゲーム「ラッキースターユニバース」 テスタ

ー募集イベント！！』

テストとは新しいオンラインゲームなどを始める際に負荷テスト  
やシステムが動くかどうかをプレイヤーを募ってテストするもの。

これにはたいいてい一部の人しか参加できないうえに、ものによって  
は正式サービスにデータが引き継がれるものがある。

「いやー、新しいゲーム探してたら偶然このイベントの情報をゲッ

トしてね。

セイカ君、ネットが好きでしょ？」

「・・・・・・奢りはしなくていい。」

俺のその一言に満足したのかむふふ、と笑って満足そうに笑った。

「と、とりあえず中に入るか。」

「はいよー。」

「いらっしやいませ、見学ですか？それとも応募済みですか？」

「へ？応募なんて・・・・・・。」

俺はこのイベントを今知ったんだから応募なんてしているわけがないのだが・・・・・・。

「はい、二人分。」

そう言っただけでコピー用紙にプリントアウトされているカードを二枚受付に人に渡した。

「はい、ではお二人は33番テーブルと34番テーブルでプレイしてください。」

そう言っただけで中に通された。

「俺の分も応募してくれてたのか？」

「まあねー。もともと誘うつもりだったからあらかじめ二人分応募しといたのだよ。」

こいつ、ふだんは俺のことからかったりしてくるけど意外といい奴なんだな。

「33番と・・・・・・あ、セイカ君、ここだよー。」

泉が席を見つけたらしく俺を呼ぶ

「って言うか、なんでネカフェでわざわざ？普通に抽選でいいだろうに・・・・・・。」

「なんか実際にプレイさせるみたいだよ？けど、どうやってテストー決めるんだろう。」

そうやって泉と話しているうちにアナウンスが入った

『皆様、お手元のPCよりゲームを起動してください』

俺は指示どおりPCのデスクトップからゲームを起動させる  
あつという間にタイトル画面が表示される

『PCの前の用紙のIDとパスワードでログインをお願いします』

「えーつと……」

カタカタとIDとパスワードを打ち込む。

『キャラクターを製作していただいてかまいません、全員がキャラクターを製作しゲームにログインしたらゲーム内で指示を出します。』

俺はキャラクターを作る

「職業は、戦士・魔導師・盗賊・僧侶か……」

俺は戦士を選ぶ。

そうすると戦士についての説明が出てきた

「戦士はこの後刀剣士か拳闘士か魔剣士の三つになるのか……」

「」

まあ、まだそこまで実装されていないからいいんだが

キャラクターネームを入力する

『セイカ』

そして俺はログインボタンを押した

十二話 終わり 続くの!?

### 第十三話 ダンジョンバトル!!

「ぬおおおおおお!!」

走る!

走る!!

走る!!!!!!!!!

ダンジョンの通路いっぱいを転がってくる岩から逃れるためひたすら走り続ける

「大体!なんでトラップを解除する盗賊がトラップに引っかかってるんだよ!!」

俺は隣を走る青い髪の盗賊……泉こなたに向かって罵声を浴びせた。

### 第十三話

「つまり、特設ダンジョンの最下層の宝石を調べた上位1000名が テスターになれるわけだな?」

俺はヘルプページを見て条件を確認してきた泉に再度確認する。

「うん、ちなみにそのダンジョンは推奨レベル20だったよ。」

「おいおい……一日で20まであげるってことか?」

オンラインゲームというものは普通の家庭用RPGなどに比べてはるかにレベルが上がりにくくなっている。

たいていはLv10くらいまではすぐにたどり着くのだがそこから はだんだんとレベルが上がりにくくなっていく。

「けどこのゲームすごいね。ボイスチャットもできるなんて。」

そう、このゲーム、専用のマイクつきイヤホンでボイスチャットまでできるようになっている。

ただし、パーティーチャットのみだが。

ちなみに操作も専用のコントローラーを使うのだ。

「仲間を探すか？それとも狩りにいくか？」

「狩りしながら魔術師系の人探そうよ。」

前衛二人だから後衛が一人くらいいないと。」

「そうだな。」

さつきNPCから貰った装備をつけて町の外へと出た。

「この星は地球<sup>アース</sup>、いわゆる初心者向けのステージだね。」

このゲームはさまざまな惑星を行き来しながら冒険するらしい。

「とりあえず敵を探さないとな。」

俺はコントローラーのボタンを押してエネミーサーチを起動する

「もう少し東のほうに3、4体の群れがあるな。」

「んじゃあそこにいこっか。」

「だあつー！」

片手剣を横なぎに振ってスライムを切り伏せる

「おい泉！！ロバーアイテム（盗む）ばかりしてないで戦え！！」

「ちよつとセイカ君！リアルの名前でよんじゃ駄目だよ！！」

「くつ……こ、こなた！！」

俺が本名を名前にしたようにこいつも本名をそのまま名前にしていた。

本来なら本名を使うのはタブーだが俺も人のことは言えない。

そのせいで俺はこいつを“こなた”と呼ばなくてはならないのだ。

いずm……こなたは俺の反応が面白かったのかボイスチャット越しにむふふ、と笑っていた。

「あ、剣士用の盾落ちたよ。」

い……こなたが二本のナイフでウルフ（Lv3）を切り

伏せるとアイテムがドロップした。

それでちょうど戦闘終了。

「俺はLv3になったな。」

「私も。」

あ、これさっきの盾。」

「……こなたからアイテムを受け取り装備する。」

「これで多少は無理できるな。」

さっきまでは回復薬ケチって突っ込めなかったし。」

このゲームは盾を装備するとガード行動ができるようになる

「まあ、戦士の本分は攻撃と壁だからね。」

そっついながら……こなたはエネミーサーチを起動する。

「ふう、こんなもんか。」

辺り一帯のモンスターを片付けてコントローラーを手放す。

「結構レベルも上がったねー。」

ちなみに今は俺がLv18、……こなたがLv16である。

装備品も俺は盾の役割もする大幅の大剣、金属を使った軽めのもの  
い。

こなたは二本のショートソードに皮で補強した軽装である。

スキルもそれなりに覚えた。

「結局後衛の奴は見つからなかったな。」

「まあ、しょうがないよ。」

そろそろ特設ダンジョン行こう。」

俺は再びコントローラーを握ると目的のダンジョンを目指す

そして冒頭に至る

「はあ、はあ、はあ。」

な、何とかなったか……。」

「そ、そうみたいだね。」

この中に入る前に補給用のキャンプがあったのだがさっきの俺たち  
のようにトラップに踏み潰されてキャンプまで戻された人たちが大

勢いた。

だがダンジョンにはトラップだけでなく

「ちっ、とうとう来たか。」

「ダンジョンに入ってから初めての戦闘だね。」

モンスターもいる。

「はあああああ!!」

大剣を横なぎに振って一度に複数のモンスターにダメージを与える。  
そしてやっぱりこなたの奴は……。

「お宝ゲットだぜ!!」

某ポケンの主人公の決め台詞を叫びながらアイテムを盗みまくっていた。

「おい!手伝え!!」

そう叫ぶとこなたはあらかじめ盗み終わったのか動きを止めている

「あゝ、ちよつと待って。今装備品でだから……。」

すると泉の片方のショートソードが赤くなった。

「火属性のエンチャント武器か?」

「そのとおり!!思いつきりつくよー!!」

こなたがこつちに盗賊特有の速さで突っ込んでくる

「それじゃあ俺も行くぜ!!」

ショートカットキーからスキルを発動させる

「ブレード・ライン!!」

エフェクトと同時に周囲に剣圧を放つ。

すっ飛んだモンスターに向かってこなたが走る

「パラライナイフ!それからあゝ。」

複数のモンスターに麻痺効果のあるナイフを投げさらに追撃を叩き込む

「瞬牙!」

かなりの速度で麻痺させたモンスターを斬り刻んでいく。

「よし、片付いたな。」

「おおゝ、装備もドロップしてるゝ。」



「おつ、俺が使えるそうな大剣だな。」

俺はアイテムを拾って装備する

「これも火の属性がついてるな。」

「ここのボスは火に弱いんじゃない？」

そうだ、この先にはボスがいる。

正直二人だけじゃ心もとないんだが……。

まあ、しょうがないだろ

「セイカく〜ん！この先みたいだよ!!」

目の前にあるのはあからさまにそれっぽい扉  
回復アイテムで回復して

「よし、行くぞ！」

扉を開けた…………。

第十三話 おわり もうちょっと続くよ!!

## 第十四話 フラッシュバック

「はあ、はあ……。」

コントローラーを操作して敵の攻撃をぎりぎり避ける。

「ちょ、ちよっときつついかも……。」

こなたも懸命にかわしているが向こうも指が痛くなっているころだろつ。

「おい！！こなた！！」

一瞬の油断で

敵はこなたに向かって拳を振り下ろした

## 第十四話

「じゃあ、扉を開けるよ。」

ダンジョンの最下層

この先にはボスがいるのだろう

「ああ、頼む。」

ステータス上昇アイテムも使い、さらに薬でHP・MPも回復してある。

俺たちは扉の中に入った

画面にNow Loading・・・と表示され再びダンジョンの中が表示される

そして

「……………宝石だ。」

こなたが言った

そこは小部屋になっていてすぐ真ん中に宝石があつた。

「ボス戦はないのか？」

俺は宝石に近づく

「たぶん調べるとバトルになるんじゃない？王道だよね。」

なるほど

そう思いながら宝石を調べた

『これよりフィールド転送を行います。』

「ほらね？」

予想通りのメッセージが表示される

『準備はいいですか』

「OKだ。」

俺が返事をするのと転送のモーションが起こり  
また画面が切り替わった

「やっぱりボス戦用の部屋はでかいな。」

転送された先はさっきの小部屋の5倍はあるであろう大部屋  
あからさまに大型モンスター用の部屋だ

「セイカ君、そろそろみたいだよ。」

こなたが武器を抜いて戦闘体勢に入った。

「よし。」

これから出てくる敵をを倒せば テスターか……………。

「来た！！」

こなたが叫んだ

上から大きな氷の塊が降ってきた

それに手足がついて……………。

「アイスゴーレム……………」

それにターゲットイングするとそう表示された

「だから火属性の武器か……………」

俺も大剣を抜いた

「それじゃあ、いっくよー！！」

こなたが走り出すのに続いて俺も敵に向かっていった

「くそっ！硬い！」

さっきからスキルを連発しているがともにダメージが通らない

属性値でなんとか稼いでる状態だ。

「むゝ、やっぱレベル足りなかったかな？」

「かもな。」

推奨レベル20

だがこのアイスゴーレムはレベル25である

まあ、ダンジョンレベルよりボスのほうが高いのは当然なのだが

「うおおおお！」

また拳が振り下ろされるのをジャンプアクションでよける

「くっそ……こうなったら奥の手だ！！」

俺はショートカットキーからひとつのスキルを選択した

「ああ！クラスアビのこと忘れてた！！」

「忘れるなよ！！」

ご存知の人もいるかもしれないがクラスアビリティーと言うものがある。

これは一日一回のみ使える職業によって違う特別スキルだ  
ちなみに俺のは

「アンラインヴァルド！！」

一定時間無敵になり、攻撃力も上がる

無敵状態なので攻撃などお構い無しに突っ込んでスキルを叩き込む

「超必殺技レベルでいくよゝ！！」

こなたも発動したのかすごい速さで攻撃を避けながらゴーレムにか  
なりの連撃を叩き込んでいる。

「お前の相手はこっちだ！！」

こなたのクラスアビは攻撃と敏捷が格段に上がるが防御は紙切れ並  
みになってしまう

だから俺はひたすらゴーレムの攻撃対象を俺に移していた

「よし！いけるぞ！！」

敵のHPが赤ラインにまでなった  
だが

「あ。」

クラスアビの効果が切れた

(まずい!!)

俺は切れてしまったが俺より後に発動したこなたはまだ続いている  
つまり、防御が紙切れ同然なのだ

「こなた！戻れ！！」

こなたもまずいと思ったのか攻撃をやめて敵から離れる

俺とは距離があるがこなたの敏捷性ならすぐにこっちにこれる

「うっ、もう少し続けばなぁ。」

もうそろそろこなたのクラスアビも解けそうだったが

「こなた！！避ける！！」

言うが早いか遅いか

ゴーレムの拳が

こなたを吹き飛ばした

ドクン

なんだ？

ドクン

何かが……………

ドクン

フラッシュバックする……………

ドクン

女の子が吹き飛ばす姿

ドクン

見覚えが………ある？

ドクン

俺は        どこかで

「おーい、セイカくん。」

こなたの声で我に帰った

「早く蘇生してくれると嬉しいんだけどなあ。」

目の前のゲーム画面でこなたが戦闘不能になっていた

「わ、悪い！」

俺は一個しかないけなしの蘇生アイテムを使った

「ふう、たすかったあ。」

こなたを蘇生してすぐにゴーレムから離れる

この距離なら攻撃は来ない

「どうする？もう勝ち目がないぞ？」

「けどここで負けるとダンジョン潜りなおしてる間に1000人埋まっちゃうよ。」

そうなんだよな………

「誰か助っ人でもいれば………。」

望んでも無いものを望んでしまうのは人間の性<sup>さが</sup>だな

「しょうがない、回復アイテムのこり押しでいくぞ。」

「うう、それしかないか。」

こなたは打たれ弱いので後ろから投げナイフで援護射撃  
俺はひたすら攻めた

だが

「もうげんかいだよー!!」

「くそつ。」

薬も切れた

MPもない

「まけたな、これは。」

俺はコントローラーを手放した

ほんとに悔しいな、HPは後1ドット分だけなのに  
だが

ゴーレムが崩れ落ちた

「!？」

俺は画面を見る

そこにはもうひとつの人影があつた

「いやー、危ないところやったなあ、お前ら大丈夫かあ？」

ほかのプレイヤー

「だ、だれだ？」

俺はそのプレイヤーを調べた

名前は「ななこ」

ん？この関西弁にななこって言う名前……。

「「黒井先生!？」」

こなたとそろって声を上げた

「おお、やっぱり平野に泉やったか。」

いやー、ダンジョンの中で見つけたときまさかと思うたけどやっぱり  
二人やったかー。」

「せんせー!!大スキー!!」

泉が黒井先生に抱きついた(ゲームで)

ああ、あれは抱きつくのモーションだな

「はっはっはっ!けどこれで三人そろってテスター……………」

『モンスターの討伐を確認。』

パーティーを組んでいないため止めを刺した“ななこ”ガテスター





「はっ!!」

「んふふ、ゲーム内でボイスチャットで呼んでたせいでなれちゃったのかな?」

「うるさい! 帰るぞ泉!!」

俺はあわてて泉に言い直した

「ん、やっぱり私はこなたって呼ばれるほうがいいな。」

俺の顔を覗き込みながら言ってくる

こそぐりとかを使った脅しではない純粋な願い

俺は「はあ。」とため息をついて

「こなた。」

そう呼んだ

「うん、セイカ君。」

こなたもそう俺の名前を呼んだ

こなたと分かれ、家で夕食と風呂を済ませた後考えた。

あのフラッシュバックの映像はなんだったのか

小さな女の子が吹き飛ぶシーン

だけどいくら考えても答えは出ず

俺はそのまま眠りに落ちていった

#### 十四話 おわり

## 第十五話 再会の日曜日

「今日はっ！！」

バーン！！

「天下のっ！！」

ババーン！！

「日曜日　　！！」

バババババーン！！

無理やりテンションを上げてみた

「やめた、アホらし。」

俺はたまっている洗濯物などを片付けるべく動き始めた。

## 第十五話

「ふう、こんなもんか。」

ようやくすべての洗濯物を干し終え掃除も終わらせた。

「もう昼か……………」

気づいたときにはもう12時になろうとしていた

「ああ……………そういえばもう食材ないんだっけ。」

この前こなたたちによって五人分の材料が使われて（材料費は後で払ってくれた）冷蔵庫の中身はその後の食生活ですっからかんである。

「今月は余裕あるし……………外で飯でも食いがてら買い物してくるか。」

俺は新聞で天気を確認する

よし、今日は日本列島の周りに低気圧無し。

一日快晴だな。

「よし。」

俺は財布に買い物のための金を補充して玄関を出た。

「買い物した後に昼飯だとかさばるから……先に飯か。」  
俺は街を歩きながら店を物色する

「……高い。」

やはり外食とはいえ贅沢はできない

「ワクドナルドが妥当かな……。」

そんな独り言を言いながら歩いていると

「うわっ!!」

突然目隠しをされた

「だーれだ？」

突然そんなことを言ってきた

ああ、懐かしいなこのパターン

こなただろ？と思った奴は読みが甘いな

「八坂」

俺はその手をどけながら振り向いた

「おおー、正解!! さっすがせーちゃん先輩だねっ!!」

「その呼び方はやめると……。」

金髪に少し黒めの肌

その中に輝いている笑顔

八坂こう

そしてその後ろに

「ああ、永森もいたんだな。」

「お久しぶりです。」

猫目に髪質のせいか二つに分かれているポニーテール

永森やまと

その二人がそこにいた

「いやー、ホント久しぶり!! いつ以来でしたっけ!？」

俺たちはワクドに入っている

「去年の学園祭以来よ。」

八坂の質問に永森が答える

「ああ、そうだったな。」

この二人は中学のときからの付き合いだ

八坂は他人を寄せ付けない俺に対してなぜかいつも話しかけてきて永森とも連鎖反応のごとくそれなりに親しくなった。

「って言うか先輩、まさかと思うけどいまだに話しかけてくる人全員無視してるんじゃないでしょうね!!」

八坂、お前は声がでかい

「まあ、最初はそのつもりだったんだがな。」

「それじゃあ、今は違うんですか？」

と、永森が言う

「ああ、なんか八坂に似たような奴がいてな。」

そうだな、こなたたちの俺へのかかわり方は八坂に似ていたかもしれない

「こうが他にも……すごく大変そうですね……。」

「ああ、大変だ。」

「ちよつとちよつと!!二人ともひどくない!？」

この会話の流れは相変わらずだな

俺と永森がSっ気全開で八坂をいじって八坂が突っ込みを入れる  
永森とは結構気が合うのだ

「まあ、それはそうと今日は二人ともどうしたんだ？」

ここは結構二人の住んでいる地域からはあなれていたはずである  
やっぱり買い物だろうか

「買い物ですよ。」

やまとの服選ぼうと思って。」

「私はいいつて言っただんですけど……。」

無理やりつれてこられたんですね、わかります。

「相変わらず強引な……。」

昔は休みの日にたたき起こされていろいろと連れ回されたこともあ

つ  
たな。

さすがに不法侵入はしなかったが

そう考えるとこなたよりは多少は常識的だ。

「そろそろ暖かくなってきたし、春物の服買わないと！」

まあ、俺は去年から成長していないから買う必要もないが

女の子は大変だな

「あ！そうだ！！せーちゃん先輩も一緒に選びましょーよ！！」

「なっ！じゅっ！？」

永森が驚いた声を上げる

まあ、なんか昼飯奢ってもらったしそれくらい付き合ってもいいだろっ

この二人は嫌いじゃないし

「まあ、別にいいぞ。」

「せ、先輩！？」

今度は俺に対して驚きの声を上げる

「よし！！それじゃあ出発しよう！！」

「お前は声が大きすぎだっ！！」

「先輩もです……。」

そんな漫才のような会話の後俺たちは店を出た。

第十五話  
おわり

## 第十五話 再会の日曜日（後書き）

この後はセイカとこう&やまとの休日を書きます。

ちなみにやまとはゲームオ리지ナルキャラクターなので分からない人もいるかもしれませんが詳しくはググってください。

## 第十六話 戦いの果てに（大嘘）

「これとこれはどうだ？」

「先輩、センスなさすぎです。」

「くつ。」

シャツとズボンを元の位置に戻す

「これはどうだ。」

「いいと思いますけど……小さいですね。」

またもとの位置に戻す

「これとかどうだ！へそ出しルック……」

「絶対にいやです。」

またもとの位置に戻した

「女って大変だな……」

「さつきから先輩は変なのばかり選びすぎなんです。」

永森の容赦ない言葉に俺はため息をついた

## 第十六話

「ほらほら！せーちゃん先輩！！やまと！！早くしなよー。」

「だからその呼び方は……」

「先輩、こうに何言っても無駄です。」

いや、分かつてはいるんだが

突っ込まなければいけないんだ、なんとなく。

八坂の先導のもと、俺たちはデパートにたどり着いた

「ん？デパートでいいのか？」

「ああ、ここ結構いろんなお店が入ってて品揃え豊富なんですよー。」

「そうなのか」

だったら食材の買出しもしていくか

当初の目的を忘れないように気をつけなければ  
そうしないと今日の晩飯も外食になってしまう

「先輩？行きますよ。」

「ああ、悪い。」

永森に小突かれて俺もデパートに入った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「どうしたんですか？そんなに三点リーダー並べて。」

八坂が無言で立ち尽くしている俺に声をかけてくる

「先輩はこういうところは初めてですか？」

永森が声をかけてくれる

「こんなところに出入りしてたら俺は変態だろうが!!！」

俺たちがいるのは思いっきり女性向けのファンシーな感じの服屋だった。

とはいっても、置いてある商品は普通のものだが内装はあからさまに女性が入りやすいようなレイアウトになっている。

つまり、男はそこにいるのもはばかれそうな場所である。

「おれ、外で待ってr・・・・・・・・。」

「はいはい、やまとの服一緒に選ぶんだから。」

逃げない逃げない。」

くそっ、八坂のやつめ。

さっきワクドでからかわれた仕返しとばかりに俺の首根っこをつかんで店の奥のほうまで引きずっていく。

案外、こいつは力が強いのだ

「ああ、もうわかった。」

分かったから離せ。」

俺は八坂の手を振り払う

「ほら、永森。」

さっさと選ぼうぜ。」

そう言っただけで俺は永森の手を握って引っ張っていく。



「え、ちよつと！先輩！？」

「うつわー、せーちゃん先輩大胆！！」

「ちよつと、こう！！」

永森が八坂を怒鳴る

心なしが顔が赤いように見えるが……気のせいだろうか。

view change 八坂こう

（あーらら、やまとつてば顔赤くしちゃって。）

あの子は一見クールに見えるが実はかなりの甘えん坊なのだ

まあ、甘える対象は皆無といってもいいくらいだが

（私には甘えてくれないしねー。）

今日、街の中でせーちゃん先輩を見つけたとき。

やまとつてば、はたから見てもわかんないだらうけどすごく嬉し

そうな顔してたんだよねえ。

今は平静を装ってるけどきつと心臓バクバクなんじゃないかな。

（せーちゃん先輩も罪作りだよねー。）

あの人は女性にモテる

普段は他人を寄せ付けないところがあるのだが、本当に困ってる人を見ると放っておけない。

そんな優しいところがあることをに他の人どころか本人さえ分かっていない。

まあ、そんなところがなくても顔はいいからね。

（いっぺんせーちゃん先輩で同人誌書いてみようかな………。

）

いや、やめておこう。

ばれたら絶対に殺される、マジで。

（そういえば、せーちゃん先輩と私たちが出会ったのもせーちゃん先輩が私たちを助けてくれたんだよね。）

中学二年のころだっただろうか

街で不良に囲まれて連れて行かれそうになったとき

（すこかったな。全員鼻血垂らして氣い失つてたもんな。）

正直、学校ではじめてみたときは怖かった

放つてるオーラがナイフみたいにトゲトゲしてて近寄りがたかったけど

その事件をきっかけにして私たちはひたすら先輩に声をかけた。

やさしい人だつて私もやまとも知ることができたから

外に連れ出して遊びまくったこともあった。

（その結果、ここまで仲良くなれたんだよね。）

まあ、仲良くなりすぎて先輩はやまとの気持ちに気づいてないみたいだけど。

本っ当に先輩ってエロゲキャラだな。

「さて、私もそろそろいきますか。」

私は服の組み合わせに苦戦しているせーちゃん先輩に助け舟を出すべく二人の下に駆け寄った。

## 第十六話 戦いの果てに（大嘘）（後書き）

今回から最後にらきすたのアニメの次回予告風に次回予告をつけた  
と思います

### 次回予告

さうて、次回のキミセカは？

セイカだ。

なんだかんだで服を選んだんだが正直俺は役に立てなかったな。  
っておい！！あそこにいるのは！！

おい！走れ二人とも！！

次回「厄日」

まあ、楽しみにしてくれよな

## 第十七話 厄日

### 第十七話

「何で俺が荷物持ちまでさせられてるんだ？」

後輩二人と服を見た後

自分の買い物を済ませてとつと帰ろうと思ったのだが

「なーに言ってるんですか！かわいい後輩にこんなに荷物もたせる気ですか！！」

案の定、俺は荷物持ちをしていた。

「先輩、少し持ちましようか？」

永森が声をかけてくれる

ああ、俺はいい後輩を持ったな

けどな？永森。

そう言ってくれるくらいならはじめから自分の分は自分で持つてくれ。

「もういいって、その言葉だけで十分だ。」

俺は荷物を担ぎなおした

しかしその視線の先には・・・・・・・・・・

「げえっ！！」

はたから見れば姉妹だろうが俺はその二人を知っている

一人はこなただ

あの口リ貧乳を見間違えるはずもない

そしてその隣にいるのは・・・・・・・・小早川だったっけか？

前に食堂で会ったことがあるはずだ

しかし問題はそこではない！！

「せーちゃん先輩？どうかしたんですか？」

この二人と俺がいるところを見たら必ずあいつはこう反応するだろ

う。

『あつれー？セイカ君、二人も女の子連れてデート？  
普段女の子に興味なさそうな感じなのに………やっぱりセイ  
カ君も男の子だねー』

ってことになるに決まってる！！  
しかもあいつら、こっちに向かってくる！！  
ってことはこのデパートが目的か！？

「あの、先輩？」

そんな永森の言葉も耳に入らない  
こうなったら………

「え！？せーちゃん先輩！？」

「どうしたんですか！？」

両腕にスーパードッグと紙袋を引っ掛けて二人の腕をつかんだ  
「走るぞー！！」

俺はこなたたちが向かってくる方向と反対に走り出した

「はあ、はあ、はあ。」

「ぜー、ぜー、ぜー。」

何とか見つからずにすんだ

俺たちは路地裏に入って息を整えるべく休んでいた

「はあ、せ、先輩。」

「いったい、はあ、どうしたんですか？」

「じつはかくかくしかじかでな。」

俺は二人に理由を説明したんだが

「それだったら荷物置いて自分だけトイレにでも隠れてればいいじ

やないですかー!!」

と、八坂に怒られた

そうですね、俺も後で気づきました

「せーちゃん先輩、私の荷物かしてください。」

そう言つて八坂が手を出したのでその手に紙袋を握らせる

「どうかしたの、こう?」

永森が不思議そうな顔をしている

「もう私は大丈夫だから先に帰るね。」

せーちゃん先輩はやまとを家まで送つてあげること!!」

「はあ!?」

「いいですね!!」

その八坂の勢いに押されてうなづいてしまった。

「それじゃーね、やまとー。」

そう言つてやけに男らしい後姿で八坂は去つていった。

「私たちも帰りましょう。」

八坂が去つて数分後

体力も回復したのか永森が立ち上がった

「そ、そうだな。」

それに釣られて俺も立ち上がった

だが

「っ!!」

ドクン

またこれか

ドクン

今度は映像は流れないけど

ドクン

フラフラ・・・・・・・・・・する・・・・・・・・

ドサッ

「きゃっ！」

俺は永森の悲鳴でようやく我に帰った

「せ、せん・・・・・・・・・・ぱい？」

ん？なんかやわらかいな

コンクリートにしてはやわらかすぎるし・・・・・・・・あったかい

「あ、あの・・・・・・・・。」

顔を上げてようやく現状を理解する

簡単に解説すると

俺が

永森を

押し倒しています（ゼロ距離）

こ、この状況はまずいー！

「す、すまん！ー！」

そついいながらとりあえず地面に手をついて上半身を起こした

ドクン

「っ!!」

さつきとは違う鼓動

永森の顔が目の前にある

いつかのこなたと倒れたときと同じくらいの距離に

こうやって間近で見るところ思ってしまう

（　きれいだ。）

永森はかわいいというよりも美人という部類に入るだろう

潤んだ瞳

長いまつげ

柔らかそうな唇……って何考えてんだ俺は!!

だが俺は確かに見とれていた

後ろのどす黒いオーラに気づかないくらいに

「セイカ君？」

突然その名前で呼ばれてビクツとなる

この声は………もしや………。

「ひ、柊………かがみさん？」

恐る恐る後ろを振り返る

「へえ、よく分かったじゃない。」

そこにはなんかよく分からないオーラをまとって髪をたなびかせている柊姉の姿があった

「こんな路地裏に女の子引き込んで押し倒すなんて………見損なったわ。」

まずい、完璧に誤解している!!

「そういうことはしないと思ってたのに………ケダモノ。」  
グサア!!



ケダモノ

その言葉が俺の心に深く突き刺さった

「い、いやまて柊。」

これにはマリアナ海峡並みに深いわけが……………。

そ、そうだ。ここは永森に説明を……………!!

「って、氣い失ってる!？」

永森は顔を真っ赤にして目を回して氣を失ってた

「それじゃあそのわけを説明してもらおうかしら？」

一歩ずつ

俺に歩み寄ってくる

「ま、まて、やめろ!! 話せば分かる!!」

そんな俺の言葉もむなしく

俺は柊の鉄拳制裁を食らった

俺が痛みに悶絶しているうちに永森は目覚めて

俺と永森の関係やこうなってしまったいきさつを説明してくれた

「ああー、なんていうか……………ご、ごめんね? セイカ君。」

ばつが悪そうに柊は謝って用事を思い出したといって去っていった

永森も顔が真っ赤だったけど何とか自分で帰っていった

送っていいこうと思ったのだが一人で帰るといって訊かなかった

家まで帰り着いて

俺は頭のたんこぶをさすりながらこう思う

ああ、今日は厄日だ

## 第十七話 厄日（後書き）

### 次回予告

さーて、次回のキミセ力は？

こなたです

休日が終わって学校に来てみたらなんだかセイ力君すごく疲れてるねー。

まあ、それはそうと。

『セイ力君と仲良くなろう作戦』を続行しなくっちゃー！！  
とりあえずはみんなを下の名前で呼ばせないかねー。

って、んん？あの二人は……………

次回「能動オタクと輸入オタク」

お楽しみにねー！！

## 第十八話 能動オタクと輸入オタク

View of KONATA

「フンフフン」

と、鼻歌なんかを歌いながら学校に向かってみる

今日も「セイカ君と仲良くなるう」作戦を実行しなくっちゃね。

セイカ君ってかなりのギャルゲ主人公だし。

リアルでギャルゲの風景が見れるなんてなかなかない体験だよ。

「セイカ君はツンデレっぽいからかみと気が合うかもね。」

とりあえず、しばらくの目標はみんなのことを名前で呼ばせることだね

キャラの心を開かせることがギャルゲ攻略の基本だよ！！

ん？ってことはすでに名前で呼ばれてる私は攻略対象のひとりってことだよ。

「まあ、それは無いか。」

私みたいなオタクをセイカ君が好きになるはずないし。

そう思いながら私は校門をくぐった。

## 第十八話

「おっはよー！！」

「あ、こなちゃんおはよー。」

私が挨拶したらすぐにつかさが反応してくれた

「おはようございます、泉さん。」

「おはよう、みゆきさん。」

うむ、今日もみゆきさんはボインボインのナイスバディだな、うらやましい。

いやいや、貧乳はステータス！！自分のスペックに自身をもて！！私！！

「あれ？かがみとセイカ君は？」

いつもの面子に二人足りないことに気がつく

「お姉ちゃんはまだ自分のクラスにいるよ。」

「セイカさんは……まだいらしてませんね。」

「まだいないって……もうすぐ予鈴なるよね？」

私も結構ぎりぎりだったからそれより遅いとなると遅刻か……

・あるいは欠席かも。

そんなことを考えていると

ガラッ！！

とドアが開いて

「……おはよう。」

かなり疲れた顔のセイカ君が入ってきた

「あ！セイカ君おはよう。」

「あの、大丈夫ですか？顔色が優れないようですが……」

「本当にかなり疲れた顔してるね、どしたの？」

セイカ君は自分の荷物を置くとそのまま机にぐったりと突っ伏した

「朝っぱらからわけの分からん二人に追いかけられた……」

「

二人？誰だろう……？

「片方は黒い髪の毛のめがねで、もう一人は外人さんだったな……」

うーん、心当たりがないなあ……

「その方たちはなにをしてきたのですか？」

「なんかされたってわけじゃないが……『いい素材』だの

『次のカップリングはこれだ』だの訳の分からんことを言ってたな。

「私はぴきーンとひらめいた  
きつとその二人は……………」

「腐女子だね!!」

これは確信だ

「こなちゃん、婦女子つてなに?」

「つかさ、婦女子じゃなくて腐女子だよ。」

「??????」

ああ、そうだよな。

口で言っただけじゃ字の違いまでわかんないよね

「つまりは腐った女の子のことだよ。」

「腐ってる……………ゾンビとかですか?」

みゆきさん、それはさすがにないでしょ。

まあ、ある意味ゾンビよりもたちが悪い人種かもね

「つまり、オタクの亜種みたいなもんかな?」

その表現が一番適切だと思う

私は興味ないけど腐女子かのじょらが好きなものを馬鹿にするつもりは無いしね

「つまり、セイカ君は彼女たちのおめがねになつたのだよ。」

「言ってる意味がよく分からないんだが。」

顔だけこっちに向けてセイカ君が質問してきた

ん、結構中性的な顔してるね。

こりゃその子達も追いかけてくるわ

「つまり、セイカ君はこれから漫画の男の子キャラとチヨメチヨメ××なことを

させられるのだよ。」

ポクポクポク、チーン

「はあああああああ!??」

今まで無気力だったセイカ君が突然立ち上がった

「何でそうなるんだよ!!」

まあ、その気持ちは分かるけどね、私もGLの題材にさせられたりするのいやだし

「ねえ、ゆきちゃん。」

チヨメチヨメ

××なことってなあに？」

「さあ？私にもよく・・・」

つかさとみゆきさんが首をかしげている

いいんだよ二人とも、ここは二人が来るべき世界じゃないから。

「まあ、書かれちゃったら書かれちゃったでいいんじゃない？それだけセイカ君の顔がいつてことなんだし。」

「よくねえよ!!」

顔がいつてことは否定しないんだね、まあそれどころじゃないんだろうけど。

と、そんなところへ

「見つけたッス!!」

「コンドはニガサないネ!!」

さつきセイカ君が説明したとおりの二人が現れた

「ぬわっ!!お前らはさつきの!!」

セイカ君が飛びのいた

おお、すごい反射神経。

「ナゼ二げるネ!？」

「私たちはちよつと服を脱いでもらってちよつとポーズをとってもらってそれを書かせてもらえればいいのに!!」

「それが問題だらけなんだよ!!」

「うわゝ、絵に描いたような腐女子だね。」

つてことは同人在ってる子かな？

スケッチブック手にしてるところから見てめがねの子の方みたいだけど。

そんな会話の途中でとうとう我慢できなくなったのか二人が飛びつ

いてきた

「うわっ！！しまった！！」

「カンネンしたホウがイイデスよ！！」

外人さんのほうがセイカ君の服に手をかけた

「お、おい！！なにやってんだアンタ！！」

こ、これはさすがにまずいかも！！

まあ、ちょっただけみてみたいなのとは思うけど

「お二人さん、みんな見てるよ。」

そうわたしが言うつと腐女子二人はハッと我に返った  
じーーーーーーーー。

ああ、結構クラスの視線を独占してたんだね

「お、お騒がせしました。」

と、言つて二人はあわてて去つていった

「はあ、はあ、た、助かった……。」

脱がされかけた服を戻しながらセイカ君は立ち上がった

「いや、災難だったね（見てて楽しかったけど）」

「ど、どんだけ。」

「結局、あのお二人はどなただったんでしょうか？」

おやおや、二人とも？ ちよつと顔が赤いねえ。

まあ、目の前で男の子が脱がされてたら普通の子は恥ずかしがるよね。

ん？ それじゃあ私は普通じゃないってこと？

「今後二度と出会いたくないな……本当に、一生。」

「うーん、絶対会うと思うよ。」

多分今のイベントでフラグがたつたね。

まあ、攻略フラグじゃなくてお友達フラグだろうけど

一年生みたいだったし今度ゆーちゃんにでもきいてみようかな。

そんなこんな、朝っぱらからの能動オタクと輸入オタク事件だった  
まあ、すぐに私とその二人が仲良くなっているいろいろと画策するのは  
別のお話。

## 第十八話 終わり



## 第十八話 能動オタクと輸入オタク（後書き）

### 次回予告

さて、次回のキミセ力は？

かがみです

って何よこれ！！今回のあたしの出番ないじゃない！！

前回のときちゃんと謝ろうと思ってたのに。

あー！もう！！どうしてこうなるの！！

このままじゃいつまでたっても名前で呼んでもらったりなんかできないわよね。

べっ、別に名前で呼んでもらいたいとかそういうわけじゃなくて・・・  
・・・そう！！いつまでも柊姉とか呼ばれるのがいやだから仕方なくよ！！

次回「頭の中身」

お楽しみにね！！

## 第十九話 頭の中身

### 第十九話

「ああ、どうしよう。」

私はものすごく後悔している

事情も知らずにしたたまセイカ君のこと殴っちゃったし。  
顔を合わせづらくて今日はそのまま教室に来ちゃったし。

「よし、きちんと謝ろう!!」

そうよ!!ウジウジしてるなんて私らしくないわ!!

「とりあえずこなた達の教室に……………」

私は教室を飛び出した

「……………」

何コレ。」

目の前でセイカ君が脱がされかけていた

「あの、二人とも。みんなが見てるよ。」

こなたがそう言う二人はばつが悪そうに去って行った

「こなた!!」

「あ、かがみ。」

こなたの名前を呼ぶとすぐに反応してくれた

「ねえ、何がどうなったのよ。」

なんかセイカ君が……………脱がされかけてたし。」

「それは本人に聞いたほうが早いと思うよ。」

そう言ってこなたはセイカ君を指した

いまだに息を荒くして乱れた服を元に戻している

「ねえ、いったい何があったの?」

「ああ、柊か……実はかくかくしかじかでな。」

かくかくしかじかつて便利な言葉よね

こうやって書いておけば説明したことになるし

「そ、それは災難だったわね。」

「……昨日も結構災難だったがな。」

うわっ、やっぱり結構根に持ってる……。

「そりゃあ、いきなり殴った私が悪かったんだけど……。

あんなところであんなことしてたら誤解するに決まってるじゃない！！」

って、違うでしょ！！何で謝りにきたのに反論してるのよ！！

「なっ！バカ！！あれは誤解だって言ってたんだろうが！！」

そこでセイカ君がハツとなった

ん？どうしたのかしら

「ねえ、かがみ。あんなことってなに？」

し、しまった！！

「なににに！！日曜日に二人の間に一体何があったの！？コレはしつかりと事情聴取しないとね」

ああ……泥沼だわ……。

View Change 平野セイカ

ひ、柊姉のアホー！！

よりによって一番知られたくない奴に……。

「ねえ、お姉ちゃん。

あんなことって何？」

「つかさも気にしないでいいから！！」

なぜだろう、このままだと戦火が拡大していく予感がする

いや、むしろ確信

「ねえ、教えてよ。」

お前はくねくねしながら抱きついてくるな!! 気持ち悪い!!  
「だー!! こなた!! お前はさっさと離れる!!」

.....

あ、あれ? なんか一気に静かになったぞ?

「ねえ、セイカ君。」

ヒイラギ姉が俺の肩に手を乗せて話しかけてきた

「今こなたのこと.....こなたってよばなかった?」

「いや、こなたをこなたって呼んで何がおか.....」

.....あ

うつ、なんか視線が痛い.....

「もう、セイカ君ってば。」

そうやって呼ぶのは二人っきりのときだけにしてって言ったのに。

「

「ふっざけんな!!」

俺は拳を握るとこなたの頭にぐりぐりと押し付けた

「ぬああー!! 拳でゴリゴリは止めてえ!!」

「あの、セイカさんその辺で.....」

高良さんが止めに入った

「まったく、大体なんでアンタだけ名前と呼ばれてるのよ!!」

「なににな、私とセイカ君の愛のエピソードを聞きたいの?」

ゴッ!!

「ぬおおおおお!!」

思いつきり脳天にゲンコツをかました

「ただネトゲやっただけだろうが!!」

「ネトゲ?」

「ああ、実は土曜日に　かく　かく　しか　じ　か　でな。」  
かくかくしかじか

なんと便利な言葉だろう

「あはは、こなちゃんらしいね。」

「フラグを立てるには相手の好みを利用するのが重要なだよ」

そんなことを言っているこなたの後ろにひとつの影が………

「それじゃあウチはお前の頭にたんこぶ作つたるわ。」

「へ?」

ゴチーン!!

「ぬああああああああああああああ!!」

ああ、こなた。ご愁傷様

「つたく、予鈴なつたのにいつまでも何してんねん。

柊もさつさと教室もどり。」

「は、はい!!」

柊姉はそそくさと去っていった

「泉、お前の頭ん中にはもうちつとまともな事は入つとらへんのか?」

「見てみますか?」

「……………すごいものが入ってそうだな。」

こんど脳内メーカーで調べてみるか

あれって苗字と名前の間に空欄空けるか開けないかで結果変わるんだよな

どっちを信じればいいんだ?

「自分に都合のいいほう選べばいいんと違うか?」

「心の中を読まないでください!!」

そして放課後

「セイカ君、帰りに喫茶店よってこようよ。」

俺は警戒態勢をとった

「今度は何をたくらんでるんだ?」

「うわっ、ひどー!!」

「安心してくださいセイカさん、ただお茶をするだけですよ。」

あんたがそういうならそうなのだろう

まあちょうどいい

今日一日かけて決めたことを実行に移してやる

「ま、行くならいくでさっさとしろよ。」

俺はかばんを持って

「行くぞ、こなた、かがみ、つかさ、みゆき。」

迷いなくそう言った

第十九話 終わり

## 第十九話 頭の中身（後書き）

### 次回予告

さーて、次回のキミセ力は？

つかさです

セイカ君がみんなのこと名前で呼んでくれました。

えへへ、ちよつと仲良くなつた気がするなあ。

セイカ君は「勘違いすんな！！ただこなたただけ名前で呼んで変な誤解を受けたくなかつただけだ！！」って言っていました。

なんだかセイカ君っておねえちゃんに似てるなあ。

つんでる？だつたかな？

ええー！！私セイカ君と戦うの！？無理だよ。

次回「ピーマンを食べる人」

お楽しみに。

## 第二十話 ピーマンをかじる人

### 第二十話

それは喫茶店でこなたが突然言い出したことが原因だった

「つかさとセイカ君ってどっちのほうが料理うまいのかな？」

「なんだ、やぶからぼうに。」

俺はコーヒー（砂糖&ミルク入り）をすすりながら答える

「確かにそれは気になるわね。」

かがみもコーヒーを飲むのを止めて話しに加わる

ちなみにテーブルの真ん中にはバケツパフェという得体の知れない  
ものが置いてある

コレはこなたが「おもしろそう」の一言で注文したものだ

五人がかりで食い切れればただで食いきれなければ5000円とい  
うデンジャラス

コレは主に俺とかがみが消費している

「確かにお二人の料理はおいしそうですものね。」

「そ、そうかな。」

つかさが照れたように頬をぽりぽりとかいた

「調理師目指してる奴と比べ物になるわけないだろ。」

俺はスプーンでクリームの山をすくうと口に運んだ  
うむ、甘さ控えめでうまい

「かがみ、そんなに食べると太るよお。」

「う、うるさいわね。」

私よりもセイカくんのほうがたくさんたべてるわよ！

そういいながら一口パクリ



あーあ、幸せそうな顔しちゃって

「安心しろ、俺は食っても太らない。」

「そういいながらまた一口食べた」

「セイカ君、アンタ今全世界の女の子を敵に回したよ。」

「知るか。」

「実際太らないんだからしょうがない」

「話を戻しませんか？」

「みゆきが少しだけパフェをすくうと口に運んだ」

「えーと、セイカ君とつかさのどっちのほうが料理がうまいかだっけ？」

「こなたも一口食べる」

「そもそも、素人レベルで比べるのが間違ってるだろ。」

「俺達はプロじゃないんだぞ？」

「俺はそろそろそこが見え始めたバケツパフェにスプーンを突っ込んでまた一口食べた」

「素人レベルからでもお上手ということですよ。」

「たしかに、二人とも上手よね。」

「かがみがコーヒーをすする」

「もうそろそろパフェもなくなりそうだ」

「かがみんから見れば全世界の人は料理上手だよ。」

「ああ？なんか言ったか？こなた？」

「べつつに〜。」

「拳を震わせるかがみをつかさなだめていた」

「おねえちゃんも練習すればいいのに。」

「ひよつとして時々姪姉妹の弁当がみすばらしくなってるのはかがみが作ったからか？」

「みすばらしくて悪かったわね！！」

「かがみが机に備え付けのスティックシュガーを投げつけてきた俺は反射的にかばんを盾にして身を守った」

「ここまで盛り上がったら確かめなくなっちゃうよね。」

「いや、無理だろ。そもそも誰が判定するんだ？」

「なに？きちんと審判できる人がいたら勝負するの？」

「いや、やる気はない。」

そもそも本当に好きでやっている奴にしぶしぶやっている奴がかなうわけがないのだ

「へえ、つかさに負けるのが怖いんだあ。」

カチン

「そうだよ、そもそも男の子が女の子に料理でかなうわけがないし。」

カチンカチン

「誰だつて負けるのは怖いもんねえ！！！」

「おい。」

俺はこなたの声をさえぎった

「あれ？やる気ないんじゃないの？」

「やる気はない、だがやらないとは言つてない！！！」

「あんた、日本語めちゃくちゃになつてるわよ？」

ああ、分かつてるさそんなこと！！

「じゃあ、やるつてことで！！！」

「こ、こなちゃん、無理だよ。」

「つかさの意見は関係ない！！！」

「ど、どんだけえ。」

おい、何気にひどいこといつてるぞあいつ

「よし！！それじゃあ勝負は今週の日曜日！！二人ともそれまで腕を磨いておくんだよ！！！」

よし、たわしでも買ってくるか

つて、そんなボケはいいだろ俺…………

「あー、ちなみに私はピーマンかじる人になるから。」

「ああ、昔あつたわねそんな番組。」

あれって苦くないんだろうか

別にピーマンは苦手じゃないがさすがに生は無理だろ

「それでは今日は解散ですか？」

「そうだな。」

俺達は立ち上がった

「はい、セイカ君。」

こなたから伝票を渡される

「何だコレは？」

「支払いよろしく・・・・・・・・。」

ゴガスッ！！

後ろからかがみの鉄拳がこなたの脳天を直撃した

「はいはい、ワリカンワリカン。」

「うう、最近ピンチなのにい。」

こいつ・・・・・・・・はじめから奢らせるつもりだったな！！

そして店から出てつかさがいった

「どうなっちゃうの？」

つかさ、それは俺が聞きたい・・・・・・・・。

ちなみに

バケツパフェの中身はきれいさっぱりなくなっており、俺とかがみがその店のブラックリストに乗ってしまった。

つづく



## 第二十話 ピーマンをかじる人（後書き）

### 次回予告

さて、次回のキミセカは？

みゆきです

なんだか泉さんの提案でたいへんなことになってしまいました。

それはそうと、誰が審判をすることになるのでしょうか？ 泉さんはあてがあるようですが……。

あれ？ セイカさんどうしたんですか？ そんなに青い顔をして……。  
・・。

次回「赤い化け物」

お楽しみに

## 第二十一話 赤い化け物

### 第二十一話

喫茶店の帰り道

「料理対決ねえ．．．．．」

なんだかんだでつかさの奴と対決することになってしまった

俺は挑発されるとすぐに頭がうまく回らなくなるからな．．．．．  
少し反省しよう

「っていうか、腕を磨いておけって言ってもな．．．．．」

何をどうすれば料理がうまくなるのなんて分からない

そもそも俺はやる気がまったくない

「けど、負けるのもなあ．．．．．」

つかさの料理を食べたことがある身としては勝てるかどうか微妙だ

それに審査員の好みもあるだろう

「そもそも、審査員が誰になるんだ？」

そんなことをばやいていると

キキーツ！！

と、隣でパトカーが停車した

「な、なんだ！？」

そしてドアが開いて中から婦警さんが出てきた

「いやっほーう！！キミが平野セイカくん？」

「は、はい。」

そうですけど．．．．．」

で、テンション高いな．．．．．

っていうか、警察が俺に何のようだ？

「あー、これから君を重要参考人として連れて行きます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

まったく状況がつかめない

重要参考人？

俺が何の参考になるといつのか

「あー！！こうしている間にも妹達が待ちくたびれてんの！！

早く乗った乗った！！」

「え、ちょ、まっ！！」

「問答無用！！」

「ア　　ッ！！」

俺は問答無用で連れ去られた

「し、死ぬかと思った・・・・・・・・。」

この婦警さん、某<sup>チヨメチヨメ</sup>Dを思い起こさせるような運転だった・・・・

ぎもぢわる・・・・・・・・

「さー、入った入った！！」

「はい？」

重要参考人なんていわれたからてつきり警察署にでも連れて行かれると思っていたが

「・・・・・・・・誰の家だ？」

つれてこられたのは一軒の民家

「なにやってるのー？早く入ってー！！」

まさかと思うが・・・・・・・・新手の誘拐？

とりあえず表札を確認した

すると

「うげえ!!」

そこには

泉と書かれていた

「おおー、セイカ君いらつしゃー。」

中ではアホ毛ロリ貧乳が待ち構えていた

「とりあえず聞きたいことがある。」

「ん？なに？」

「なんで俺はこんなもんエプロンを着ているんだ？」

俺は自分が（無理やり）着せられているかわいい猫のマークが入っているエプロンを指差した。

「これから特訓をするのだよ!!」

「まさかと思うが……料理対決のか？」

「その通り!!」

こなたは誇らしげに親指を立てた

何が誇らしいのか意味が分からない

とりあえず俺は中指を立てたい気分だ

「特訓なんかいらん、俺はそれなりに料理できるの知ってるだろ？」  
俺はエプロンを脱ごうとした

だがこなたにとめられる

「ところがどっこい!!今回のテーマは“おつまみ”なのだよ。」

「はあ？」

おつまみ？

するめとか用意すればいいのか？

「もちろんきちんと料理したおつまみね。」

よくワインと一緒に出てくるおしゃれな感じの。」

確かにそんなものは作ったことはナイ



そもそも何が酒にあうかなんて分からん

「そのためにゆい姉さんと呼んだのだよ!!」

そう言つてこなたはさっきの婦警さんを指差した  
つて!! いつの間にか私服になつてる!!

「オーケーオーケー!! お酒なら私に任せといて!!」

「一応お父さんもいるしね!」

「.....どこにいるんだ?」

辺りを見回すが男性の姿はどこにもない

「あー、今締め切りに終われてて部屋にこもってるよ。」

「作家か何かなのか?」

「うん、小説家。」

小説家が.....。

こいつを養つているということはそれなりに売れているということ  
である

今度探してみるかな.....。

「ねーねーこなた、ゆたかはー?」

「ゆーちゃんはお父さんにご飯運びにいったからそろそろ戻つてく  
ると思うけど。」

ゆーちゃん?

ああ、小早川のことか

「おおっと!! 自己紹介してなかったねー!!」

私はゆたかのお姉さんの成美ゆいでーす!! 婦警です!! ついでに  
人妻でーす!!

「はあ、平野セイカです。」

成美さんは俺の手を思いつきり上下にふつた  
ホントにテンション高いな.....。

「ご飯運んだよ.....あれ? お姉ちゃんに.....平  
野先輩?」

「やふー!! ゆたかー!!」

「お邪魔させてもらってるな。」

つていうか、やっぱりちっちゃいな。

俺の胸………っていうか、みぞおちくらいまでしか身長がない  
いかにも妹!!…って感じたな

「こんばんは、今日はどうしたんですか？」

「いやゝ、実は　かく　かく　しか　じ　か　でねゝ。」

俺の代わりにこなたが説明してくれた

「料理対決………ですか？」

「なんか知らんがやることになった。」

「ついでに食材のテーマまで決まってるんだよゝ。」

そう言つてこなたは台所のほうへ走つていった

テーマつて………どこの料理番組だ

「そもそも誰がテーマなんて決めたんだ。」

そこへこなたが袋を持つて戻つてきた

「審査員の人たちだよゝ。」

もう審査員が決まつてるのか!!

なんかだんだんと話が大きくなつていく………。

「はい!これがテーマ食材!!」

そう言つてこなたが取り出したのは

トメイトー(トマト)

それを見た瞬間

俺は凍りついた

「ぎいやあああああああああ!!」

俺は思いっきり後退した

「ええ!!ちよつと!!どうしたの!？」

成美さんが驚いた声を出す

小早川も呆然としている

「せ、セイカ君？」

「それを俺に近づけるなああああああ!!」

説明しよう

セイカはトメイトー（トマト）が大の苦手!!  
触っただけでじんましんが出る（様な気がする）ほど嫌いなのだ!!

「お、おちついて〜!!」

「来るなああああああ!!」

「せ、先輩!! 落ち着いて〜!!」

「赤い化けものがああああああ!!」

「（。。。）」

「こっちなああああああ!!!!」

第二十一話      終わり

## 第二十一話 赤い化け物（後書き）

さーで、次回のキミセ力は？

セイカだ

俺としたことが、めちゃくちゃ取り乱してしまった。

最後のほうがかなり力オスなことになっているだろうな。

次回はいいよつかさとの対決………のつもりだったんだが  
割愛させてもらう

まあ、結果なんて訊かなくても分かるだろ？

それはそうと次回からこなた編に突入だ。

俺は一体………あいつに何をしてやれる？

次回「蒼い者」

楽しみにしてくれよな

## Episode こなた 1「蒼い者」

キミがいるセカイ

Episode こなた 1

「蒼い者」

料理対決が終わった次の日

つまり月曜日である

え？時間が飛びすぎだった？

気にするな、俺は気にしない。

で、結果はというと

「惨敗だったねー。」

「うるさい。」

今俺の隣に座ってくつろいでいる少女

泉こなたがもう十分に分かっている結果を告げた

ちなみに審査員は黒井先生、桜庭先生、天原先生、成美さん

あと、みゆきの母親で……ゆかりさん……だっけ？

とにかくその5人だった

「しょうがないだろ、2、3個ならまだしも……。」

そう、材料調達にはりきったゆかりさんがダンボール一箱にいつぱ

いのトメイト（トマト）を持ってきたのだ

こなたとの特訓で2、3個なら何とか耐えられるようになった。

だが、あの山を見て俺は失神こそしなかったが（この辺をほめてほ

しい）手が震えて指を切りそうになるは調味料を間違えるわでもなものができなかった

「あの生ごみに比べてつかさのは凄かったn・・・・・・・・。」

「だー！！もういい！！この話はやめる！！」

と、言うわけで料理対決の説明終わり

で、なぜこなたが学校が終わった後に俺の家にいるのかというと・・・・・・・・・・・・・・・・はい、回想モード

「ふう、今日も疲れた・・・・・・・・。」

先日の精神的な疲労もたまっているので今日の授業はきつかったかがみたちは事情を知っているだけあって何かと心配してくれたが・・・・・・・・。

「くそつ、こなたの奴め・・・・・・・・。」

料理対決の言いだしつpegが散々俺のことをからかいやがったつーか、今日わざわざ弁当にトマト入れるか？普通。

普段は弁当なんて作らないくせに・・・・・・・・。

「まあ、今日は課題もないしゆつくりと・・・・・・・・。」

そう思つて自室のベットに倒れこんだそのとき

ピンポン

「ん？来客か？」

それとも宅配便？

残念ながらウチのインターホンにはカメラなんて高性能なものはないので玄関まで下りる。

「はいはい、どちらさま……………」

ガチャリ

「やほー、セイカk……………」

ガチャリ

閉める

ついでに鍵もかける

「さて、寝るか……………」

今のは俺の見間違い、インターホンは鳴らなかった  
だが

ピンポピンポピンポピンポーン！！

「だー！！分かったから連打するなー！！」

ガチャリ

「やほー、セイカ君。」

「訊かないと思うが一応言っておく、帰れ。」

「無理。」

「なぜ？」

「家出てきたから。」

「ああ、そうか……………家でならしかたがないなー。」

ハッハッハとお互いに笑う

「じゃねーだろーがー！！！！」

「おお、ナイスノリツツコミ！！GJ！！」

ビシッと親指を突きたてた

その親指をつかんで関節が曲がらないほうに曲げてやる

「ぬおおおおおお！！折れる折れる！！」

本当に折るわけにもいかず開放

「まあ、理由を聞こうじゃないか。」

「いやだ。」

「……………」

俺はあわてず騒がずこなたの頭の両端に拳を添えて

「人をおちよくってんのかー！！」

グリグリグリグリ！！！！！！！  
「ぬおおおお！！ギブ！！ギブ！！」

そして冒頭に至る

「で、いい加減話す気になったか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ハア・・・・・・・・」

しょうがない、成美さんにでも連絡して引取りに来てもらうか。」

俺は携帯電話を取り出そうとしたが

「竜巻旋風脚うー！！」

「ぐはっ！！」

別に回転はしてないがこなたの容赦ないとび蹴りが俺の腰を強打した

「て、てめえ・・・・・・・・この年でギックリデビューしたらどうしてくれるんだ・・・・・・・・」

「笑えばいいと思うよ」

こ、殺す・・・・・・・・。

だが腰の痛みでうまく立ち上がれない

「まあまあ、私を泊めるくらいいいじゃん。

どうせ部屋余ってるでしょ？」

「なぜ分かる。」

「ギャルゲーの基本だから！！」

また出た・・・・・・・・こいつのギャルゲー理論

「よし、じゃあ家出した理由を話したら泊めてやる。」

「お、ホントに？」

「ああ。」

まあ、お前が寝たら成美さんと呼んで迎えに来てもらっけどな

「ああ・・・・・・・・実はね？」

「実は？」





「俺に悪い気はしないのか……。」

その質問にこの憎たらしい小動物は目の前で腕をクロスした

「それじゃあ、約束どおり泊めてもらうねー。」

「……ああ、わかった。」

「ただ明日には……。」

「あ、ちなみに一週間は厄介になるから。」

「……はい？」

「セイカ君今動けないでしょ？」

「私が晩御飯作っただげるねー。」

「お、おい！！ちよつと待てー！！」

俺の制止も聞かずにこなたは台所へと消えていった

「どうなるんだよ……俺の平穏な生活……。」

「

いや、もしかしたら

こいつと友達になった時点でこうなるのは規定事項だったのかもしれない……。」

〈E p o s o d e 　こなた　1〉　終わり

Episode こなた 1「蒼い者」(後書き)

次回予告

俺の家に現れた蒼い者  
時々見せるそのさびしげな笑顔  
普段はおちゃらけているこいつの心には  
一体どんな闇があるのだろうか

次回「母親の意味」

お楽しみに。

「Episode こなた 2」 「母親の意味」

「Episode こなた 2」

「んん．．．．．。」

少しずつ意識が現実に取り戻される

今俺がいるのは自室のベット

春先とはいえ朝はまだ肌寒く布団のぬくもりが心地よい  
心地よいのだが．．．．．。

「おはよー、セイカ君。」

目の前にある幼さの残る顔

まだうまく働いていない頭のハードディスクを一気にフル活動させる

「おーい、セイカくん。」

頭起きてるー？

こなたは俺の目の前で手のひらを振っている

その手をつかんで

「うえ？ちよ、セイカ君！？」

ベットの中に引きずり込んだ

できるだけ自分のほうに引き寄せ逃げられないようにする

「．．．．．こなた。」

「な、なに？」

「．．．．．」

おい、そこで俺がこれから全年齢向けでないようなことをすると思  
ったそこのがきんちよ。

しばらく正座してろ

「お前は．．．．．」

「え？」

俺はこなたを布団に残し一気にベットから転がり出る

そしてベットの下からロープを取り出す（なぜあるかは聞かないでくれ）

「俺の部屋に勝手に入るなって！！」

「ぬおおおお！！」

そして掛け布団でまだ状況の飲み込めてないこなたをすまきにして

「昨日あれほと言っただろうがああああああ！！」

ロープで縛り上げた

「ふう、完成。」

朝からとても充実した達成感を得る

目の前の頭だけ見えるこなたは水から上げられた魚のように暴れている

「私を解放しろー！！鬼畜ー！！」

「鬼畜？最高のほめ言葉だ。」

俺は自分のことをドＳだと認識している

普段こいつに嫌がらせされてるだけあってとてもすがすがしい

「本当ならこのままブランドに干すところなんだけどな。」

「そんな、どこぞの禁書目録じゃあるまいし。」

「何を言っているのかはよく分からないが開放してほしいければ俺の部屋には勝手に入らないと誓え。」

こなたは思いつきり首を前後に振った

「だけどお前は信用ならないから一日こうしておくのもいいかもしれない。」

「ちよっ！！学校！！」

「どーせお前寝てるからいいじゃん。」

だがさすがにかわいそうになってきたので縄を解いてやる

「いいか？絶対に俺の部屋には入るなよ？」

「うう………ひどい目にあった………。」

失礼な、コレは俺にとっての自己防衛策だ

こいつは何するか分かんからな

「まあいいさ、さつさと飯食って学校行くぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん。」

ん？なんか元気が無いな・・・・・・・・？

それに心なしが顔が赤い気がする・・・・・・・・・・なぜだ？

ま、いつか。

「おはよ、セイカ君こなた。」

「おつす、かがみ。」

登校途中にかがみと会った

「ん？つかさはどーしたの？」

こなたに言われて気づいたがつかさの姿が無い

「あー、寝坊してあんまりにも遅いもんだからおいて来ちゃった。」

「かがみんの薄情者ー！！」

「うつさい！！」

朝っぱらからかがみのツツコミパンチ

うん、今日もキレがあるな

「だいたい、お母さんもつかさがおきるまでは起こし続けなきゃ駄目よ。」

あの子はただでさえ寝起きが悪いんだから・・・・・・・・・・。」

「ならお前が起こしてやれよ。」

「もつともな意見をどうも・・・・・・・・。」

こいつらと仲良くなってから俺は笑うことが増えた

こういったなにげない会話も楽しく感じる

これが友達って奴なのかもな。

まあ、こいつらには気恥ずかしくて言えないが。

俺はふと、きっかけでもあるこなたのほうを見た

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「ん？どーかしたの？」

「あ、いや、なんでもない。」

こなたは笑顔だ

だけどなぜだろう

その笑顔の中に悲しみがこもっているような気がしたのは

「お、つかさ。ぎりぎりだな。」

「お、おはよあ・・・・・・・・みんなあ。」

肩で息をしながらつかさが教室に飛び込んだ

「うつゝ、またやつちやつたよあ。」

「お前・・・・・・・・せつかく母親に起こしてもらってるならちゃんと起きろよな。」

「しょ、しょうがないんだよ。」

“春眠曉を忘れる”だから。

「“覚えず”だ・・・・・・・・。」

相変わらずの天然トークに頬が緩む

こいつは周りの空気をやわらげてくれるんだよな

最初はただのドジな奴だと思ったけど結構人の役に立ってる奴だ

こいつとの出会いもこなたのおかげなんだよな

俺は俺の席の少し前にいる青髪のほうを見た

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

まただ

朝のときと同じような悲しみのこもった顔

きっと俺でないと気づけない

同じような悲しみを味わった奴にしか分からない表情がそこにあった

「それで、母がヨーグルトを買ってきたのですがぜんぜん手をつけていなくて。」

「それでデザートがヨーグルトなんですね、分かります。」  
昼食の時間

各々の弁当を広げて雑談をする

ちなみに今日はバカこなたのせいで時間が無かったので買い弁である。

「以前も宝くじを買っていたのですが当選しているかを確認せず……。」

「ああ、にわかブームなんだな。」

この前の料理対決で目にしたがみゆきの母親はなかなか個性的だった  
なんというか……この親にしてこの子あり？ってやつだ。

そしてまたこなたの方を見た

「どうかしたの？」

「いや、なんでもないんだが……。」

「変なセイカ君。」

そう言ってこなたはまたチョココロネに視線を戻した  
やっぱり今日のこいつはおかしい

（朝のことを怒ってんのか？）

だが怒っているならまだしも悲しい顔をするわけが無い  
（今日の会話のどこかに理由があるのか？）

朝からのみんなとの会話を思い出す

『だいたい、お母さんもつかさが起きるまで』

朝のかがみとの会話

『せっかく母親に起こして』

登校後のつかさとの会話

『それで、母がヨーグルトを買って来たのですが』  
さっきのみゆきとの会話……



そこに共通する単語

(・・・・・・・・・・母親?)

すべてがつながった

すでに母親が他界しているこなた

以前そのことを話してくれたときこいつは「シリアスすぎるの嫌い」と言っていた。

だが少しだけ悲しそうな顔をした

(やっぱりこいつは母親が恋しいんだ・・・・・・・・。)

普段おちゃらけてるから今まで考えもしなかったが

物心つく前に母親が他界したという事はこいつは母親のぬくもりを知らずに育ったと言うこと。

一番必要な時期に母親がいなかった

それは子供にとってどれだけの苦痛なのだろう

だけどそれが分かったらどうしろと言うのだ

もう死んだ人間とは会えないし触れることもできない

何かしてやりたい

俺に色を与えるきっかけとなったこいつに

俺にできることは何だろう

おわり

↳ Episode こなた 2↳ 「母親の意味」 (後書き)

次回予告

こなたが俺の家にいると言った一週間の期限  
俺はこいつに何かをしてやりたい  
俺の居場所を作ってくれたこいつに悲しい顔をさせたくないから・  
・・・。

次回「白い羽」

アンタは・・・・・だれだ？

## Episode こなた 3「白い羽」

Episode こなた 3

こなた view

「さーて、お邪魔します。」

夜、再びセイカ君の部屋に忍び込んだ  
見つかったらまたすまきにされるかもしれないがやめると言われた  
らやりたくなるのが人間の本能である。

「今日は携帯持参でございます。」

これでセイカ君の寝顔を激写してやるぜ、へっへっへ

「さーて、それではまずは寝顔を拝見。」

おお、かわいらしい寝顔をしてらっしゃる

では、カメラカメラっと…………

「……………なた……………」

「ふおっ!？」

も、もしかして起きた!？

まずい、早く逃げないと!!

どこかにダンボールは無いか!？スネ クが隠れてるみたいな!!

「……………zzz。」

「なんだ……………寝言か……………」

起きてないことに心底安心してまたセイカ君の寝顔を見る

「普段の鋭い表情からは想像もつかないね。」

その寝顔は遊び疲れた子供みたいで

うーん、母性本能をくすぐりますな

ほっぺたつついてやる

「えいつ、えいつ。」

「ん・・・・・・・・むぐ・・・・・・・・。」

おゝ、ぷにぷにだねゝ

ま、私ほどじゃないけど

「どんな夢見てんのかね・・・・・・・・ふあ・・・・・・・・。」

どうしよ、眠くなってきた

いやいや、ここで寝たら明日の朝にはまたすまきに・・・・・・・・

「・・・・・・・・くう。」

眠気には勝てませんでした

セイカ view

ときどき「あ、これはゆめだな」と分かるときがないだろうか

あからさまに自分が普段見てる風景と違っていたり空想上の人物が出てきたり

ちなみに俺は今これが夢だと認識している  
なぜなら

目の前に天使がいるからだ

比喩表現とかじゃない

正真正銘、白い羽の生えた天使

だけどその顔は………

「……………こなた……………?」

いま家出中の小動物にそっくりだったのだ

しかしその天使は静かに首を振った

「いいえ、わたしはかなたです。」

泉こなたの母親の。」

「こなたの母さん?」

こなたの母さんといえはもうなくなっているという  
つてことは

「ああ、俺のこなたがもうちょっとおとなしかったらなという妄想  
が虚像の母親を生み出してしまったか。」

申し訳ない、妄想の産物さんよ、すまんが帰ってくれ。」

俺は自称かなたさんに向かって手を合わせた

「いえいえいえ!! 本当に母親ですよ!!」

そう君ゆずりのなきぼくろもあの子特有のアホ毛も無いでしょう?」

「あ、そういえば。」

確かにない

だが……………

「それすらも俺の妄想という可能性も……………」

「違います!!」

むう、なら証拠を見せてあげましょう。」

「ほう。」

そう言っていると自称かなたさんは反対側を向いて軽く服の肩紐をはずした

「つて！何やってんですかあんたつて人は！！」

「ほら、首筋にほくろがあるでしょう？あの子にはコレがありませんよ。」

「そうなんですか？俺は見たこと無いからわかんないんですが……」

「つて、イカン！！このままじゃ話が進まん！！」

「わかりました、あなたはこなたの母親なんですね、そういうことにしておきます。」

「まだ納得いきませんが……そういうことです。」

幽霊（？）がわざわざ夢に出てくるのだから何か用事があるのだろう

「はい、こなたのことですが……」

「ほう。」

こなたのこと、こなたの母親であるかなたさん

これは俺が心配していることと関係がある話かもしれない

「お察しの通り、あの子は私がないことをさびしく思ってくれます。」

「そりやそうだ、母親が必要ない子供なんているはず無い。」

どんなに強がってもこなたも一人の女の子に過ぎない

人として心を持っていればいるはずの人がいないことは苦痛でしかないだろう

「あなたはこなたの心に気がついてくれたから、あなたにお願いしたいんです。」

どうか、私の分まであの子のそばにいてあげてください。」

そう言っただけかなたさんは頭を下げた

俺はそのお願いに……

「いやだ」

そう答えた

「えっ!？」

きつとかなり予想外だったのだろう

かなたさんは顔を上げて驚いた顔をしていた

「あの子のこと、嫌いなんですか？」

俺はその質問に首を振った

「そうじゃない、あなたは自分の代わりについて言った。」

「は、はい」

「そんなの無理だ、俺は俺であなただはあなたなんだ、他の誰にも代わりなんてできない。」

俺はさらに続ける

「だから俺は俺としてあいつの友達であり続けますよ、ずっと。その言葉にかなたさんはクスッと笑った

「お友達として、ですか。」

「それがどうかしましたか？」

「いえ……」

かなたさんは静かに首を振った

「ずっとお友達だなんて、あの子に言ったら駄目ですよ?。」

「は?なんですか。」

「あの子が傷つくからです。」

友達といってあいつが傷つく?



さっぱりわけが分からん

そもそも俺のことを友達だと言い始めたのはあいつだというのに

「本当に、あなたは鈍感な人なんですね。」

「?????」

きつと俺の頭には？が大量に浮かんでいるだろう

俺の日本語の理解力が乏しいのだろうか

さつきからこの人の言っている意味が分からない

「それじゃあ、あなたとして、あの子のそばにいてくださいね。」

「まあ・・・・・・・・はい。」

「それじゃあ・・・・・・・・。」

かなたさんが胸に手を当てると急に光が広がってまぶしくて目が開けられなくなる

『そろそろ、起きる時間ですよ。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

目を開ける

目に入ったのはいつもの自分の部屋の天井

だが視界に異物が紛れ込んでいた

青い髪の毛

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

横を見る

そこには家出中の小動物が

「・・・・・・・・・・・・はあ。」

ったく、こいつは……

あれほど人の部屋にはいると言ったのに、こりないやつめ  
あんな夢を見た後だと追い出しにくくなるものだ

時計を見るとまだ5時過ぎ

起きるのにはまだ早すぎる

「しょうがないな……」

俺はその小さな体を抱きかかえると俺の布団に寝かせた  
俺もその隣に寝転がる

「起きた後の反応が楽しみだな……」

小さな子供のような寝顔をながめながらその頭をなでて

「おやすみ、こなた。」

俺ももういちど眠りのセカイに落ちていった……

） E p i s o d e    こ  な  た    3 ） お  わ  り

Episode こなた 3「白い羽」(後書き)

次回予告

よみがえる光景

いつの日か見た笑顔

だけど、見覚えの無い笑顔

俺はいつどこで

その笑顔を見たのだろうか

俺はいつ

お前と出会った？

次回「ナクシタ笑顔」

お楽しみに

Episode こなた 4 「ナクシタ笑顔」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
もぞもぞ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もぞもぞもぞ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
ね」

俺はガバつとからだをおこした

「眠れるわけねーだろー！！！！！！！！！！」

Episode こなた 4

「・・・・・・・・・・・・・・・・おーっす、ってどうしたのよ二人とも。」

俺とこなたよりも遅れて学校にやってきたかがみが出てきた

「いや・・・・・・・・何というか・・・・・・・・。」

現在こなたのステータス

状態異常：怒り(?)

俺が叫んだ後

それに反応してこなたが目を覚ましたわけだが

自分の状況を把握するなり朝飯も食わずに家を飛び出した

まあ、驚いたのは分かるんだがなぜに赤面してたんだ？

あいつの場合むしろフラグがどうとかでこつちをからかってきそう

なのに……

「喧嘩をしてるといふ雰囲気でもありませんしね。」

「お、おはよーみゆき。」

いつの間にかみゆきも登校してきたようだ

「つかさは……寝坊か？」

「大当たり」

本当にしようがないな……なんで双子なのにこつもちがうんだ？

まあ、今はそれよりも

「正直に言つて俺もなぜこなたがあんな感じなのか見当もつかん。」

「なんかこなたの嫌がることしたとか……いや、むしろそれはあいつがするほうか。」

「何かお気に触るようなことをしたとか？」

「うゝん……」

つまりは統合すると俺が勝手にあいつをベットに入れたのを怒ってるのか？

だがそれをこいつらの前で話すわけには……

うら若き男女が一つ屋根の下つてのは世間的にまずいもんな

「よし、事情その他もろをきくためにも俺が話してこよう。」

「お一人で大丈夫ですか？」

「まあ、任せましょ。」

そんなこんなで始業のチャイムが鳴り

つかさは黒井先生にこつぴどく怒られていた

昼休み

「おいこなた。」

「ぬおっ！ど、どしたの？」

「ちよいと話があるんで屋上で飯食おうぜ。」

俺は自作の弁当を掲げて言った

「う、うん、りょーかい。」

俺は教室ですでに弁当を広げているかがみたちに軽く手を合わせた  
するとかがみは口パクで

「しっかりやんなさいよ」

と言っていた

「えーっとだな、もし朝のことを怒っているといふのであれば俺は  
全力で謝るんだが……………」

何なら土下座もするつもりだったんだが

こなたから帰ってきたのは意外な返答だった

「別に怒ってなんかないよ。」

「へ？じゃあ何で今日一日俺と顔合わせてくれなかったんだよ。」

「え？えーっと……………」

こなたが口ごもる

なんつゝか、こなたらしくないな

「……………恥ずかし  
かったから」

「ん？なんて言った？」

こなたの声があまりにも小さかったのでよく聞き取れなかった

「あーもう！！このお約束主人公め！！」

「あべしっ！？」

いきなり叫んだと思えば俺の顔に平手打ち

「な、何しやがる！！人が心配してやってんのに！！」

「この鈍感！！お約束過ぎるの！！もっとひねったイベント用意してよ！！」

「だから訳がわかんねーんだよ！！」

にらみ合うこと数秒

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぷっ」

「は？」

「あははははははは！！」

突然笑い出した

「な、何だよ急に・・・・・・・・。」

「いや、セイカ君ずいぶんやわらかくなったなーって・・・・・・・・。」

「

「は？」

なんだそりや

俺が戦車にでもなったと言うのか？

「だって、会ったばかりのときはほんとに表情も硬くてなかなか打ち解けてくれなかったし。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

なるほど

たしかにやわらかくなったって言うのは適切な表現かもな

「けどな・・・・・・・・。」

「ふえ？」

俺はこなたの頭に手を載せた

「え、ちょ、セイカ君？」

「俺をそうしてくれたのはみんな・・・・・・・・特に・・・・・・・・」

お前なんだよ、こなた

「特に・・・・・・・・なに？」

「・・・・・・・・・・な、何でもねーよ！」

冷静に考えたらかなり恥ずかしくなってきた

「おおー！！ナイスツンデレ！！」

「ツンデレじゃねーよー！！」

「……………ふう」

「こなた」

「ん？なーに？」

「これからもよろしくな。」

俺はもういちどこなたの頭に手を載せてなでた

「うん、よろしく、セイカ君！！」

とびっきりの笑顔がそこにあつた……………

だけど

ドクン

「がっ！！」



ドクン

「ちょー！！セイカ君！？どうしたの！？」

ドクン

まただ・・・

またこの感覚・・・

出てくる映像は・・・

今見たような・・・笑顔

『ありがとう!!お兄ちゃん!!』

ドクン!!

「う、うあああああああああああああああああああああ  
!!」

そこで

俺の意識が途絶えた

こなたが俺のことをよんでる気がする  
だけど

俺の意識は深い闇に沈んでいった………

お  
わ  
り

E p i s o d e   こなた   4   「ナクシタ笑顔」 （後書き）

次回

E p i s o d e   こなた   L a s t

「共にいる誓い」

お前達は俺の友達なんかじゃない  
俺の・・・・・・・・親友だ

Episode こなた Last 「共にいる誓い」

Episode こなた Last

「共にいる誓い」

遠い記憶

『ねえねえ、おにいちゃん!!』

『まってよ!!』

『えへへ、ありがとう!!』

『おにい……ちゃん……。』

誰のことを呼んでるんだ？

キミは誰なんだ？

どこの誰でどこで出会った？

なあ、教えてくれよ……

なあ……

「うぐっ……」

目を開ける

そこは見慣れた保健室の天井だった

「あ!! 目が覚めましたよ!!」

近くに誰かが座ってる気がする……

赤い髪の毛……小早川？

その声でどたどたと何人かが走ってきた

「セイカ君、大丈夫!？」

「心配したんだよー!？」

「どこか体に異常はありませんか!？」

かがみ、つかさ、みゆき

いつものメンバーだった

「……お体の具合はどうですか？」

そこには小早川と岩崎も一緒だった

「ああ……俺、何で保健室に？」

「……覚えてないんですか？」

俺の言葉に岩崎は首をかしげる

「えっと……屋上でこなたと話してて、急に頭が痛くなつて……」

ん？

「あれ？こなたはどうしたんだ？」

そう俺が聞くと全員がベットの反対側を指した

「……すー。」

「うおっ!!」

そこには椅子に座ったまま寝息を立てているこなたがいた

「泉さん、とても心配していらっしやいましたよ？」

「あのときのこなちゃん凄かったもんね、すぐくあわててて。」

「屋上いったらアンタ倒れてるし、ビックリしたわよ。」

そうか、迷惑かけちゃったな

「ところで、小早川たちは何でここに？」

「こなたお姉ちゃんに用事があつて探してたんです」

「……そうしたらここにいと聞きました。」

「もう用事は済んだのか？」

「済んでないんですけど……お姉ちゃん眠っちゃってたから。」

おいおい、たたき起こしてやればよかったのに

つてか、よく座ったまま背もたれも何もしないに眠れるなオイ  
「けど、二人は別に付き合う必要なかったんじゃないか？

こなた起こしてさっさと帰ればよかったのに。」

「……………知らぬ仲でもありませんから。」

「そうですよ！！やっぱり心配ですし……………」

ああ、いい後輩だな

そう思っておれば隣の小早川の頭に手を置いてなでた

「ありがとうな、心配してくれて。」

「え！？……………はい。」

小早川はくすぐったそうな表情をしながらはにかんでいた

……………くっ、かわいいなオイ！！

……………あ、あれ？岩崎さん

ちよつと顔が怖いですよ？

「……………うーん、むにやむにや」

するとようやくこなたが目を覚ました

「お、やっと起きたわね。」

「こなちゃん、おはよー。」

こなたは眠そうに目をこすっていた

「うーん……………あ！！セイカ君！！」

「よう、おはよう」

「大丈夫！？頭おかしくない！？」

「……………とりあえずいくつかの受け取り方がある

が両方NOと言っておこう。」

俺は布団から這い出ると近くにそろえてあった上履きを履いた

「心配かけて悪かった、もう大丈夫だ。」

「なにいつてんのさ、友達心配するのは当然だよ。」

友達……………か

「ばっかじゃねえの？」

「え？」

「俺はお前らの友達なんかじゃねえよ」

「ちょ、アンタいきなり何を言い出すのよ!!」

俺の言葉にかがみが食って掛かってくる

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前らは友達なんかじゃねえ」

「セイカ君・・・・・・・・。」

周りのみんなの表情が曇る

だけどそんなことはかまわずに俺は続けた

「お前らは・・・・・・・・俺の親友だ!!」

友達なんてレベルじゃない、本当の・・・・・・・・仲間だ。」

全員が心から笑っていた



「けど普通は逆だよな」

「何がだ？」

「いや、普通ギャルゲーだと女の子が倒れてそれを男の子が付きつ切りで看病するってのがおいしいイベントじゃん？」

「別にかわいい女の子に介抱されるのもいいと思うけどな」

むしろ俺はそっちのほうが大歓迎だな

あ、けど女子の寝顔を拝んでやるのもいいかもしれない  
それを後でからかうのだ

「・・・・・・・・・・誰か倒れたらやってみるか

「あら？平野君、目が覚めたんですね」

「あ、天原先生。」

カーテンの向こうから天原先生が現れた

「すいません、ご迷惑をおかけしました。」

「いえいえ、仕事ですから。」

すると先生が俺に耳打ちしてきた

「泉さんにちゃんとお礼を言ってくださいね？」

授業にも出ないですつとつそばにいてくれたんですよ？」

「・・・・・・・・・・こなたが？」

・・・・・・・・・・あれ？それってつまりはサボりじゃ  
ね？

「まあ、教師としては授業には出すべきだったかもしれませんがね。」

「

「・・・・・・・・・・あいつの場合それが狙いじゃ？」

いや、むしろそれ以外考えられないだろう

授業サボれる＋眠れるで一石二鳥だ

「ふふふ、さあ？どうでしょうね？」

そんな含み笑いを残して天原先生は俺のかばんを持ってきた  
「もうすぐ完全下校時刻ですから早く帰りなさいね？」

「ありがとうございます」

俺はみんなのほうに向き直るとすでにみんな準備万端で待っていた  
「んじゃ、帰るか。」

「あれ？こなた、アンタの帰り道こつちでしょ？」  
そう言ってかがみが別の道をさした

「あれ？かがみ先輩知らないんですか？」

「ん？なにがよ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

小早川はこなたと同居してんだよな・・・・・・・・  
ってことはこなたの家出先も・・・・・・・・

俺はこなたと顔を見合わせた

「ちょ、ちよつとまてええええ！！」

「ゆ、ゆーちゃん、ストーップ！！」

「お姉ちゃんは平野先輩の家でお世話になってるんですよ？」

ポク

ポク

ポク

チーン

「はあああああああ！？」

「お世話になりました。」

「ああ、こちらこそ。」

我が親友達にこなたの家出&家出先がばれたのでこなたは帰ることに

「まあ、それなりに楽しかったさ。」

「わたしも、ギャルゲみたいな体験できて楽しかったよ。」

またギャルゲか

他の発想はできないもんかねこいつは

「今度はかがみたちも連れてこようか」

「な、何言ってるんだお前は！！」

かがみの高速ツッコミ

いつもどおりの風景に顔が緩む

もうすぐ5月

今度はどんな楽しいことが待っているだろう

こいつらとなら何だって楽しいのかもしれないけどな

そのときの俺は

そんな幸せな日々は

ずっと続くものだ

かんちがいていた

E p i s o d e   こなた   完

Episode こなた Last 「共にいる誓い」(後書き)

さーて！！次回のキミセカは？

よう、セイカだ

この形式の次回予告は久々だな

今回はまた普通の日常生活だ

ん？誰だこいつ

こんな奴ウチのクラスにいたっけ？

次回「WAWAWA」

おたのしみに！！

## 第二十七話 WAWAWA

### 第二十六話

「おつはよゝ、セイカ君」

「よう、こなた」

待ち合わせ時間数分前にこなたがやってきた

今日はいつもの面子で登校しようと駅前で待ち合わせをしている

「かがみたちは一緒じゃないのか？」

「もうすぐ来るよゝ……つと、来た来た」

おーい！！とこなたが手を振ると双子も同じように手を振っていた  
俺も手を振る

「おはよゝ、こなたにしては早いじゃない」

「それを言ったらつかさが起きてるほうが珍しいじゃん」

「きよ、今日はちゃんと起きたもん」

と、つかさはそう言ってるが思いっきり寝癖が残っている

「おい、寝癖のこってるぞ」

適当に手ぐしで整えてやる

「あ、ありがとうセイカ君」

寝癖に気づかなかつたのが恥ずかしいのかつかさは顔を赤くしていた

「おゝおゝ、今日も朝っぱらからフラグを乱立してるね」

「何の話だ」

こなたのギャルゲ理論にすばやく突っ込みを入れる

「って、かがみ、ご飯粒ついてるぞ。」

「えっ！！嘘っ！！」

あわてて頬をなでているが見事に外れている

「ここだって……」

俺は米粒を指でとるとそのまま口に入れた

「なっ！！なにやってんのよ！！」

「ん？なんかまずい事したか？」

なにやらかがみが顔を赤くして騒いでいる

もしかして米粒は自分で食いたかったのか？

食い意地のはったやつめ……

「セイカ君は相変わらず……って、うおっ」と

こんどはこなたがふらついた

「お、おい！！」

あわてて抱きとめる

「大丈夫か？また徹夜でもしたのか？」

「う、うん……そんなとこ」

「おい、顔赤いぞ？徹夜のせいで体調崩したか？」

「ただ大丈夫！！」

そういうとこなたはすぐに体を離れた

ほんとに大丈夫か？こいつ

「……あれ？みゆきはどうした？」

俺がそう言うところやく全員我に帰った

「そういえば……そろそろ来てもいいと思うんだけど」

「……あれじゃないかな？」

つかさが指をさしたほうには見慣れたピンク色のウェーブがかった

髪が見えた

「おーい！！みゆきー！！」

かがみが声を上げる

するとようやくこつちに走ってきた

ただ、いつもと違うところが

「も、申し訳ありません、遅れてしまつて。」

「あれ？眼鏡はどうしたんだ？コンタクトにしたのか？」

そう、眼鏡をかけていなかったのである

「いえ、実は昨日割ってしましまして……………」

「ふんずけちゃったの？」

「はい……………」

そういえばかなり視力が悪いつていつてたな

それで俺達を見つけれなかったのか

「そろそろ行かないと遅れてしまいますね、急ぎま……………き  
やつ！！」

「みゆき！！」

さっそくドジっ子モード発生

何も無いところでつまずいた

まあ、眼鏡が無いからかもしれんが……………

とりあえずあわてて支える

ふにつ

「……………」  
「……………」

ん？この感触は……………」

「……………せ、セイ力さん？」

どう考えても……………」

「う、うああああ！！す、すまん！！」

あわてて手を離す

「ほんとにすまん！！わざととかじゃなくてだな！！」

「い、いえ！！わかっていきますから大丈夫です！！」

みゆきはこう言ってくれたが……………」

他の面子（特にかがみ）から冷たい視線を浴びせられた



そんなこんなで学校に到着

「・・・・・・・・・・なんか疲れた」

「セイカ君、みゆきさんの胸柔らかかった!？」

「変なこときくな!!」

「・・・・・・・・・・はい、かなり柔らかかったです

そんなこんなで教室

いつもは四人とたわいの無い会話でもしているのだが

今日は変な奴が絡んできた

「何なんだよお前は!!」

「お前こそなんだ!!」

突然目を開けているのかよく分からないようなやつが俺に絡んできた  
ちなみに後が俺だ

「朝っぱらからなんでうらやましい出来事がお前にばっかり起こる  
んだよ!!」

「はあ!？」

朝っぱらからの出来事?

「一体どこがうらやましいというんだ!ってか、何で知ってる!!」  
そもそもこいつは誰だ!!

「俺様は白石みのる、愛の求道s y」あ、セバスチャンだ!!」白石です!!」

と、なぜか一緒に到着したのに後からやってきた女子四人がやってきた

ちなみに今の発言はつかさである

「……で、一体何なんだセバスチャン!!」

「白石です!!」

どっちでもいいだろうに……

つてか、その呼ばれ方は某黒い執事マンガに失礼だと思う

「平野!!」

「なんだよ、後声がでかい」

「どうやったらイベントが起こせる!!」

「は？」

こいつは精神病院にでも放り込んだほうがいいのか？

いや、その前に警察か……

「ちつつち、分かってないねセバスチャン」

「こなた」

話を聞いていたのかこなたが話に入ってきた

「セイカ君は“主人公”けどキミは“白石”なんだよ」

言ってる意味がよく分からないぞ、こなた

「がーん!!」

つて!! ショック受けてる!!

「所詮“白石”は“主人公”には勝てないようにできているのさ!

!!」

「ぐはああ!!」

あ、なんかふきだしのとがってるところが白石の心臓に突き刺さった感じがする

マンガ表現的に言うと

「くっ……だが俺はあきらめない……」

あ、立ち直った

「いつか……いつか……」  
白石は方向を変えて走り出した

「主役を（オーディションで）貰ってやるー!!」

「……いや、もうすぐ本鈴なるんだけど」  
その後白石には黒井先生の鉄拳制裁が（ry

第二十六話 おわり

## 第二十七話 WAWAWA（後書き）

さて、次回のキミセ力は？

かがみです

最近お菓子の食べすぎで……………お腹が……………ううう

こんなんじゃ駄目よね！！

ダイエット、ダイエットしなきゃ！！

セイカ君に出てるお腹なんて見られたくないし……………って！  
何でセイカ君が出てくるのよ！！

次回

E p i s o d e    かがみ    「乙女の悩み」

お楽しみにね！！

## Episode かがみ 1「乙女の悩み」

Episode かがみ 1

「ういゝつす」

いつもどおり教室に入っていくといつももの面子は一人もいなかった  
「めずらしいな、俺が一番乗りか」

まあ、俺は徒歩通学で他は電車通学だからしょうがないが  
とりあえず自分の席で荷物を片付け  
と、そこへ

『もつと素直にキミに好きと言えたら』  
携帯が鳴り出した

メールではなく電話のようなので出る

表示されていた名前はつかさだった

「もしもし、つかさ？どうしたんだ？」

のんきに話す俺と違いつかさはかなり切羽詰っていた

『セイカ君！？お姉ちゃんが大変なの！！』

「かがみが！！どうしたんだ！！」

思わず大声を上げてしまう

周りがこつちを見ているが今の俺は気に留める余裕は無かった

『学校に来てる途中で倒れちゃったの！！私どうすればいいの！？』

「お、落ち着け！！どこにいる！？！？すぐに向かうから！！」

『う、うん、いま。』

つかさからの電話を切ると俺はすぐに駆け出した  
倒れるなんていったいどうしたんだ！？

肺が悲鳴を上げているが全力で走った

遠くで始業のチャイムが聞こえたが無視した

「っ、つかさ!!」

「セイカ君!!」

ようやくつかさの行っていた場所に着くとそこには青ざめたつかさがいた

「かがみは……」

「こっちだよ!!」

つかさがさす方向にはフェンスにもたれかかるように座らせられているかがみがいた

「わたしじゃココまで運ぶので精一杯で……」

「いや、よくがんばったな。」

俺が学校まで運ぶ!!」

あんまり、というか一回もやった事は無いがかがみを抱き上げるつまりはお姫様抱っこ

「つかさ、走れるか？」

「う、うん!!がんばる!!」

「天原先生!!」

勢いよく保健室のドアを開けるとそこにはいつものように天原先生と桜庭先生がいた

いや、桜庭先生はおかしいよな、普通

「あら?平野君、どうしたんですか？」

もう授業始まってますけど……」

「アレはウチのクラスの終じゃないか、どうした？」

そういえば桜庭先生はかがみのクラスの担任だったな  
それより……

「かがみが倒れたんです！！どうすればいいですか！？」

「あらあら、大変ね」

それじゃあベツトに寝かせてくれる？」

俺は言われたとおりにかがみをベツトに運んだ

走ってる間は気がつかなかったがかなり顔色が悪い

「お姉ちゃん、大丈夫かな……」

つかさは不安の表情を隠しきれてない

そもそも学校まで全力で走ってきてかなり疲れているだろうに

「お前達は授業にもどれ。」

先生には私が説明しといてやる」

「………わかりました」

できればこのまま残っていたかったがさすがに授業をサボるわけには  
いかない

俺はつかさを連れて教室に戻った

移動の途中もつかさは不安そうだった。

「かがみだいじょうぶかなあ？」

昼休みに昼飯をくつているとこなたが呟いた

全員が心配そうな表情をしている

「倒れるなんて………夜更かしでもされたのでしょうか……  
……」

「こなたじゃあるまいし………」

そう呟いた俺をこなたが目で文句を言っていたがスルーする  
ふと、妹のほうを見てみた

「おいつかさ、なんか心当たり無いか？」

「ふえ？」

どうやら聞いていなかったようだ

授業中も今日は上の空だったな・・・

「・・・あれ？それっていつもと変わらないんじゃないか？」

「かがみさんが倒れてしまった原因に心当たりはありませんか？」

みゆきが俺の代わりに聞きなおしてくれていた

その間につかさはうんと頭をひねっている

「あ、そういえば昨日あんまり晩御飯食べて無かったかも」

「・・・は？」

あの食欲魔人があんまり食べなかった？

「・・・ってことは昨日から体調悪かったのか？」

と、俺が聞くと全員が首を振った

「セイカ君、かがみんはきつとダイエットしてるんだよ」

「だいえつと？」

ダイエットってアレか？

思春期の少女達が特に気にする必要も無いのに気にしてしまうアレ

を減らすためにする無駄な努力のことか？

「あいつが太ってるようにはまったく見えないうたが」

俺は思ったとおりの感想を口にするそこなたがため息をついた

「かがみんにとっては死活問題なんだよ」

「そんなおおげさな・・・」

「いえ、やはり体重は女の子なら必ず気にしてしまいますからね」

そういうもんか？

少なくともいつもの面子は全員ダイエットなんて必要ないように見

える

「・・・ってことは、あいつの自業自得か」

なら早い話がダイエットをやめさせればいいのだ

無理して体を壊していたら本末転倒だ

「よし、昼飯食ったら保健室行くか」



「そだね、いろいろと気になるし」

「わ、私も行く!!」

「ご一緒しますね」

と、言うわけで俺達は保健室へ向かった

「天原先生」

「あら、どうかしたの？」

保健室に入るとまたもや天原先生と桜庭先生がいた

桜庭先生、アンタいつもここにいるな

「お姉ちゃんの様子を見に来ました」

「ん？柊ならもう帰ったぞ？」

「え？」

どうやらかがみは早退したらしい

まあ、昼放課まで保健室で寝てるよりは早退のほうがいいわな

「それじゃあしょうがないね」

学校終わったらみんなでお見舞いに行こっか」

「そうですね、心配ですし」

「平野君……」

こっちでお見舞いの打ち合わせをしていると天原先生が手招きして  
いた

天原先生のほうに行く俺にしか聞こえないような声で

「柊さん……あ、お姉さんのほうよ？」

少し気にかけてあげてね」

「まあ、また倒れたりしたら助けますけど……」

「そうじゃないの、柊さんけっこう無理なダイエットをしているみたい」

どうやらこなたたちの予想は大当たりだったようだ

「保険医としては今すぐダイエットをやめてもらいたいんですけどね  
体を壊したら元も子もないですし……」

「っていうか、かがみはそんなに太ってないですよね？

むしろ俺から見たら細いほうだと思っんですけど」

俺はかがみの姿を思い浮かべた

うん、やっぱり太ってなんかいない

「そのあたりは男の子には分からないんですよ」

「そういうモンですか」

女心ってやつか？

俺には到底理解できん……

「ですから、平野君の目から見て無理をしているように見えたらとめてあげてください」

「もちろんですよ、あいつは親友ですから」

今朝のかがみを思い出す

あんなつらそうな表情を見るのはつらかった

「それじゃあ、おねがいますね？」

そう言うとき天原先生はデスクに戻っていった

その間に打ち合わせも終わったらしく今日の放課後に見舞い品を買ってかがみの家に行くことになった

Episode かがみ 1「乙女の悩み」(後書き)

さーで、次回のキミセカは？

セイカだ

かがみの奴……無茶ばかりしやがって  
体壊したら元も子もないっつーの

かといって言ってもやめるわけ無いからな  
しょうがない、俺も付き合ってやるか！！

次回 Episode かがみ 2「かがみ改造計画」

楽しみにしてろよ！！

## Episode かがみ 2「かがみ改造計画」

Episode かがみ 2

「ここがかがみの家か……」

「つかさの家でもあるけどね」

学校が終わった後、俺達は柊家を訪ねていた

つかさは一足先に帰っている

俺達が見舞い品を買っている間にお茶の準備をするそうだし、そんなに気を使わなくていいのにな

「それじゃあ、お邪魔しましょうか」

「そうだな」

インターホンを鳴らす

するとしばらくして反応があった

『はい、どちらさまですか？』

「あ……えっと、かがみ……さんのお見舞いに来ました」

さすがに呼び捨てだとまずいと思ったのでさん付けにしたにしても若い声だな、お姉さんか？

たしか前に四人姉妹って行ってたしな

『あ、ありがとうございます。』

今玄関開けますね』

さらにしばらく待つと玄関が開いた

「いらつしゃい、かがみのためにありがとうね」

すると中からかがみに似た若い女の人が出てきた

「いえ、お邪魔します」

「どうぞ」

俺に続いてこなたとみゆきも入ってくる

するとどたばたと足音が聞こえた

「みんな、いらっしやーい」

「やほ〜つかさ、さっきぶり〜」

「お見舞い用の果物を買ってきました」

みゆきが果物のはいつたバスケットを掲げる

ちなみに半額をみゆきが負担している

「・・・・・・・・・・・・・・・・バイトしようかなあ

「それじゃあお姉ちゃんもう起きてるから、部屋に案内するね」

「ああ、たのむ」

俺達はつかさの後をついていく

こなたとみゆきはもう知ってるんだよな

「ここだよ〜」

二階まで上がってひとつのドアの前で止まる

ドアには「KAGAMI」と書かれたプレートがぶら下がっていた

「おねえちゃん、みんなきてくれたよ〜」

『うん、入っていいわよ〜』

かがみの返事が聞こえたのでつかさはドアを開けた

かがみはベットのなかで上半身を起こしていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・パジャマ似合うな

しかし、女の子の部屋というのは初めてでつい見渡してしまう

けっこう片付いてるな

「へえ、ココがかがみの部屋か・・・・・・・・」

「ちよつと、あんまりきよろきよろするもんじゃないわよ」

「あ、すまん」

あわてて視線を戻した

が、部屋にひとり余計な人物がいる

「・・・・・・・・・・・・・・・・どちらさまですか」

どちらかというところかさに似た顔つきの人がいた

この人も姉妹か？

「おゝ、かがみって男友達いたんだ〜……もしかして彼氏？」  
「なっ！！違うわよ！！」

「……………どちらさまだ？」

なんか口論が始まりそうだったのでもう一度たずねた

「あゝ、この人はまつり姉さん、大学生ね」

「よろしくね……………えっと」

「平野セイカです」

「おうおう、よろしくね、平野君」

うゝん、あんまりかがみやつかさとは似てないな

「そういえば、さっきの人はかがみにそっくりだったな。」

さすがは姉妹」

「へ？」

あ、あれ？

なんかみんなぽかーんとしてるぞ

「ねえ、いのり姉さんって帰ってきてた？」

「ううん、まだ会社だけど……………」

「あのひといのりさんって言うのか？」

そつえばまだちゃんと挨拶してなかったな」

あとできちんと挨拶しておこう

「平野君や、キミが知っている女の人は一階にいたんだよね」

「え？まあ玄関で会いましたから」

かがみが大きいため息をついた

「セイカ君、それ……………お母さん」

……………

……………

……………

「は？」

俺は部屋を飛び出した

一気に下まで降りてリビングらしきところに入る

「あら？どうかしました？」

さっきの人がいた

「え、えつと・・・かがみたちのお母さんですか？」

「はい、みきといいます

よろしくね」

切れる息を整えながらさらに聞く

「・・・お姉さんじゃなくて？」

「あら、こんなおばさんがお姉さんなんてあの子達に失礼よ？」

いや、見た目若すぎ！！

姉妹にしか見えません！！

「えと・・・失礼しました！！」

（。　。　。　。　。）ジェットストリームコッチミンナ！！

「・・・お騒がせしました」

部屋に戻るとまつりさんはいなくなっていて全員がぼかんとしていた

「・・・なっとくしたかい？」

「・・・した」

こなたが俺の肩に手を置く

「私も始めは勘違いしたよ」

「私もです……」

ああ、俺には仲間がいるんだな

俺の目がおかしいわけじゃないんだな

「まあ、ウチのお母さんはねえ？」

「どんだけ」

おっと、俺のせいで話がかなりそれた

「かがみ、もう大丈夫なのか？」

「うん、もう大丈夫よ」

とりあえず一安心する

「大体、無理してダイエットしてどうするんだよ」

「なっ！！何でそのことを！！」

「天原先生から聞いた」

「先生……余計なことを」

かがみがため息をついた

「なんでそんなに体重なんか気にするんだ？俺から見ればぜんぜん太ってなんかいないのに」

「そうは言っても、実際体重が……  
つて！！なんでもない！！」

と、いいかけの言葉を飲み込んでごまかしているがはつきり聞こえた  
体重……増えたんだな……

「けど、実際に無理をされると今日のように体調を崩されてしま  
いますよ？」

と、みゆきが諭した

「うつ……反省してるわよ」

さすがに丸一日食事抜きはまずかったわ……

「はあ！？」

丸一日抜きつて……

それじゃあ逆に太るってテレビでいってたぞ



むしろ三食バランスよく食べて運動したほうが……

「……わかったよ、かがみん」

「なにがよ」

何に気がついたかは知らないがこなたが立ち上がった

「今日からみんなでかがみのダイエットを手伝うんだよ!!」

「あ、それいいかも」

「たしかにそれなら今日のように倒れたりする事ありませんね」と、みんなは盛り上がってるが……

「ちょ、ちよつと!!勝手に話を進めないでよ!!」

まあ、こいつはうんとは言わないわな

「そもそもみんなが手伝う必要なんて……」

セイカ君もそう思うでしょ!？」

かがみが俺に話を振った

他のみんなも俺に注目している

「……いいんじゃないか？」

一人で無茶するよりは天と地の差があると思うぞ

その俺の一言に

「さっすがセイカ君!空気よんでるね!!」

「うん!お料理なら任せて!!」

「私もダイエットについて調べてみますね」

どんどん話が進んでいく

あとはかがみが納得するだけだ

ちらりとかかがみの方を見ると目が合った

「わ、わかったわよ!!お願いするわ……」

「よっしゃ!それじゃあ……」

と、俺が分担でも決めようと思ったとき

「ただし!!」

その言葉をかがみがさえぎって

「セイカ君はいいから!」

そう言った

E p i s o d e    かがみ    2    おわり

E p i s o d e    かがみ    2「かがみ改造計画」(後書き)

さうて、次回のキミセ力は？

セイ力だ

おい！なんで俺が参加しちやいけないんだよ！！  
そりやできることは限られてるけど・・・それでも手伝って  
やりたいんだよ！！

次回    E p i s o d e    かがみ    3「蚊帳の外」

あんまり楽しみじゃねえよ！！とほほ・・・

## Episode かがみ 3「蚊帳の外」

Episode かがみ 3

「・・・・・・・・なんで俺だけ？」

かがみに俺だけ除名通告を受けてしまった・・・・・・・・俺、あいつの嫌がるようなことをしたのか？

「・・・・・・・・それでも力になってやりたい」

困ったときに助け合うのが仲間ってもんだ、だろ？

「だったら・・・・・・・・」

俺はケータイを開いてこなたに電話した

『やふゝ、どしたの？』

「あ、こなたか」

『番号登録してあるんだから私以外に誰が出るのさ』

「まあ、そうだよな。」

それはそうと何でかがみは俺だけ除名通告したんだ？俺なんか嫌がることしたか？」

まずはかがみがなぜ俺を除名したかを知らねば嫌がつてるのを無理やりつてのもな

『ああ、その辺は乙女心って奴だよ』

「その乙女心が分からんから聞いてるんだが」

『大丈夫、セイカ君が乙女心を理解できる日は来ないから』

「はあ！？それどういう意味・・・・・・・・」

『まあ、かがみの方は私たちに任せといて』

・・・・・・・・え？おとーさん！いま電話中！！・・・・・・・・しよゝ

が無いな」

電話の向こうでは父親ともめているようだ

『ごめ〜ん、今おとーさんと対戦中だったの』

「あ〜、じゃあ待たせても悪いから切るな」

『お〜、また明日』

ぷちっ

通話が切れる音がして俺はため息をついた

「乙女心ねえ……………」

つぶやいたところで理解できるものでもなかった

翌日の昼休み

「やつぽ〜」

「お〜かがみ、いつらっしや〜」

俺達が弁当を広げるとちようどかがみがやってきた

その後ろには

「あれ？なんか一人増えてねえ？」

「ほんとだ、男の子ね」

二人の女子が着いてきていた

「セイカ君は始めてよね、こっちの馬鹿っぱいのが日下部みさお

んで、その保護者の峰岸あやの。

二人と同じクラスよ」

「柊が男とつるんでるなんて今まで見たことねーぞ」

「えっと……………峰岸あやのです、よろしくね」

「んで、こっちが平野セイカくんよ」

「ああ、よろしく……………って、今日に限って何でお供がいるんだ？」

いつもは一人で来るのに

っていうか、こなたが言ってたみたいにハブられてるのかとおもった

「いやー、たまには柊と飯食いたいじゃん？」

「いつつもB組に行っちゃうもんね」

「………かがみ、友達は大事にしるよ」

その俺の一言に日下部は反応した

「だよなあー！柊はもつとあたし達を大事にするべきだってヴぁ」

そんな日下部をかがみと峰岸はスルーして

「あゝ、さつさと食べよつか」

かがみはいつもの定位置に

「平野君、隣いい？」

「ん？ああ」

峰岸は椅子を借りてきて俺の隣にすわった

「うつゝ、柊もあやのも冷たい………」

日下部の声はふたりに届くことは無かった、ご愁傷様

「お、今日はちゃんと食べてるな」

かがみの弁当は野菜中心の栄養バランスがよさそうなものだったことは

「うるさいわね、つかさが作ってくれたんだから残すわけにも行かないでしょ」

「えへへ、がんばっちゃった」

やっぱりつかさだな

調理師目指してるだけあって栄養とかも考えられるんだな

(けどなあ………)

やっぱり俺だけ蚊帳の外ってのもな

まあ、陰ながら支援を………って、ん？

視線に気づいて隣を見ると峰岸が俺を凝視していた

「・・・・・・・・俺の顔になんかついてるか？」

「え？う、ううん！！なんでもないの」

米粒でもついてたか？

それとも社会の窓が・・・・・・・・あ、大丈夫っぽい

「・・・・・・・・柊ちゃんのこと、大事にしてくれてるんだなって」

「そんなの、友達なんだから当たり前だろ」

「その当たり前をするのが難しいのよ」

こうやって見ると、峰岸は大人びてるな

かがみが保護者って言ったのも分かる気がする

それに比べて・・・・・・・・

「うえゝ、大好物のミートボールがあゝ」

放課後

「こなた！！帰るわよ！！」

終礼が終わるとほぼ同時にかがみがやってきた

「おおゝ、張り切ってるねゝ」

「ん？どうしたんだ？」

「運動中心のダイエットだよ。」

私は運動方面担当」

こなたが言うには

こなた 運動

つかさ 食事

みゆき 情報&監督

らしい

この面子ならダイエットも成功するんじゃないかと思う  
(けど、俺も何か・・・・・・・・)

もうメンバーは完璧とは思うが俺も何かしてやりたい

「なあ、こなた・・・・・・・・」

「セイカ君」

俺が言い終わる前にこなたが俺の耳に手を当てた

「・・・・・・・・ああ、まかせとけ！」

俺に指令を出した

View かがみ

「ふう、疲れた・・・・・・・・」

やっぱり運動は疲れるわ

そう思いながらペットボトルを開ける

(・・・・・・・・あ、さっき飲み切っちゃったんだった)

けど、のどはからからだ

こなたとの運動の後もこうやって続けている

こなたはアレだけでいいといていたけど自分ではまだ足りない気がする

「しょうがない、自販機で・・・・・・・・」

あたりをきよろきよろと見渡す

そういえばこのあたりには自販機が無かった

「・・・・・・・・公園に水のみ場あったかなあ」

近くの公園に行こうと思ったとき

「・・・・・・・・まだやるのか？」

後ろから声がして振り返った

View セイカ

こなたが俺に出した指令はこうだ



『かがみは終わったあと、絶対運動を続けるから見ていてほしい』  
その指令は止めろというものではなかった

こなたから運動が終わったという電話を受けて公園まで行くと案の定まだやっていた

そこまでしなくても十分かわいいのに……って、何いってんだ俺は！！

「けど、さすがに……」

時計を見ると9時を回ろうとしていた

「……まだやるのか？」

俺は姿を見せることにした

「……せ、セイ力君!？」

・ ・ ・ ・ ・ そこまで驚く必要ないだろ

「もう9時だぞ、さすがに門限とかまズクないか」

「え！？……ほんとだ」

どうやら時計を見ていなかったらしい

腕時計をみてあわてていた

「って、何であんたがいののよ!」

「……お前が心配だから来ただけだ」

そうやって俺はさっき買っておいたスポーツ飲料をかがみに投げた

「ちゅー、ちゅー」

かがみはそれをあわててキャッチした

「あ、ありがと」

「どういたしまして」

俺達は公園のベンチにすわった

かがみが飲み終わるのを確認すると

「よし、行くか!!」

「は？ ズリッ、ズメ」

「続き、やらないのか？」

俺は立ち上がって公園の出口まで走った

「付き合っ<sup>て</sup>やるよ、お前が満足するまで」

まあ、またぶつ倒れたりしないようにつてのもあるが  
ただ、こいつの力になってやりたかった  
「・・・・・・・・ありがと、セイカ君」

その声を合図に俺達は走り出した

・・・・・・・・明日からはこなたと一緒に手伝うか

おまけ1

「で、なんで俺だけ蚊帳の外だったんだよ」

「う、うるさいわね！！・・・・・・・・アンタのせいなんだから」

（太ってる姿なんて見せたくないのよ）

「ん？なんか言ったか？」

「う、うるさい！！黙って走れ！！」

「・・・・・・・・やっぱ、女心はわからん」

E p i s o d e    かがみ    3

Episode かがみ 3「蚊帳の外」(後書き)

次回予告

おい・・・なんだよこれ  
誰でもいい・・・うそだって言ってくれ  
かがみ、しっかりしろかがみ！！  
かがみ

次回「届かない手」

## Episode かがみ 4「届かない手」

Episode かがみ 4

「あゝ、疲れた」

ランニングの終わったかがみが座り込んだ

そして俺は……………

「ゼエ、ゼエ……………」

「セイカ君って意外と体力無いわね」

「う、うるさい」

くそっ、今まではこの程度走ったくらいじゃなんともなかったのに……………

これを機に鍛えなおすか、うん

「もう暗くなってきたし、帰ろうかな」

「お、そうだな」

辺りを見るともう日が暮れ始めている

俺もそろそろ飯を作らねば

7時過ぎると作る気なくなるんだよな

「それじゃあ、また明日」

「ああ、じゃあな」

ココまで乗ってきた自転車にまたがり、自宅を目指す

ダイエット作戦5日目

俺はこなたと交代でかがみの運動サポートをしていた

こなた曰く、「いつものかがみならもうバテてあきらめてる頃らしい

つかさ&みきさんの栄養バランス重視の食事

みゆきのメニューを基にした俺とこなたの運動サポート

これでやせないはずは無い

（まあ、今でも十分やせてると思うけどな）

みゆきの話だと大体一週間ぐらいで効果が見え始めるらしい

（成功するといいな）

そう思いながら俺は帰路を急いだ

なんやかんやでダイエット一週間目

「今日でちょうど一週間だな」

「そうね」

今日も放課後にいつもの公園で待ち合わせて準備運動をする

そして気になっていたことをかがみに聞いてみた

「なあ、効果は出てるのか？」

「ん？うん、少しだけど体重は減ってたわ」

「少しか……」

こいつのもののさしがどのくらいかは分からないがとりあえず痩せているようなので一安心だ

「さあ、今日も気合入れていくわよー！！」

「ほいほい」

痩せているのが嬉しいのか今日のかかがみはやけに張り切っていた

二人で並んで走り出す

いつもの車の通りが少ない道だ

「ほらほら、さっさとしないと置いてっちゃうわよー！！」

「おい！そんなに速度出すと後でばてるぞー！！」

そう、車の通りが少ないはずなのだ

ココしばらく一緒に走っていたが車が通ったところなんて見たこと

が無い

………だけど、今日は違ったんだ

「！！」

かがみ！！止まれえっ！！！！」

「え」

俺が気づいたときには手遅れだった

一時停止線を見越した暴走車両がカーブミラー越しに見えた

「かがみいつ！！」

手を伸ばす

間に合え

間に合え間に合え間に合え！！

だけどその手は届くことなく  
かがみの華奢な体を吹き飛ばした

「おい、しつかりしろ!!」

暴走車両はいったん止まったが、逃げるように走り去っていったけど、今はそんなことはどうでもいい

ひき逃げ犯は許せなかったがもつと優先することがある!!

「かがみ!!返事しろかがみ!!」

「うつつ……」

うめき声がもれる

左腕を見ると腫れていた

おそらく骨が折れたんだろう

近くを歩いていた人たちが集まってくる

「きゅ、救急車!!救急車呼べ!!女の子がひかれたぞ!!」

「かがみつ!!」

また失うのか

また守れないで

俺の目の前で

あれ？おかしい

俺はこんなこと、初めてのはずだ

そもそも友達なんて作ってこなかったんだから

じゃあ、ダレナンド？

俺が失ったのは、ダレ？

View かがみ

「いや、よかったね腕一本ですんで」

「良くないわよ！……まあ、自業自得なんだけど」

「かがみさんだけではなく、停止線を見視した車両のほうにも問題



はあります」

「うう……お姉ちゃん、死んじゃうんじゃないかと思ったよあ」

ここは病室

私の怪我は奇跡的にも左腕にひびが入っただけだった

これにはお医者さんもかなり驚いていたらしい

救急車で病院に運ばれた後、すり傷と左腕以外に外傷が無かったためにいろいろな検査をした

なんかよくわかんない機械をくぐったりしたけど、腕以外には異常は無かったらしい

「あれ？セイカ君は？」

いつの間にかこの部屋にいたはずの少年がいなくなっていた

「ああ、飲み物買いに行つて貰つてるよ」

「そう……」

あの時セイカ君が叫んでくれなかったら私はモロに車と激突していただろう

だから、お礼が言いたかった

「ただいま」

両手いっぱいジュースの缶を持ってセイカ君が病室に入ってきた

「おお、ありがとう」

「つたく、人をパシリにするなよな」

「ごめんね、セイカ君」

「わざわざすみません」

こなた、つかさ、みゆきがセイカ君から缶を受け取った

「ほれ、お前の分」

「う、うん……ありがとう」

セイカ君が私にスポーツ飲料の缶を渡してくれたつて、お礼言うんでしょ！！

「セイカ君……その、ありがとう」

「ん？ああ、ジュースくらい気にするな」

「そうじゃなくて、事故のとき叫んでくれて……アレが無かったらきつともっとひどい怪我になっただろうし……」  
い、言えた

自分でも自分が意地っ張りだということを自覚しているため（ツンデレじゃないからね）ちゃんといえるか不安だった

けど、セイカ君はそれに対して

「……ごめんな、かがみ」

そう、あやまった

「な、何で謝るのよ!!」

「俺がもっと早くに気づいて止めてやってればこんなことにならなかったのに」

そう言っただけでセイカ君は視線を落とした

「……過ぎたことを言っても仕方ないし、アンタらしくないわよ」

「そうそう、セイカ君は何でも深く考えすぎだよ!」

「セイカ君がいなかったら、お姉ちゃんもっと痛かったと思うよ」

「確かに無傷ではありませんでしたが、セイカさんがかがみさんを救ったことに変わりはありません」

そんなみんなの声に、セイカ君は顔を上げた

「ホント……お前らはお人よしだな」

そう言っただけでセイカ君は病室を出て行った



E p i s o d e    かがみ    4 「届かない手」 （後書き）

次回予告

悪夢とは忘れた頃にやってくるもの  
その悪夢がかがみに降り注ぐ

E p i s o d e    かがみ    l a s t  
「代償」

おたのしみに！

## Episode かがみ Last「代償」

Episode かがみ Last

「おはよう」

「こなちゃん、セイカ君おはよう」

「よう」

「かがみん、つかさ、おはよう」

あの事故から一週間

もう5月の中旬である

かがみはまだ首から左腕を吊っているものの無事退院した

ひき逃げの犯人は逃げている途中でスピード違反を成美さんに発見され見事逮捕された

警察に秘密で犯人を一発殴らせてくれた成美さんには大感謝である

「おはようございます、あとかがみさん退院おめでとうございます」

かがみたちに少し遅れてみゆきもやってきた

「ありがと、みゆき」

かがみの骨は全治2〜3週間ほどらしい

もつというと病院食でさらに体重も落ちたらしい

不幸中の幸いって奴か

「これで全員だな、んじゃ行くか」

今日はかがみの全快&退院祝いでケーキバイキングに行くのだ

病院では甘いものの類はほとんど無かったらしい

と、言うわけで駅前に最近できたケーキバイキングに行くことになったのだ

「はあ、おいし〜!」

一口サイズのケーキをほおばったかがみが至福の声を上げた

「やつぱり甘いものはいいいね〜」

普段はそこまで執着を見せないこなたも夢中でケーキをほおばっている

「私次とつて来るね〜」

と、空になった皿をもってつかさが走っていった

「か、かがみさん

あまりたくさん食べるとせつかくのダイエットの意味が……  
」

「アレだけやせたんだからちよつとくらい大丈夫よ」

そんなみゆきの忠告を無視して食べ続けるかがみ

「………なあ、みゆき」

「………なんですか?」

「俺にはかがみの頭の上に“太”と書かれた旗が立っているように見えるんだが」

「………私にも見えます」

その“太”という字は俺には“リバウンド”とも読めた

「………これどうしよ」

「………ちよつと調子に乗りすぎたかも」

「どんだけ〜」

「わ、私はもう無理です」

目の前にはまだ大量につまれているケーキ

それを見つめているメンバーが白旗を揚げていた

「・・・食べきれなかったら罰金だっけ？」

こなたがボソツとつぶやいた

それに反応してかがみがフォークを伸ばして何とかひとつを口に入れた

「ほれ、こなたも手伝いなさいよ

プリン系なら食べれるでしょ？」

「む、むり」

さつきまでは天使に見えたケーキが少女達には悪魔にしか見えない

まあ、少年は別だけだな

「おい、皿貸してみろ」

俺がそう言つとかがみが皿を俺のほうに差し出した

ぱくっ

ぱくっ

もぐもぐ

一度に3つほど口に入れながら胃に入れていく

まあ、こうなる気がしてたから俺は食べる量をセーブしてたわけだが

「ごっそさん」

きれいになった皿を置いて俺はコーヒーを飲んだ

「うお、さすが甘党」

こなたが感嘆の声を上げている

そうして俺達はケーキバイキングを後にした

( 。 。 ) 月曜日 ( 。 。 )

「おっす、かがみ．．．．．って、何で泣いてるんだ？」

いつもの集合場所でこなたと一緒にみんなを待っていると鏡が泣きながらやってきた

携帯でも落としたか？

「うっうっ．．．．．」

俺は視線をつかさに移すとつかさは苦笑いをしていた

そして隣にいるこなたに移す

するとこなたはにやりと笑って

「はい、かがみん

例のアレをどうぞ！！」

「ぐすっ」

体重が あっという間に

また増えた！！ by かがみ

「．．．．．あー」

わざわざ律儀に言わなくてもいいのに．．．．．  
ンじゃあ俺も

甘いもの 自重しなけりや  
肉の元 by セイカ



「つてことか？」

「う、うるさぁーい!!」

ま、好き放題に食った代償ってことだな  
ご愁傷様

「まだ忘れてるのか………?」

「それとも、思い出したくないだけか？」

「まあ、後者なのは分かってるけどな」

「どれだけ頑丈に鎖をかけても、いつか鉄は錆びて崩れ去るんだ」

「自分で自分を壊す前に………思い出せよ」

『じゃないと、このセカイから消えちまうぜ?』  
『』

E  
p  
i  
s  
o  
d  
e  
か  
が  
み  
L  
a  
s  
t

お  
わ  
り

Episode かがみ Last「代償」(後書き)

さーて！！次回のキミセカは！？

こなたです

セイカ君バイト探してるんだって？

ふむふむ、働くことはよきことかな！！

だったら私が紹介してあげるよ！！

楽しみだね・・・・・・・・むふふ

次回

「セイ子ちゃん」

おたのしみに！！

### 第三十三話「セイ子ちゃん」

#### 第三十三話

「な、なんだよこれ……」

今俺がいるのは銀行のＡＴＭ

そこで一週間分の生活費をおろそうとしていたのだが……  
一週間どころか３日分ほどしかなかったのである

「何で後これだけしか……今月どうすればいいんだよ」  
つまりはこなたたちと知り合ってからいろいろと交際費に費やしてきたのだ

普段の計算では会わないはずである

「……どうしよう」

この年で俺は生活費に困るという体験をすることになった

「お金を貸してください!!」

翌日の学校の放課後in保健室

俺が唯一頼りにできる先生方三人に俺はD O G E Z Aしていた

「ど、どないしたんや急に!？」

黒井先生も面食らうはずである

いきなり生徒にお金を貸してほしいと頼まれているのだから

「いや、土下座されても教師と生徒間での金銭のやり取りはまずいだろう」

「そこをなんとか!!」

かがみたちの担任の桜庭先生にも食い下がる

「ダメなものはだめだ、しかも自業自得だろう」

「ぐう……」

そういわれてしまうと立つ瀬が無い

残りは……

「あ、天原先生……」

我らが白衣の女神のほうをみる

そこには満面の笑みで腕をクロスさせている天原先生がいた

「金ないんやったらバイトしたらどうや？」

「……バイト？」

「せや」

バイトか……

「そうか……その手があった!!」

黒井先生! ありがとうございます!!」

「お、おう？」

俺はいてもたってもいられずに保健室を飛び出した

目的地は親友達が残っている教室である

「こなたあ……!!」

「ぬおっ!! どしたの!？」

勢いよくドアを開け放つと俺を待っていてくれた四人組みが目に入  
った

その中の一番ちっこい人物に歩み寄る

そしてその肩をつかんで

「バイトを紹介してくれ!!」

と頼んだ

「ば、バイト？」

「そう！！かがみに前聞いたけどお前バイトしてるんだろ！？」

「う、うん」

「だったら俺にそのバイト先紹介してくれ！！」

そう俺が行ったとき

なんとなく空気が凍った

「・・・・・・セイカ君、ホンキデスカ？」

まだギプスの取れていないかがみが恐る恐る聞いてくる

「ああ、仕事がつらいものだっていうのは知ってる。

けど俺は今働かなくちゃいけないんだ！！」

確かこなたは喫茶店みたいところでバイトしているはずだ

接客はあまり得意ではないが厨房のほうなら自身はある！！

「セイカ君・・・・・・そこまでの覚悟があるならNOとはいえないよ」

こなたが俺の手を握った

「じ、じゃあ！？」

「うん！！ともに労働の汗を流そう！！」

「ああ！！」

そんな感じで輝いている俺達を遠くで見守っている三人がいた

（ねえ、こなちゃんのバイト先って・・・・・・）

（コスプレ喫茶・・・・・・ですよ？）

（セイカ君、もしかして普通の喫茶店化何かと勘違いしてるんじゃない・  
・・・・・・） 大当たり

（（（まずいかも）））

そして土曜日！！

「いやー、さすがセイカ君だね  
書類審査は一発だったよ」

「ああ、後は面接か！！」

そしてその面接が今日行われる

こなた曰く『質問に答えるだけでok！！』だそうだ

「んじゃあ、いつてくるな」

「がんば」

俺は面接用の部屋の中にはいった・・・・・・

「いやー、セイカ君が打ちの店でバイトしたいとは予想外だったよ。  
店長はもう顔だけでokしてたし私はセイカ君の衣装でも用意しようかな」

「こなた！！採用だ！！一発でOKだった！！」

面接が終わって30分ほどで俺の採用が決まった

「そりゃセイカ君は素質あるもん」

と、こなたは言ってくれた

仕事が決まるのがこんなに嬉しいとは

「けど質問の内容が変だったな。

趣味とかはまだ分かるけど好きなアニメなんて聞く必要あるのか

？」

「ほう、なんて答えたの？」

「ん？ガン ムSE Dデステ ニー」

「と、言うわけでココがお店だよ」

俺はこなたに案内されて面接会場の二階に案内された

おそらく下が事務室で上が店なんだろう

「にしてもへんぴなところに店構えてるな。

こんなところに客が来るのか？」

「くるよ、しかもかなり」

「へえ、隠れた名店って奴か

にしてもアキバにあるところで働くつてのがお前らしいな」

アキバにあるって聞いたときは少し驚いたがもともとは電気街なんだ  
普通の喫茶店くらい・・・・・・・・

普通の・・・・・・・・

「はい！ここだよ」

目の前に置かれている看板

『コスプレ喫茶』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？何で固まってるの？」

おかしいな、俺も目が悪くなったかな？

みゆきに頼んでいい眼鏡屋でも紹介してもらおうか

あ、金が無いんだった

「さあ、とつと中にはいる！！」

「あ、ああ・・・・・・・・」

そうだ、きつと違う店の看板がたまたま置いてあったに決まってる



「んなわけあるかあ

!!」

「もういい、俺の勘違いなんだ。

受かった以上は責任持つて働こう」

「そう、落ち着いてくれて何よりだよ」

少し取り乱したが、まあいい

人前に出ない厨房で働けば………

「はい、セイカ君の衣装ね」

「ちよつとまで、まさか俺はホール（接客）か？」

「YES!! アスミス!!」

ぐっ、しかたない

きつと執事服とかだろう

なんか黒いし、フリルも………

って、フリル？

「って、これメイド服だろうがああああああああ!!」

「そだよ、着替え方分かる？何なら着せてあげよつか？」

「いや、そうじゃなくて!!なんで女物なんだよ!!」

こなたからメイド服を奪い取り目の前に突きつける

「受かった以上は責任持つて働くんでしょお？」

「ぐっ………」

「さあ!!着替えた着替えた!!」

「と、言うわけで新しく入ったセイカ君．．．．．もとい、セイ子ちゃんだよ」

「よ、よろしくお願いします．．．．．」

こなたによつて俺が紹介（さらし者）される

「あの子男の子なんでしょ？」

「やだ、女の子みたい！！」

ところどころから黄色い声が上がっている

ああ．．．．．死にたい

「厨房のほうもいけるからき使ってあげてねー！！男の子だし！

！」

「くくくはーい！！」

（くそ．．．．．こなため．．．．．けどこれも生活費のためだ！！）

心の中で毒をついてこなたをにらんだ

「はいはい、セイ子ちゃん！！そんな怖い顔したらダメだよ」

「．．．．．はい」

「それじゃあ！！開店しよつか！！」

こなたの一言でみんなが動き出した

俺も厨房に走り出した

「はい！！セイ子ちゃんは接客だつてばー！！」

「い、いやだ！！離せえー！！」

「大丈夫大丈夫！！そのうちなれるSA」

「慣れるかつー！！」

と、この時点ではいつていたが

3日もすればなじんでいる俺がいるのだった

### 第三十三話 終わり

### 第三十三話「セイ子ちゃん」(後書き)

さて、次回のキミセカは!?

つかさです

もうすぐ中間テストです、ど、どうしよう!!

ふえ〜ん!!お姉ちゃん!!セイカ君!!助けてえ〜!!

次回「学びて時にこれを習う」

おたのしみに!!

### 第三十四話「学びて時にこれを習う」

「おつす、みんな」

朝、学校にやってくるすでにいつものメンバーはそろっていた

「おはよ」

何か話していたのか四人ともこなたの席に集合している

「何の話してたんだ？」

「ああ、もうすぐ中間テストじゃない？それなのにこなたとつかさ勉強してないのよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちゅうかんとすと？」

「いや、しょうがないじゃん。」

ネットの誘惑には勝てないのだよ」

「わたしも、ついつい寝ちやうんだよね」

「つたく、あんたたちは・・・・・・・・」

おい、ちよつと・・・・・・・・

「セイカさんは勉強は進んでいますか？」

「・・・・・・・・中間って・・・・・・・・いつだっけ」

「……ごめん、よく聞き取れなかったわ  
もっかい言ってくれる？」

かがみが念を押すように聞いてきた

「中間テストって……イッデス力？」

「来週……ですけど……」

し、しまったあああああああああああああああああああ！

「まさか、勉強してないとか？」

「勉強どころか存在そのものを忘れていた！！」

ここのところこなたの家出やらかがみのダイエツトやらで忙しくて・  
……すっかり忘れてた

「おお！！意外な人物が私たちと同類だった！！」

くつ、実際忘れてただけあつて反論できない！！

「セイカ君、一緒に補習がんばろうね？」

つかさ！！お前はあきらめモードに入るな！！

「このままじゃ……このままじゃだめだ！！」

大勉強会開催！！

というわけで土曜日

「やほー遊びきたよー」

「遊びじゃない！勉強会だ！！」

「クッキー焼いてきたからみんなで食べようね」

「お邪魔させていただきます」

そんなこんなで勉強会することになった

会場は俺んち

理由はスペースに余裕があつて多少騒いでも迷惑にならないからだ  
いや、勉強会だから騒ぐことはないとは思うんだが

「さつてと、かつて知つたる人の家

新しいゲームあるー？」

こいつがいるからなあ

心配である

「なあ、みゆき

ここはどうなるんだ？」

「ああ、ここはですね……」

リビングにて勉強中

みゆきとかがみは教えながら（他人に教えると理解が深まるらしい）  
俺は教科書を見ながらわからないところを質問

こなたとつかさはかがみとみゆきに頼りっぱなしである

「かがみーん、ここー」

「お姉ちゃん、ここどうなるのー？」

「だー！！あんたらはもう少し日ごろから勉強しろ！！」

二人の対応に困り果てているかがみが叫んだ

「ん？この問題はこの公式使って代入した後にこつちを使えば解けるぞ」

「おお！！ホントだ！！」

「セイカ君すごーい！」

「あれ？そこは先ほど教えたばかりのところですけど」

「身につくの早いわね」

いや、そうでもない

「要は集中力だ集中力」

俺は普段は勉強机に向かったりしないがテストが近くなるといやい

や座る

けど一度スイッチが入ると平気で5時間はぶっ続けでやれる  
それで結構頭に入るものである

「あー、もう疲れたー!!」

「はやっ!! まだ1時間しかたつてないじゃない!!」

早速こなたが悲鳴を上げた

「それじゃあ、休憩しようよ

クッキーみんなで食べよ?」

「わーい! つかさのクッキー!!」

開始早々休憩つて……まあいいか

俺はこれから運ばれてくるであろうお茶とクッキーのために机の上  
を片付け始めた

「おまたせ」

「まってましたー!!」

「見事なクッキーだと感心はするがどこもおかしくはないな」

さすがというべきか作ってから結構時間はたっているようだがつか  
さのクッキーはうまそうである

実際食つてもうまかった

「やつぱりつかさの作るクッキーはおいしいわね」

「はい、ついつい手が伸びてしまいます」

「えへへ、ありがとう」

つかさは恥ずかしげに頬をかいた

「俺はお菓子はあんまり作ったことないな」

「そうなんだ」

かがみが意外そうな声を出した

「ああ、食事のほうはやらざるを得ないから自然と身についたけど・



・・・

お菓子はほとんど作ってないな」

「あー！セイカ君、だったら今度一緒につくろうよー！」

「つかさと？」

つかさと一緒におかし作りか

楽しそうだな

「いいな、そのうちやろうぜ」

「うんー！」

最初は簡単なのいいな

いきなりケーキとかはきついから・・・って、なんか視線を感じる

「じゅ・・・・・・・・」

「じゅ・・・・・・・・」

うつ、な、なんだ？

こなたとかがみのほうから突き刺さるような視線が・・・・・・・・  
（なあくんかセイカ君うれしそうだなあ・・・・・・・・って、何で私そんなこと気にしてるんだろ）

（何よ、うれしそうな顔しちゃって・・・・・・・・ってー！何でお菓子作るだけなのにこんなに気になるのよ・・・・・・・・）

「お、お菓子作りもいいけどいまは中間に向けて勉強しないと！」

！うんー！！」

その痛すぎる視線から逃れるために俺は話題を変えた

「そうですね、努力した後の娯楽は普通よりも楽しく感じますから」

よし、そうと決まればまだ勉強できてないところやらないとな

・・・・・・テストまでネットゲは封印しよう

テスト当日ー！！

セイカ

（お、ここはかがみに教えてもらったな．．．．．ここはみゆきに教えてもらったとこで．．．．．これはこなたとつかさが大量に頭に？浮かべてたやつだ）

こなた

（ここってかがみに教えてもらったような．．．．．うう、けど思い出せない．．．．．）

って、およ？ここセイカ君に教えてもらったとこだけ．．．．．あ、わかるかも）

つかさ

（えへへ、セイカ君とお菓子作るの楽しみだなあ）  
って、それどころじゃない！！うう、わかんないよあ．．．．．  
．．．

かがみ

（ここはセイカ君と一緒に解いたやつだけ．．．．．あの勉強会楽しかったな。

セイカ君も．．．．．って、何でセイカ君が出てくるのよ！！集中集中．．．．．）

みゆき

（この問題はセイカさんがあっさり解いてしまいましたね、結構難しい部類だったのですが。

……ふふ、あんなお勉強も楽しいかもしれません）

結果発表！！

「今日結果発表だったよな」

「何でわざわざ掲示板に張り出したりするのさあ」

「はいはい、文句言わずにさっさと順位確認しなさいよ」

「うう、見たくないよお」

「皆さんがんばりましたからきつといい結果ですよ」

ちなみにうちの学年は40人×12クラスで480というマンモス校である

俺たちはまず学年順位上位者の掲示を見た

一位から名前を確認していくと

「あ！！ゆきちゃんすごい！！」

「3位！？やったじゃないみゆき！！」

「すごいな……さすがだな」

「あ、ありがとうございます」

なんと、みゆきは3位だった

これに対してこなたが「人類みな平等なんてうそだ……」  
と、ぼやいていたがそれは日ごろの努力の差である

「私は……32位だ!!」

と、かがみが喚起の声を上げた

「お姉ちゃんおめでとー!!」

「うーん、俺のはどこだ？」

こなたとつかさが見つかつてないのはしょうがないとして  
俺のはどこだろう

「あ、セイカさんありましたよ

69位です」

「お、サンキュみゆき」

69位か、まあまあだな

「な、なんで存在忘れててあわてて勉強したセイカ君がそんなに順  
位いいのさ!!」

「一応授業は聞いているんだよ」

普段から寝てるやつが何をほざくか  
で、結局こなたとつかさは？

「……367位」

「……384位」

ちなみに上がこなたで下がつかさである

「ま、まあ元気出さないよ

一応赤点の掲示も見にいきましょう」

赤点を食らった人間は問答無用で張り出される

この学校にはプライバシーとかはないのだろうか

国語から確認していくが……

「……セイカ君」

「何ですかかがみ様」

「何であんたの名前があるの？」

後かがみ様言うな」

ちなみに俺の名前が乗っているのは古文と英語である

「ああ、俺その二つだけはさっぱりだめなんだ  
ほかのは満点に近いんだけど・・・」

「・・・なんであんた文型選んだのよ・・・」

いや、理系のやつらはいつつもがりがり勉強してて一緒にいるとき  
が滅入りそうだったからな

「まあまあ、一緒にがんばろうではないか」

「うん、セイカ君も一緒にがんばろうね！」

どうやらこなたとつかさも補習を食らったようだ

(・・・覚悟はしていたが・・・面倒くさいな)

かといって補習をサボるわけには行かない  
しばらくは休日出勤の必要がありそうだ

### 第三十四話 おわり

第三十四話「学びて時にこれを習う」(後書き)

次回予告

セイカです

なんだかんだでもうすぐ五月も終わりだ  
な？どうしたこなた、そんなにそわそわして  
今日なんかあるのか？

次回「命の生まれた日に」

お楽しみに！！

### 第三十五話「命の生まれた日に」

「ふんふん」

「なんだ？やけに機嫌いいな」

いまは中間テストが終わりつかの間の平和を味わっているのだが・

・

なぜかこなたの機嫌がいい

何故？

「セイカ君、あさつては何の日か知ってる？」

「ん？・・・ああ、知ってるぞ」

「そっか！楽しみだねえ」

「・・・まあ、そうだな」

確かに明後日は調理実習だが

こいつってそんなに調理実習好きなのか？

「アンタ馬鹿でしょ」

「何だいきなり」

と、さっきの話をかがみにするといきなり罵倒されてしまった  
またもや何故？

「あいつが調理実習楽しみにするとも思ってるの？」

「・・・料理ができない誰かさんよりは楽しみかと思うがな」

「あ？なんか言ったか？」

「・・・なんでもないです」

こええよ！！そんな顔でにらまないでください

マジで

「はあ……………明後日はこなたの誕生日なの！！」

……………マジデスカ

「あいつ結構アンタからのプレゼント期待してるみたいよ。

男なら甲斐性見せなさいよね」

「……………なぜ俺があいつに甲斐性を見せねばならんだ」

まあ、プレゼントくらいはいいか

バイトして金は一応入ってるし（女装はやめさせてもらいました）

「っていうか、あんたも自分の教室戻ったら？

もうすぐチャイムなるし」

今俺はかがみのいるC組にお邪魔しているのである

おかげで目だつてしようがない

「ああ、邪魔したな」

俺はかがみに手を振りB組に戻った

放課後

「でもあいつの喜びそうなものか……………なんだろうな」  
と、俺が真っ先に向かったのは秋葉原だった

「まあ、これくらいしか思いつかないし……………」

そして青い看板のアメシヨップに入る  
すると





適当に買って行って「もう持ってます」「じゃあ話にならん……

・

「……そうだな、ほかの店に行ってみる」

「うむ、励めよ少年……！」

あと、そんなキミにはこの絶版格安DVDを……」

店長が言い終わるころには俺はすでに店を飛び出していた

場所は変わって近くの商店街

ここならいろいろな店があるから何かいいものが見つかるだろう

「うーん、ぬいぐるみ……は無いな」

あいつがぬいぐるみ抱きかかえてたらもう小学生にしか見えない

あとは……アクセサリーか服？

「服は好みが分かれるからな……よし、アクセサリーでも  
見てみるか……！」

「……どれがいいんだ？」

目の前には女性向けのアクセサリーが並んでいる

俺はアクセサリーなんて持ってないからどれがいいのかさっぱりわからん

ああ、こんなときに女子の知り合いがそばにいればな……

「そつだ……みゆきでも呼んで……」

「……先輩？」

後ろで声がしたので振り返った

「・・・・・・・・・・・・・・・・な、永森!!」

「先輩・・・・・・・・こんなところで何やってるんですか?」

後ろにいたのは中学時代の後輩だった

学校帰りなのか聖フィオリナの制服を着ている

「丁度よかった! ちょっといいか?」

「は、はい?」

俺は誕生日プレゼントを探していることを伝えた

「と、言うわけでアクセサリーなんてどうかと」

「・・・・・・・・彼女・・・・・・・・ですか?」

「全力で否定する」

こなたとカップル・・・・・・・・想像できん

「そうですか・・・・・・・・(よかった)」

「で、正直俺にはどれがいいのかさっぱりなんだ」

「・・・・・・・・とりあえず指輪はだめです。」

サイズがわからないともったいないですから」

なるほど、確かにブカブカだったりひまらなかったりしたらもった

いないな

「じゃあ、ネックレスとかか」

俺はネックレスの棚を物色し始めた

「チェーンも細いのと太いのがありますからどっちのほうが似合う

かも考えたほうがいいですね」

「ふむ・・・・・・・・ちなみに永森はどっちのほうが好きだ?」

「私ですか? 私は細いほうが・・・・・・・・」

なるほど

こなたも太いのは似合わないだろうな

後はどういうデザインかな

「・・・・・・・・あ」

ふたつのネックレスが目に入った

白と黒の翼が絡み合うようになってるネックレス

チェーンも細い

そしてもうひとつは蒼と緑の羽がデザインされているネックレス  
こっちもチェーンは細い

俺は二つを手にとった

「永森！！ここで待っていてくれ！！」

「は、はい」

俺はその二つをレジまで持て行った

「ラッピングはされますか？」

「ああ、はい。」

お願いします」

ラッピングが終わったそれを受け取って永森のところに戻った

「ほら、これ」

「え？」

俺はそのうちのひとつ……蒼と緑の羽のネックレスを手渡した

「これ……誕生日プレゼントなんじゃ？」

「それはこっちな、これは今日一緒に選んでくれたお礼だ。」

「あ、ありがとうございます」

永森とはそこで別れた

プレゼントも決まったので後はあさつてに渡すのみ

……こなたは喜んでくれるだろうか

「と、言うわけでアンタは料理のほう手伝ってね」

「ほいほい」

こなたの誕生日当日

俺たちはこなたの家に集まっていた

（こなたはバイトに行っているがすれ違いを避けるために今日の誕生会のことは教えてある）

「セイカ君、お塩とって」

「ほら」

俺はつかさとともに料理をしている

「お皿、これでいいですか？」

「ああ、そこおいておいてくれ」

「はい」

さらに居候の小早川も台所関係の雑務を手伝ってくれる  
ちなみに今この家にいるのは

俺、かがみ、つかさ、みゆき、小早川、岩崎、成美さん、あとこなたの父親のそうじろうさん。

あと二人来るらしいが俺は聞いたことがない名前だった

「おじやまするっすー」

「おジャマするネー！」

ん？その二人組みがきたんだろうか

けどどこかで聞いたような声だ……………

「って！！ああー！！」

「うおう！あなたはいつぞやのー！！」

「ナイスチャンスデスよヒヨリ！！」

こ、こいつらはいつぞやの腐女子！！

だか今回は脱がされてたまるか！！

「あ、田村さん、パトリシアさん、いらっしやい」

奥から小早川が二人を迎えに来た

「し、知り合いなのか」

「はい、同じクラスの田村さんとパトリシアさんです」

お、同じクラスだったとは……………

警戒は緩めずに自己紹介する

「平野セイカだ」

「改めまして、田村ひよりっす」

「パトリシアマーティンとイイます、パーティと呼んでクダサイ!!」  
まあ、こなたのためにきてくれたいるのだから無下に扱うこともできない

とりあえず飾り付けの手伝いを頼んで俺はキッチンに戻った

「もうそろそろ帰ってくるか」

「そうですね」

俺はみゆきと時計を見た

もうそろそろ8時、こなたのバイトが終わるのが7時だからそろそろだ

『ただいまー』

「お、帰ってきたわね」

俺たちはリビングの入り口に立つ

そしてドアが開いた瞬間に

『お誕生日おめでとー!!』

いつせいにクラッカーを鳴らした

「うおっ、びっくりしたよ」

驚くこなたをよそにみんなが次々と祝いの言葉をかける  
そして

「こなたあーりっぱになつてえー!!」

そうじろーさんがこなたに抱きついた

「ちよっ、ひげが痛いよおとーさん」

なんか俺の親父に似てるな……

……無性に蹴り飛ばしたくなってきた

「はいはい、おじさん

そろそろ料理でも食べましょーよ」

と、成美さんが止めてくれたおかげでこなたは悪夢から開放された  
「それじゃあ、セイカ君」

かがみが俺に立つように言う

「お、俺かよ」

「セイカ君がんばってー」

「ファイトです」

つかさとみゆきも声援を送る

「あー、あれ言うのか・・・オホン

今ここにあるひとつの青い命の輝きが生まれた日を祝して

ここに祝いの詞を

・・・あー、めんどくさい!!

こなた!!誕生日おめでとぅ!!乾杯!!」

ちなみに今のはみんなが面白半分に考えた詩である

はじめから俺に言わせるつもりだったようだ・・・くそ、恥ずかしい

「うん!!ありがとセイカ君!!かんぱーい!!」

みんなが好きに飲み食いしている

「ところで平野君」

そのなかそうじろうさんが俺のところに来てきた

「なんですか?」

そうじろうさんはそういつた俺の方をつかんで鬼のような形相で

「キミはいつたいこなたのなんなんだあ?」

どすっ!!

「げぼえあっ」

「おとーさん、あんまりちょーしにのつてると痛い目見るよ?」

ナイスだ、こなた

「ほら、おとーさんなんかほっといってみんなで食べようよ」

「あ、ああ」

俺はこなたに引つ張られてかがみたちがいるところへ合流した  
そこではもうかがみ達がプレゼントの用意をしていた

「はいこなた、おめでとう」

「こなちゃん、ハッピーバースデー!!」

「泉さん、お誕生日おめでとうございます」

「うん!! ありがとうみんな!!」

こなたはみんなからのプレゼントを本当にうれしそうに受け取って  
いた

（よし、俺のも……俺のも……あれ?）

俺は自分のかばんに入れておいたプレゼントの箱を探す  
だが

（……ない?）

「セイカ君、どうしたのよ」

「……まずい」

「……まさか、忘れてきたとかじゃないでしょうね」

「……そのまさかだったりする」

なんてこった

なれないプレゼントなんか買ったからか?

とにかく家にとりに戻らないと

「セイカ君、どうしたのさ」

こなたがそばにやってきた

「……すまん、俺ちよつと家に戻る!!」

「え?」

「すぐに戻るから!!」

俺は一気にこなたの家を飛び出した

「早く……もつと早く走れないのかよ!!」



プレゼントを渡して  
さっきみたいな笑顔が見たいんだ!!

### 第三十五話 終わり

第三十五話「命の生まれた日に」(後書き)

さーて、次回のキミセ力は？

何やってんだよ俺はっ！！

こなた・・・・・・・・すぐに戻ってくるからな  
まっててくれっ！！

次回「小さな想い」

お楽しみに

### 第三十六話「小さな想い」

「はあっ、はあっ!!」

自転車を降り自分の家の前に止める

急いで家の中に入り自分の部屋に向かう

「あ、あつた!!」

机の上には本来ならすでにこなたの手に渡っているはずのプレゼントがあつた

「時間は……やばい、もうすぐ9時じゃねえか……」

「

向こうを出たのが8時半だったから……30分はかかるか  
しかも全速力で来たせいで体力がもうない

「だけ……どっ!!」

家を出て鍵を閉め、再び自転車にまたがる

そして再びペダルを踏みしめた

（はやく……戻らないとっ!!）

もう、向こうではみんなゲームでもしているころだろう  
そして10時を過ぎれば……誕生会は終わる

かなりぎりぎりになってしまうが、間に合わせたい

「はあ、はあ……後半分くらいか」

こういうときはスタミナのない自分が恨めしい

もう、速度もかなり落ちてきた

「な……もう9時半!」

腕時計を見るとすでに時間は9時半を回っていた  
後30分

「くそっ!!急がないと……」

だけど神様とは意地悪なものである  
にゃ

「ん?猫か?」

塀の上に一匹の猫がいた

その猫がやけにこつちを凝視している

「わるい、今お前にかまつてる時間は………」  
ぴょん

と、猫は俺の自転車のかごに着地し

「あー!!」

プレゼントの箱を啜えて走り出した

「ま、まちやがれー!!」

自転車で必死に追いかける

だが人間と動物、その差は歴然である

見失うことはないが距離をだんだん離される

だが、頭を使うのが人間

「このっ!!」

自転車を降りて近くの小石を投げる

それは猫には当たらず近くの塀に当たり跳ね返って猫の目の前に落ちた

「にゃあっ!!」

それに驚いて猫が一時停止する

「どらあ!!」

俺は自転車を飛び降り壁をけって猫の真上に着地した

「この野郎………やつとつかまえたぜ」

俺は猫の首根っこをつかみ啜えているプレゼントボックスを取り上げた

軽くよだれがついてはいるが………つぶれたりはいない

「時間は………!!」

腕時計を見る

その針が指しているのは………

「なっ………!!」

午後10時

数行の出来事だったがかなりの時間を使ってしまったらしい

「は、はは．．．．．」

なんて無様なんだろう

プレゼントを忘れ、誕生会を飛び出し、猫にプレゼントを奪われ  
そしてタイムアップ

「．．．．．プレゼントだけでも届けよう。」

ポストに入れとけば明日の朝には気づくだろう」

俺は自転車を押して泉家を目指した

「．．．．．やっぱりみんなはいないよな」

もうすでに10時半

いくつかの自転車が消え家の中からはぎやかな声は聞こえなかった

「せめて．．．．．」

俺はプレゼントを取り出すとポストに入れようとした．．．．．  
だが．．．．．

「遅いよ、待ちくたびれちゃった」

ど、どこだ？

今こなたの声が聞こえた気がしたけど．．．．．

「上だよ、上」

そついわれて見上げてみると

二階の窓からひよっこり顔を出したこなたがいた

「こ、こなた．．．．．」

「玄関閉まっちゃってるからさ、窓から入ってきて」

「ちょ、待てよー!!」

だがこなたは窓から顔を引つ込めてしまった

窓から入れとか・・・怪しい人じゃねえか

けど無視するわけにもいかない

俺はブロック塀に上り屋根を伝いこなたの部屋の窓から侵入した

「・・・・・・・・お邪魔します」

靴を屋根の上に載せておいて家に入る

窓の下はこなたのベットのようであれはその上に着地した

「はあ・・・・・・・・みんなもう帰っちゃったよ」

「・・・・・・・・悪い」

申し訳ない気持ちでいっぱいだった

「ごめんな、せっかくの誕生日なのにプレゼント・・・・・・・・」

「プレゼントなんかどうだっていいよ!!」

だが、俺の声はこなたの叫びにさえぎられた

「プレゼントなんて明日でもよかったんだよ

私はみんなで一緒に過ごせたらそれでよかったんだよ」

こなたの叫びは続く

「かがみや、つかさや、みゆきさんや、ゆーちゃんや、みなみちゃんや、ひよりんや、パティや、おとーさんや、ゆいねーさんや・・・

・・・・・・・・」

「セイカ君と、一緒にいらればっ!!」

・・・・・・・・俺は、本当に馬鹿だ

プレゼントなんていつでも渡せる

今日忘れてしまったら、明日でもいい

渡せることに変わりはないから

けど、今日という時間はとりもどせない

みんなと過ごす、この時間だけは

なんで、俺は飛び出したんだろう  
あのままのこつていれば、こんな・・・  
こんな悲しい顔を見ないですんだのに

「・・・・・・・・こなた」

けど

「・・・・・・・・なにさ」

これだけは、伝えたい

俺はプレゼントボックスを開けて、あのネックレスを取り出した  
そしてこなたのそばによって

こなたの首にそのネックレスをかけた

「・・・・・・・・これ」

「何でかわかんないけど、それがこなたに似合うと思ったんだ」  
黒い翼と白い翼

それはこなたと俺のようだ

さまざまな色と混ざり合うことができる白      こなた

そして、何とも混ざろうとしない黒      俺

「だから・・・・・・・・なんつか

・・・・・・・・誕生日、おめでとう」

「・・・・・・・・これだけ？」

「は？」

こなたは胸のネックレスをいじりながら言った

「これだけ遅刻したんだからもう少し何かあってもいいと思わない  
？」

「いや、んなこと言われても・・・・・・・・」

持ってきてるのはこのプレゼントとあと置きっぱなしのかばンだけ  
だが・・・・・・・・

「どうしろって言うんだよ」

俺がそういつとこなたは自分のベットのほうに歩き出した

「ここに座って」

「？」

言われたとおりこなたの指した場所に座る

すると

「えいっ!!」

「ぶおっ!!」

こなたがダイビングしてきた

ひじを突き出して

「まったく……やっぱりセイカ君は馬鹿だよ

頭いいけど馬鹿だよ」

「い、意味がわからん……」

「つか、どいてくれ」

今俺とこなたはまるでこなたが俺を押し倒しているかのような状態になっている

「やだ、これは罰ゲームだもん」

「罰ゲーム？」

「そう」

こなたはそのまま、目を閉じた

「……………今日が終わるまで、ずっとこのままだよ

私の体重に一時半耐える罰ゲーム」

お前の体重って……………

大して重くもないのに罰ゲームになるのか？

「もし耐えられなかったら……………」

「絶えられなかったら？」

「セイカ君がうちに引越すとか」

「……………ははっ、それも面白いかもな」

そう、今日という日が終わるまで



H a p p y   B i r t h d a y   こな  
た

第三十六話、  
終わり

### 第三十六話「小さな想い」（後書き）

さて、次回のキミセ力は！？

つかさです

お姉ちゃんってすごいよね

勉強も運動もできて……………

お姉ちゃんに比べたら……………私なんか……………

次回

E p i s o d e   つかさ1

「ほんの少しの悪意」

わたし……………なんて……………

## Episode つかさ 1「小さな悪意」

Episode つかさ 1

「うげっ、次は体育か」

「食後の体育ってきついよね」

みんなで食堂で昼食を済ませ教室に戻る途中

次の時間が体育のことを思い出した

「ABCDの4クラス合同だっけ」

かがみがい出したように言う

前回の体育が雨でつぶれたため急遽4クラス合同授業になったのだ

「みんなは種目何にする？」

と、つかさが聞いてきた

合同の場合は種目が自由に選択できるから面白いんだよな

ただ……

「サッカー、バスケ、バレー、ハンドボールか……」

「バレー以外は体力が要りますね」

コート全体を走り回るような種目は無理だ……俺スタミナ  
ないし……

「まあ、俺は無難にバレーで」

「あ、じゃあ私も」

疲れる競技嫌いなんだよね」

「私も体力ないから」

「右に同じくです」

俺、こなた、つかさ、みゆきはバレーだな

「で、かがみはどうするんだ？」

「え！？え」と……バレーで」

「仲間はずれにされたくないかがみ萌え」

「ち、違うわよ!!」

走り回るのがいやだから……その……その……」

別にそんな理由つけなくてもみんなでやりたいって言えばいいのにな……」

はっ!!これがツンデレかつ!!

「と、とにかく!!」

クラスが違う以上は敵だからね!!」

と、かがみは捨て台詞を残して去っていった

「あゝ、クラス違うとチームも違うんだっけか」

「お姉ちゃんと一緒にやりたかったのにな」

「いつそのことがみんなを倒すつもりでやるんだ!!つかさ!!」

「む、むりだよお」

かがみと勝負か……おもしろい

あいつ運動神経いいからな

腕もすっかり治ったし、楽しめそうだ

「よしっ!!カカツと着替えようぜ!!」

カカカカツ

「で、この面子か……」

全員バレー……なのはいいんだが

ほとんどのバレー選択者が女子（あ、白石がいる、あとは知らないな）

そしてチームは……

「やほ」

「よろしくね」

「よろしくおねがいます」

俺、こなた、つかさ、みゆき、あと……名前知らない男子  
対する向こうのチームは

「がんばろーぜ、ひいらぎ」

「あー、うざい、くつつくな」

かがみチーム

「お、相手はちびっ子にあほ毛もどきじゃん」

「あ？あほ毛もどき？」

「頭のとっぺんのそれってあほ毛もどきだろ？」

ちがう！！これはただの癖毛だ！！

「っていうか、お前誰だっけ……」

「がーん！！柊ー！！あほ毛もどきがいじめるー！！」

「あ、峰岸もか」

「こんにちわ、平野君」

「あやのは覚えてるのにー！？」

えーと……あ、思い出した、日下部だ

「かがみんも大変そうだね」

「まったくよ……セイカ君、こっち来ない？」

「残念ながらお前とやりあうのも結構楽しみなんだよ」

「へえ……上等！！」

俺とかがみの間に火花が散る

と、かがみが思い出したようにつかさのほうを見た

「つかさー！！妹でも手加減しないからねー！！」

「う、うん！！がんばるよー！！」

お、つかさもやる気だな

「って、みゆき

メガネつけたままで大丈夫か？」

「とってしまうと何も見えないので……」

まあ、割れないように気をつけるよ

さて、そろそろ始まるかな

「どうも、白石です

ゲームスタート!!」

って、審判はお前か!!

って、そんなほう見てる場合じゃない

「たあつ!!」

かがみがジャンプから強烈なサーブがくる

「んのっ!!」

ボールの元に走りよって受ける

「みゆき!!」

「はい!!」

俺が打ち上げたボールをみゆきが打ちやすいようにトスする  
「いっくよ!!」

竜巻旋風関波ラブラブ………」

「いいからとつとと打て!!」

「えー!! まあいいや

シュート!!」

みゆきがトスしたボールにこなたが走りよって強打を入れる  
このすばやさ……盗賊にでもしたくなるな

「えーと、えーと………」

つかさがおろおろしている

「つかさ!! ボールをよく見れば返せるぞ!!」

「う、うん!!」

つかさが相手コートのボールを見つめている  
ちょうどそのときかがみが強打を入れてきた

「たりやあああ!!」

まっすぐつかさへ飛んでいく

「つかさ!! ボールをよく見ろ!!」

「う、うん!!」

そして………

どすっ!!

と音を立てて顔面に直撃した

ポーンポーンポーン

「・・・・・・・・・・・・・・・・つかさ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・つかさん?」

「・・・・・・・・ホントにボールよく見てるだけのやつがあるか!!」  
「だ、だって・・・・・・・・・・」

その後もつかさのドジは続き

「へぶっ!!」

「あぺっ!!」

「ば、ばるさみ・・・・・・・・す」

「こ、これで8回目だよ」

「だ、大丈夫ですかつかさん」

「う、うんひゃいひょうふ」

「それつが回ってないぞ」

にしても、俺たちが返したトスにまで顔面直撃するとは・・・・・・・・  
怒りを通り越して感動を覚えるな

「つかさ!!大丈夫!?!」

さすがに心配になってきたのかかがみが声を上げた  
「ひゃいひょうふやよー!!」  
だからそれがつ回ってないって

体育が終わって教室

結局かがみのチームには惨敗した

「ま、どうせ体育の授業だし

気にすんなよ?つかさ」

「うん………」

いつものような元気のある返事じゃなくその声には張りがなかった  
さすがのつかさも失敗続きでつかれたのかもしれない

「あー、柊おもしろかたぜ!!」

「ほんと!!芸人でもなかなかできないぜあんなの!!」

と、そこへバレーを選択した数少ない男子がやってきた

「おい、お前ら」

俺は止めに入ろうとするが

「柊さん、やばいよね」

「ほんと、あれがわざとじゃなくて天然だから逆にウケるよ」

別方向からは女子の声

「……っ!!」

なんなんだ、これ

「………」

「っ、つかさ………」

さすがのこなたも茶化す雰囲気ではない

いや、こいつは本気で人が落ち込むことは言わない

けど………クラスのやつらは

「C組のお姉さんはすごいのにね」



「双子でも似てないことあるんだね」

「……このっ!!」

なんなんだよ、この仕打ちは

これじゃあ、まるで……

いいんだよ、セイカ君

みんな私がドジだからだめなんだよ

「けどっ!!」

まるで……

「おい、何の話してんだ？」

「いやー、実は体育で柊がさ」

まるで……っ!!

「まじで!!?ウケるっ!!」

「ホントにねっ!!」

イジメじゃないか!!

E p i s o d e    つかさ    1    終わり

Episode つかさ 1「小さな悪意」(後書き)

次回予告

なんで……なんでこうなるんだ  
たかが授業の失敗じゃないか………なのに  
なのになんでここまでっ!!

次回「拡大する悪意」

俺は………くそっ!!

## Episode つかさ 2「拡大する悪意」

Episode つかさ 2

「おっす」

「おはよ〜」

「おはようセイカ君、こなちゃん」

「おっす、ふたりとも」

「おはようございます」

今日もいつもの駅前で待ち合わせて学校へ行く  
昨日はいろいろとあったが……つかさはいつもどおりに笑  
っていた

「到着〜」

昇降口に着くなりこなたはさっさと自分の靴箱へ走っていった

「落ち着きのないやつめ……………」

俺たちも自分の靴箱へ向かう

「……………!!」

「ん？どうしたつかさ」

「う、ううん！！なんでもないの!!」

「そうか？」

なんか今変な反応してたような気がするけど……………まあ、い  
いか

本人がなんでもないって言ってるし

「ほら、さつさといくわよー」

「ごめんみんな、私ちよつとお手洗いに……………」

「はい、いつてらっしゃい、つかささん」

つかさはパタパタとトイレのある方向へ走っていった

「つかさ遅いわね」

教室でかがみがぼやいた

「確かに遅いですね」

「きつと大きいほう……………」

と、こなたが大声で言いそうになったのであわててこなたの後頭部をはたいた

「ただいま」

「お、やっと戻ってきたわね」

振り返るとつかさがようやく教室に戻ってきたのだが……………

「つかさ、目赤いぞ」

つかさの目は少し赤かった

かゆくてこすったのか、それとも……………泣いていたか

まあ、それはない……………よな

「う、うん」

目にごみが入っちゃって」

どうやら前者だったようだ

「つかささん、目薬ありますよ？」

「う、うん」

ありがとう、ゆきちゃん」

ほんとに……………ごみなんだろうか

軽く涙の後が見える、目薬だろうか

そして放課後

「セイカ君、帰ろうよ」

いつもどおりこなたが誘ってきた

「わりい、黒井先生に呼び出し食らってるんだ」

簡単に言つと居眠りをしたので大目玉を食らう予定なのである

ああ・・・・・・憂鬱だ

「それじゃあ先に帰るわね」

「ばいばい、セイカ君」

「それでは、また明日」

そういつてみんなは帰っていった

あー、さつさと叱られに行くか

「・・・・・・ん？何だこの紙」

俺の足元には一枚の紙・・・・・・というよりも手紙のようなものが落ちていた

「ひいらぎ・・・・・・つかさ？つかさ宛か」

さすがに覗くのはまずいか？

けど、人間好奇心のほうに勝ってしまうのである！！

だけど、俺は瞬時に後悔した

「・・・・・・！！これ・・・・・・」

その手紙に書いてあるのは、罵声の数々

『ドジ！！正直迷惑なんですけど（笑）』

『なんでそんなに役に立たないの？』

『お姉さんと違いすぎ』

『あんたほど役に立たないやつ始めて見たよ』

『正直うちのクラスにいないし』

俺はその手紙を破り捨てた

「・・・・・・・・ふざけやがって！！」

こんなことして何が楽しいんだ！！

つかさもつかさだ！！なんで俺たちに相談しないんだ！！  
なんで俺を頼らないんだよ・・・・・・・・

「くそつ！！」

俺は黒井先生に呼び出されていることを忘れて走り出した  
目的地は昇降口だ

「どこにいつちゃったんだろ・・・・・・・・」

目的の人物はすぐに見つかった

「つかさ！！」

「せ、セイカ君？どうしたの？」

その姿からは、明らかに動揺が見えた

「なんなんだよ、あの手紙」

「み、みちゃったの？」

「ああ、びりびりに破り捨てさせてもらっただけだな」  
つかさに迫る

「何で相談してくれなかったんだよ」

「だ、だつて．．．．．迷惑かけちゃうし．．．．．  
もともと私のせいだし」

「迷惑なんかじゃない、お前のせいでもない」  
俺はつかさを見つめた

「だから、なんかあつたらすぐに俺に相談しろ

絶対に俺が解決してみせる．．．．．約束だ」

「セイカ．．．．．君っ!!」

つかさの目から涙がこぼれる

その涙が余計に俺の怒りをかきたてた

さっきの手紙からわかることは二つ

ひとつは文字の書き方から見て少なくとも二人以上はいること

もうひとつは文字の形なんかから見て女子の可能性が高い

(絶対にゆるさねえ．．．．．)

こなたやかがみにも相談する必要があるかもしれない

そして、

つかさが．．．．．親友が泣くようなセカイは．．．．．  
俺がぶち壊してやる!!





Episode つかさ 2 「拡大する悪意」 (後書き)

「次回予告」

何でこんなことになっちゃうの？  
なんで・・・・・・・・なんで・・・・・・・・  
もう・・・・・・・・いやだよお・・・・・・・・

次回「怒りの瞳」

## Episode つかさ 3「怒りの瞳」

Episode つかさ 3

気が重い、体も重い

昨日あんな手紙を見てしまったら．．．．．そりやな  
つかさ．．．．．大丈夫だろうか

とりあえず俺は学校に向かうべく制服に着替え始めた  
学校に行く途中では誰にも会わなかった

けど、昇降口で出会うのはもはや必然ともいえる

「おはよう」

「おっす」

昇降口にはこなた、つかさ、みゆきがいた

つかさは．．．．．

「おはよう、セイカ君」

そこまで元気ではない．．．．．か

「あれ？かがみはどうしたんだ？」

「桜庭先生に用事があるそうです」

そうか、できればかがみにはつかさのそばにいてほしいんだがな．．．  
．．．．．

まあ、B組メンバーなのでさっさと教室へ向かう

今日はつかさに不振な手紙はないようだ  
そう、手紙はなかったんだ・・・・・・・・・・

「あれ？なんだろ、あの人ごみ」

最初に気がついたのはこなただった

そう、俺たちの教室の前にはほかのクラスから集まってきたのであ  
るう人ごみができている

なぜだろう・・・・・・・・胸騒ぎがする

「ちよつと通してくれ！！」

その人ごみを掻き分けて俺は教室に入った

俺の後に入ったつかさは・・・・・・・・手に持っていた通学かばんを  
落とした

こなたとみゆきも言葉を出せずにいる

俺も啞然とするしかなかった

ここまでするのか・・・・・・・・ここまで！！

普段先生が学問のために使っている黒板には

大量の醜く、汚い言葉がつづられていた

ただつかさという一人の少女を罵倒するためだけに

「ひどい・・・・・・・・」

「なんなんですか・・・・・・・・これは」

俺は黒板に向かう

「こなた、みゆき、消すの手伝ってくれ」

「うん」

「はい」

俺たちが消し始めると、今まで見ていただけだったクラスメートも手伝ってくれた

ああ、クラスメートにはつかさの味方もいるんだな  
敵ばかりでないことに安心した

そして、クラスからささやきが聞こえる

「だれだよ．．．．．あれ書いたの」

「わかんねえよ．．．．．けどあれはやりすぎじゃね？」

「けどいいんじゃない？おもしれえし」

おもしろい？

何が面白いって言うんだ

こんなの、不快以外の何者でもない

「だよな」

「正直いい気味ってかんじ!!」

この声は．．．．．女子の声

俺は振り向いた

いや、まだ犯人だと決め付けるには尚早すぎる

だけど．．．．．

「つかさ．．．．．」

つかさは教室の後ろで小さくなってしまっている

本当なら、このクラスにいるやつ全員を吊るして犯人をさらしてや

りたいところだが．．．．．

さすがにそれは俺の常識というものが押しとどめた  
だけだ

ダンッ!!

「せ、セイカ君？」

こなたが驚きの声を上げる

それは俺が黒板を叩いたからだ

「．．．．．っ」

耐えろ……。耐えろつ!!  
今ここでキレたら、余計につかさを不安がらせる  
だから……。耐えるんだ

「なに!? 何の騒ぎよ!!」

人ごみの向こうから声が聞こえる

この声は……。かがみだ

「セイカ君、なによこれ」

「……。それについて後で相談がある」

もうこれは冗談で済まされない

そう、冗談で済ましてたまるか

「犯人をさがすべきだわ!!」

昼休みの屋上

つかさのことについて相談した結果かがみがそう叫んだ

「俺だつて探すつもりだ、こんなの許せない」

「私も協力するよ」

「私もです」

そうさ、つかさには俺たちがついてる

誰だかわからないようなやつにつかさの笑顔をなくされてたまるか

!!

「みんな……。ありがとう」

またつかさが泣きじゃくり始めた

それがかがみがそつと抱きかかえる

「やはり……黒井先生にも相談すべきだと思います」  
みゆきが言った

「そうだね、先生なら何とかしてくれるかも」

「そうだな、表面上はなくなるだろうな」

「……どういう意味よ」

かがみがつかさを離して言った

「つまりはそれは力で押さえ込むってことだろ

根本的な解決にはならない」

そう、先生の注意で抑えられたとしても陰口なんかはのこる  
心を変えないといけないんだ

それが一番難しいんだが

「じゃあ……じゃあどうしろっていうのよ!!」

「かがみさん、落ち着いてください」

「どうせ相手は面白半分でやってるだけよ!!」

そんなの絶対に許さない!!」

「かがみさんっ!!」

みゆきの言葉がかがみを我に帰させた

「……ごめん」

「謝ることじゃないさ」

「……あゝ、ちよつといいですか？」

と、屋上に一人の来訪者が現れた  
そいつは

「せ、セバスチャン!!」

「白石です!!」

そう、セバスチャンこと白石みのるだった

「どしたのセバスチャン？」

「いま大事な話してるんだけど？」

こなたとかがみのあからさまな『あんた話に入ってくるな』という  
目線が白石に突き刺さる

「…………つかささんのことで情報を持ってきたんだが」  
「何だって!!」

意外と役に立つじゃないか黒石!!

「実は昨日の朝に俺は日直で早く学校に来ただけど」  
白石が話し始める

「なんか下駄箱の前でこそそやってる女子がいたんだよ  
たしかあいつはB組の女子で……………ってやつだったと思う」  
なんてこった

うちのクラスのやつが犯人だったとは

「よし!!いまからとつちめに行つてやるわ!!」

かがみが指を鳴らしながら立ち上がった

「おいおい!!落ち着け!!」

あわててとめに入る

「どきなさいよ!!」

「さすがに暴力はまずいだろ!!」

停学になるぞ!!」

「……………」

そう、誰かを停学や退学なんかにするわけにはいかない  
だから

「俺が話をしてみる」



E p i s o d e  
つかさ  
3  
おわり

E p i s o d e   つかさ   3「怒りの腫」(後書き)

次回予告

は、はははは  
もう無理、限界

次回

E p i s o d e   つかさ   4「我慢の限界」

## Episode つかさ 4「我慢の限界」

Episode つかさ 4

「俺が話をしてみる」

昨日の昼食のときに言ったとおり俺は放課後、白石から聞いた女子3人を呼び出した

パツと見は普通そうなやつらだが……

「で、何のようですか？」

一人がたずねてきた

こういうのはじらしても意味がない

「単刀直入に言うぜ、今日の黒板の騒動はお前らの仕業か？」

少し間を空けたと思うと一人が話し始めた

「は？いきなり何言ってるんですか？」

「お前らが怪しい動きをしてたって聞いたんでな」

これで折れるわけではない

もう一人が反論してきた

「それじゃああたしらがやったって証拠にならないじゃん」

「だから聞いてるんだよ、お前らは犯人かって」

「ちげーよ」

そう言われたらおしまいだが

「そうか、お前らじゃないんだな？」

「だからそう言ってるじゃん」

「悪口の手紙なんて書いてないし！！」

「……へえ」

「……. . . . . かった

「いつ俺が、悪口の手紙なんて言った？」

「へ？」

「俺は朝の黒板のことについてしか話してないんだけど？」

そう、つかさが隠していた手紙のことを知っているはずはない犯人以外は

「た、たまたま見たのよ!!」

「いつ？」

「き、今日の昼休みよ」

「そーそー、落ちてたのをたまたま見つけて……むしろ隠してやったのよ!!」

ほう、今日の昼休みね……

「おつかしいな、その手紙は昨日俺が破り捨ててるからもうこのセカイに存在しないはずなんだけどな？」

これ以上反論してこない  
と、言うことは認めたということでもいいのだろう  
意外とあっけなかった

「先生たちには黙ってやる、二度とつかさにあんなことをするな」  
できるだけにらみを利かせて言う

三人は一瞬ビクツとしたがそのあと嫌な笑みを浮かべた

「誰がやめるもんですか」

「……あ？」

「あんなドジ、この学校にいる価値ないし!!」

「そうよ!! 頭悪いし、ドジだし、ぜんぜん役に立たない!!」

「存在価値なんてないのよ!!」

存在価値がないだと？

「あんだだっと思ってるんじゃないの？  
あんなやつ要らないって!!」

その瞬間

俺の中の何かが切れた

「は、ははははは!!」

「な、なに？」

「い、いきなり笑い出したわよ……」

「もう無理!!限界!!」

もう、だめだ

こいつらには、まともな理屈が通用しないらしい

だったら

力でねじ伏せる

ガンッ!!

俺の目の前の机が吹き飛びほかの机を巻き込みながら反対側の壁に  
激突する

それを見た三人は黙った

「必要ない？存在価値がない？

ふざけんな！！」

一歩ずつ迫る

「あいつはな、料理だつてうまいし、つらいときは励ましてくれるし  
すごく温かいやつなんだよ！！」

俺が迫るにつれて三人はあとずさつていく

「お前らなんかと違って、人の心を知ってるやつなんだ！！  
それを存在価値がないだと・・・・・・？」

「こ、こないでよっ！！」

一人が近くの机から落ちたのであろう辞書を俺に投げつける  
だが俺はあえてよけずにそれを食らった

「そうだな・・・お前らにもつかさと同じ痛みを味あわせてやろう  
か」

「ひっ！！」

「そうだな・・・・・・ためしにその服をひん剥いて両手両足を縛  
り上げて外にさらしてやろうか？

いい感じにギャラリーが集まっていい見世物になるだろうな」

三人を全力でにらみつける

辞書があたった部分からは痛みなんて感じなかった

「あ、あんたおかしいわよ！！狂ってる！！」

「・・・・・・つかさだつてお前らのせいで見世物になってたんだ  
よ！！！！」

朝、まさにつかさは見世物だった

うちのクラスどころかほかのクラスのやつらにも

笑われ、馬鹿にされ、まさに見世物だ

「・・・・・・心の痛みがいやなら体の痛みのほうがいいか？

そこに転がってる机だったものみたいにしてほしいか？」

「い、いやあっ！！」

とうとう逃げることもできずに座り込んだ

「もう二度と……つかさに近寄るなぁっ!!」

三人は脱兎のごとく逃げていった

「あー、どうすっかな……これ」  
俺はぐちゃぐちゃになってしまった机を見て肩を落とした

『そう、なんとかなっただ』

夜、かがみに電話をかけた  
もちろん今日の報告である

『ああ、事情が事情だから机の件は許してもらえたけどな

黒井先生にこっぴどく怒られた』

机の弁償に関してはいじめの事実自体を把握できなかった自分にも  
責任があると黒井先生が負担してくれた

『けど、あんたも思い切った事したわね、まあそれくらいしない  
と私も腹の虫が納まらないけど』

『お前の場合は手が出るだろ？』

つていうか、今回俺が手を出さなかったことが奇跡なのだ

……まあ、机がご臨終してしまったが

『まあ、よく我慢したわね

私だったら一発で殴り飛ばしてるわ』

『ああ、なんかな……』

相手を殴ればつかさが悲しむ

そう思っただ

あいつは優しいから……

『ま、これで安心ね

ありがと、セイカ君』

『礼を言われることじゃないさ、当たり前のことをしたんだ』

『そっか、じゃあまた明日』

『ああ、またな』

ケータイを切って充電器を差し込む

まあ、人に力で押さえ込むなって言っというて自分は力で押さえ込んで  
しまったが……

（大丈夫だろ、たぶん）



明日、心のそこから笑ってるつかさが見られますように・・・

E p i s o d e    つかさ    4    おわり

Episode つかさ 4「我慢の限界」(後書き)

次回予告

「つかさ、いけるよ!!」

「つかさん!!がんばって!!」

「こい!!つかさ!!」

「がんばれっ!!つかさっ!!」

いまなら………きっとできる!!

次回

Episode つかさ Last「空は飛べないけれど」

お楽しみに

Episode つかさ Last「空は飛べないけれど」

Episode つかさ Last

「おはようかがみ、それにつかさ」

「おはよ」

「おはよう、セイカ君」

登校途中で柊姉妹に会った

いつものように一緒に学校へ向かう

「セイカ君、ありがとう」

俺の隣を歩くつかさが言った

「私、ドジなのにいつも助けてくれて

私セイカ君がいるから・・・がんばれるよ」

「・・・なんのことだか」

俺は気恥ずかしくなつて少し早歩きになった

「・・・俺もお前に助けられてるよ」

そう小さく言い残して

「・・・」

「つかさ」

「う、うん」

もうあんなことはないはずだ  
わかっていてもためらってしまう

「………えいつ!!」

つかさは勢いよく扉を開けた

クラス中の注目が集まる

「おはよー!!つかさ!!」

「つかささん、おはようございます」

「お、おはようこなちゃん、ゆきちゃん」

最初に声をかけてきたのはこなたとみゆきだった  
当然といえば当然だ

そして何人かの男子も寄ってくる

「えと………柊、悪かったな」

「面白半分でからかったりして………ごめん!!」

その後何人も集まってきてつかさに謝りはじめた

「い、いいの!!」

私をもっとしっかりしてれば………」

こっん

俺はつかさの頭を小突いた

「馬鹿、困ったら俺たちを頼ればいいんだ

結局、人間一人じゃ何もできないんだ」

そう、俺はみんなと出会うまでは一人で生きていけると思い込んでた  
けど違うんだ

人は支えあつて、認め合つて、初めて人になれるんだ

「うん………もっといっぱい迷惑かけるかもしれないけど」

「どんどんかける

あ、けど宿題は自分でやれよ?」

「はう!?!」

あはははは、とクラスから笑いが起きた  
そう、馬鹿にしたような笑いじゃない

屈託のない笑い声

ああ、これが本当のこのクラスの姿だ  
あれ？いつの間にか俺はこなたたちだけじゃなくてほかの人間にも  
心を許しはじめているのかも知れない

「うーすー！みんな席つけー！」

黒井先生の登場により俺たちは各々の席についた

「一限目は体育やさかいな、さっさと着替えろや」

はてさて、またもや競技はバレーボール

チームも前回と一緒だ

そして相手もかがみチーム

「つかさ、無理はしないで自分にできることをやればいいんだ」

「ううん、私……お姉ちゃんに勝つよ」

「え？」

普段からは考えられない気迫に満ちた声

そこからつかさは本気だとわかった

「だって、みんなが助けてくれるって約束してくれたんだもん  
だから勝てると思うの」

「つかさ……」

「つかささん……」

「よーし！！よく言っただつかさ！！」

こなたが気合を入れなおす

「打倒！！かがみん！！」

「おう！！」

「はい！！」

「うん！！」

俺はかがみのほうを向いた

「そついうわけだ！！手加減なんてするなよ！！」

「上等！！勝負よ！！つかさ！！」

「うん!!」

試合が始まった

かがみの強烈なサーブが俺のほうに飛んでくる

「なんのっ!!」

レシーブで誰かが取りやすいところに打ち上げる

そこから近いのは……

「こなたっ!!」

「おk!!まかせたまへ!!」

とはいってもアタックが打ちやすいようにトスするだけだが

「高良みゆき、いきます!!」

後ろのみゆきが走りこんでくる

「たあっ!!」

華麗なフォームでアタックを繰り出すが向こうも簡単にはいかない

「ヴぁ!!」

日下部がボールの近くまで走りこんでレシーブする

「柊ちゃんっ!!」

それを峰岸がトスしてかがみにまわす

「いくわよっ!!」

かがみが走りこんできて強烈なアタックを繰り出す

それはみゆきのほうへ飛んでいった

「くっ!!」

みゆきも何とかレシーブする

それをこなたがトスした

今、ボールに届くのは……

「つかさ!!いけるよ!!」

「つかささん!!がんばって!!」

つかさが走りこむ

まったく失敗を恐れていない目で

「こい！！つかさ！！」

かがみがしつかりと構える

「がんばれっ！！つかさ！！」

みんなみたいに、空は飛べないけれど

すこし、羽ばたくくらいなら………

どんっ！！

つかさの放ったアタックは相手のコートに入り

俺たちの得点版に一点が追加された



「おつかれさん」

「うう、もうへろへろ」

「腕がジンジンしますね」

結果はぎりぎり勝つことができた

まあ、あの後つかさはアタックをしようとすると必ずネットに激突していたんだが……

さすがつかさ、おそるべし

「つかさ、やったな

かがみに勝ったんだ」

「だ、けどほとんどみんなが入れてたし」

「それでもお前の一点がなかったら負けてたかもしれない」

「私の一点じゃないよ、みんなの一点だよ」

まったくこいつは……謙虚なんだか遠慮深いのか……  
「かがみん、悔しがってたねえ」

「そうですね」

かがみはホントに悔しがってた  
後一点だったのに！！ってな

「セイカ君」

「ん？なんだ？」

つかさが俺の隣に来る

「ずっと、一緒にいられるといいね」

「ああ……そうだな」

無理な願いだとはわかってる

だけどそう望まずにはられない

「つかさ、それ何気に告ってるよ？」

「ちちち違うよこなちゃん！！」

ほんとうに、ずっと一緒にいられたらいいのに………

……くっ！！

『# & a m p ; \$ %をいじめるなあ！！』

『ずっと一緒だよね！！お兄ちゃん！！』

『ああ、俺たちはずっと一緒だよ、# \$ & a m p ; #』

なんだ？

俺は誰の名前を読んでる？

お兄ちゃん？

いや、そんなはずはない

俺には・・・・・・・・兄弟なんて・・・・・・・・

「セイカ君？どしたの？」

「うおっ！！」

「きゃっ！！」

び、びつくりした

いきなりつかさの顔が目の前にあったから・・・・・・・・

「どうしたの？体調悪いの？」

つかさが心配してくれる

どうやら今の俺は体調がよくないように見えるようだ

「い、いや・・・・・・・・」

「けど顔色悪いよ？汗もすっごいかいてるし」

「少し保健室で休まれたらどうですか？」

たしかに、すこし頭が痛い

「・・・・・・・・ああ、少し休んでくる」

俺はその場でみんなと別れて保健室で眠った

夢の中でも、誰かが俺のことを呼んでいた気がする

『お兄ちゃん』と

E  
p  
i  
s  
o  
d  
e  
  
つ  
か  
さ  
  
L  
a  
s  
t  
  
お  
わ  
り

Episode つかさ Last「空は飛べないけれど」(後書き)

さーて！！次回のキミセカは？

みゆきです

泉さんがお祭りに誘ってくださいました

なんでも近くでまだ桜の咲いているところがあるとか

そこで開かれる夜桜のお花見に行くそうです

ちなみに、5月の中ごろに咲き始める桜のことを

(以下みwi

ki

次回

「春のお祭りに行こう！！」

お楽しみに！！

## 第四十二話「お祭りに行こう」

「今度お祭りがあるんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうか」

かちやかちや

「だからさ、みんなを誘っていつてみない？」

「・・・・・・・・・・いつだ？」

かちやかちや

「今度の土曜日」

「いいな・・・・・・・・・・って、あー!!」

「よっし!!五連勝!!」

ちなみに今は俺の家にてこなたと格ゲーの真っ最中である

「つーか、今のハメだろ!?俺のシマじゃノーカンだから」

「はいはい、言い訳しない」

「うっつ・・・・・・・・・・」

ってことで、祭りにいくことになった

「こほっ、こほっ」

「アンタ何やってんのよ」

こなたは桜の花びらが大量に落ちているところに寝そべって花びらを口から吐いていた

言っておくが音楽記号がタイトルのあれとは無関係といっておこう

「いや、いっぺんやってみたいじゃん？」

「やってみたいじゃん？じゃねえよ」

さっさと行くぞ」

「はいはい」

俺たちは並んで歩き出す

ライトアップされた桜の木の下にいくつもの出店が出てにぎわっていた

「薄着だと少し寒いわね」

「そうだね、私もうすぐ夏だからと思って薄着にしちゃった」

つかさが軽く身震いする

「夜はまだ冷えますからね」

「俺も結構薄着だけどあんま寒くないな」

ちなみに俺の今の服装は下がジーンズ、上がタンクトップの上にカッターシャツである

「もうちよつと厚着すればよかったよ」

「じゃあ、なんか暖かいものでも買って食べるか」

確かいくつかテーブルやイスが並べてあるスペースがあったはずだ  
うどんとか汁物はそこで食べれる

「んじゃあ、いくつか出店を回ってみよつか！」

と、こなたが先陣を切って歩き出す

「おい！！あんま先に行くなよ！！」

はぐれるだろ！！」

それにもかまわずこなたはどんどん先へ行こうとする

「ったく、しょうがないな」

俺は軽くスピードを出してこなたに追いつくとその手を握った  
「うえ！？」



「驚きすぎだ

人も多いんだから手つないでくぞ」

「う、うん………」

その後ろからかがみたちが追いついた

「あんたたち速すぎよ！」

もうちよつとペース落としなさいよね!!」

「お、ちよつどいいや

かがみもな」

俺はかがみの手を握った

「え!?! いきなりどうしたのよ!!」

「はぐれないようにな

つかさとみゆきもかがみと手つないどけよ!!」

こうして俺たちは手をつないだまま人ごみを歩いていった

途中でめばしい物と休憩スペースを見つけたのでそこに落ち着いた  
そのときに気づいたんだがこなたとかがみの顔が赤かったように見える

人ごみで体温が上がったんだろうか?

お、あそこにあるのはそば屋か

ちよつどいい、買ってこよう

「それじゃあ、俺がちよつと買いにいつてくるな」

「わ、私も行くよ」

つかさもついて来るようなのでその手を握った

「しっかり握ってるよ、はぐれたらどうしようもないからな」

「う、うん」

つていうか、この人ごみで汁物を運べるだろうか?

いささか不安になってきた……

まあ、そんな心配は杞憂で

結構周りの人は道をあけてくれたし店の人も運ぶのを手伝ってくれた  
気がかりだったのは店の人に「兄妹かい？仲いいね」といわれてつ  
かさが落ち込んでいたことだ  
なぜだろうか

「ただいま……っで、みゆきはどこに行っただ？」  
見たところどこにもみゆきの姿がなかった

「お手洗い」  
トイレか

確かこの辺に仮設トイレがあつたな  
そこだろうか

「あ、帰ってきた」

「ただいま戻りました」

「おそば買ってきてあるよ」

みゆきの席にそばのどんぶりと割り箸を置く

「すみません、いただきますね」

ずるずるずる

「」「」「」「」  
ぷっは」「」「」

( 、 ) ウマー

「にしてもこの風景は……」

俺たちが占領している席には大量の食べ物がある  
さっきのそばを筆頭に

わたがし、りんご飴、からあげ、チョコバナナetc……  
「花より団子とはこのことだな」

「うるさいわね」

ちなみにさっきから食いまくってるのはかがみである

「晩御飯代わりなんだからしょうがないでしょ」

かがみの話によると晩飯がない代わりに祭りの資金をもらったらしい  
けどそんなに食べたらまた太るぞ……

「おい!!」

そこへいつの間にやらどこかへ行っていたこなたが戻ってきた  
お盆の上にはいくつかのカップがのっている

「これは……甘酒ですか？」

「なんで甘酒があるのかなあ？」

「いいじゃん、飲もうよ」

こなたが全員にカップを渡す

ふむ、俺も一口……

「んぐっ」

「おお、いい飲みっぷりだね!!  
もういっぱいとお？」

「おう」

カップに注がれた二杯目の甘酒を飲み干す

．．．．．あれ？なんか頭が．．．．．

こなた view

「ねえ、こなた」

「どしたのかがみん」

「セイカ君の様子おかしくない？」

ん？そういえば顔が赤いような．．．

「．．．．．ひつく」

ま、まさか．．．．．

「こゝなゝたあゝ」

「せ、セイカ君？もしかして酔った？」

「酔ってにやんかにやい！！」

か、完全に酔ってるー！！

「漫画みたいなことあるんだね」

「まったくといっていいほどアルコールは入っていないはずなので  
すけど」

「パッチテストだと真っ赤になるタイプね」  
うゝん、どうしよう

まさかここまでお酒に弱いとは．．．．．っていうか、弱いっていうレベルじゃねーぞ！！

「こ．．．．．なた．．．．．」

「な、なに．．．．．！？」

セイカ君の顔が目の前に．．．．．っていうか、なんか唇に柔らかいものがっ！！

き、キスされてる！？

「ちょ、ちよつとセイカ君！！いきなりなに．．．．．」

「かゝがみゝ」

「え．．．．．ちょ．．．．．だめ．．．．．ん」

か、かがみにまで．．．．．

つかさとみゆきさんは顔真っ赤にして固まってるし  
っていうか、私も動けないんだけど．．．．．

「つかさ．．．．．」

「せ、セイカ君だめだよ．．．．．」

っ、つかさまでもが毒牙に．．．．．

まずい、最後の砦のみゆきさんにかけるしか．．．．．

けど、あのとろけた表情のセイカ君の顔が目の前にあつたら．．．．．

・

「セイカさん、だめです．．．．．んん」

あ、あつさりとやられてしまった

きつとみんなファーストキスなんだろうな．．．．．

私もだけど

「むにゃ．．．．．」

あ、セイカ君が倒れた  
しかも寝てる

「ど、どうしよつか？」

かがみがようやく立ち上がった  
私もそろそろ．．．．．

「zzzz．．．．．」

あーあ、幸せそうな顔で寝てるよ・・・  
「い、家に運んであげようよ、ねえ？ゆきちゃん」  
「そそそ、そうですね！！」  
・・・・・・・・きょう、眠れるかなあ

## セイカview

「ん・・・・・・・・ここは？」

背中には温かい感触

これは・・・・・・・・俺の布団の感触だ

「いつのまに帰ってきたんだ？」

確かこなたたちと祭りに行って

昨日祭りの会場で甘酒飲んで・・・・・・・・それからどうしたんだっけ？

「・・・・・・・・さっぱり思い出せない」

つていうか、普段着のままじゃねえか

汗臭いし・・・・・・・・少しシャワー浴びるか

ふとケータイを見ると新着メールがあった

「・・・・・・・・四件？だれからだ？」

「泉こなた

件名：このスケベ主人公！！

内容：甘酒で酔うとか漫画かよ！！

しかも・・・・・・・・・・あー！！もう知らない！！」

・・・・・・・・・・何が言いたんだ？

『柊かがみ

件名：無題

内容：ま、まあ・・・・・・・・・・昨日のことはお互いに忘れましょ？

そのほうが精神衛生上いいと思うし・・・・・・・・・・

じゃ、じゃあまた学校で！！」

・・・・・・・・・・なんかあったっけ？

『柊つかさ

件名：気にしてないよ！！

内容：だいじょぶだよ！

私はぜんぜ気にしてないから！！」

何を気にしてないのかはわからんが落ち着いてメール打てよ

『高良みゆき

件名：無題

内容：大丈夫です、世の中には少量のアルコールでもわれを忘れてしまう人はいますから

ですからお気になさらずに！！……できれば忘れていただけるとうれしいです』

………ってことは俺は酔っぱらってたのか？

「……結局みんなは何が言いたいんだ？」

まあ、よくわからなかったので俺はそのまま風呂に向かった



## 第四十二話「お祭りに行く」(後書き)

### 次回予告

あからさまにおかしいみゆきの態度  
異常なほどに周りを気にしている  
まるで何かにおびえているように

### 次回

E p i s o d e    みゆき    1 「追跡者」

お楽しみに

## Episode みゆき 1「追跡者」

Episode みゆき 1

「おはようございます、みなさん」

「お、今日はみゆきが一番のりか」

いつもの集合場所にやってくるとそこにはすでにみゆきがいた

「一本早い電車に乗ってきたら一番でした」

だが、そうやってしゃべっているみゆきの目はこっちを見ていない  
ひたすらに周囲を見ていた

「どうした？なんか気になることでもあるのか？」

「い、いえ！！なんでもないです」

・・・・・・・・・・・・・・・・！！

ばっ！！と後ろを振り向く

「あ、あの・・・・・・・・どうかなさいましたか？」

「・・・・・・・・いや」

いま、かすかに視線を感じただけどな  
気のせいかな

その数分後にこなたたちはやってきた

「で、昨日のアニメがさあ〜」

「はいはい、わかったわかった」

いつもどおりの登校風景

だが、みゆきの様子があからさまにおかしい  
きよろきよろと周囲を見ている  
なんだというのか

「ちよつと！！セイカ君聞こえてる！？」

「んあ？」

「んあ？じゃないでしょ

みゆきのほうじつと見つめたりして……………」

「え！？」

どうやら俺はずつとみゆきを見つめていたようだ

「いや、ちよつとボーつとしてただけだ」

「あるよね〜、気がついたら変なほう向いてボーつとしてること」  
つかさはいつもボーつとしてるからな

俺はボーつとしてたわけじゃないけどな

「ほ〜い、今日の授業は終わりや！！

気をつけて帰るんやで〜」

その日の放課後

「お〜い、セイカ君帰ろうよ」

「……………すまん」

「また居眠りでもしたの？」

「いや、世界史の課題を忘れたから居残りだ」

「こなたとつかさでさえやってきたのに……」  
かがみがあきれる

「答えうつすだけだったし」

「私はおねえちゃんに手伝ってもらったよ」

「ネトゲがいけないんだ……期間限定クエストなんてやるから  
！！」

「それじゃあ私達は先に帰るわね」

「うつ……薄情者……」

「こなたみたいなこと言うな！！」

その発言に対してこなたがかがみになにやら文句を言っている  
だがそんなことはどうでもいい

課題のワークは家

答えも家

目の前にはわざわざ黒井先生がプリントしてきたワークの問題  
もちろん答えは無い

「今日中に終わる気がしない」

「あの、セイカさん

よければこれをどうぞ」

そう言ってみゆきが差し出したのは一冊のノート

「今日の課題のノートです」

「おおおおおお！！」

「やばい！！ありがたい！！」

「ほんとにサンキ」

助かったぜ」

「いえ、終わったら私の机に置いて置いてください」

「わかった、ありがとうな」

こうしちゃいられない

さっさとやるか！！

「んじゃ、がんばってね」

「おう、また明日」

こなたたちは帰っていった

「ほい、ご苦労さん

もう忘れるんじゃないで!!」

「はい、気をつけます」

職員室をでる

まだ荷物は教室に置きっぱなしなのでさっさと戻ることにした

「あ、そうだ

ノート机にいれとかないとな」

みゆきから借りたノートを机に入れる

「って、これ……」

そこにはもう一冊のノートがはいつてた

「これって明日の課題の分じゃん……」

みゆきはしっかりしてるんだかそうでないんだか……」

これが無いと明日はみゆきが居残りになるだろう

「よし、届けてやるか」

今日借りたノートも一緒にもっていこう

ついでだしな

そう思っただけは二冊のノートを持って学校を出た

「え」と、確かこの辺だよな」

以前ここに来た記憶を頼りにみゆきの家を探す

「お！！あそこだな！！」

以前見た風景と同じだ

ココで間違いない

けど……………」

「……………だれだあいつ？」

その家の前には黒い服の男が一人

この家に用事だろうか

そう思つて声をかけようとしたら

その男は双眼鏡を取り出して覗いたのだ

その先にはみゆきの部屋がある

「おい！！何やってんだアンタ！！」

俺の聲に驚いたのかその男は逃げ出した

しまった、声なんか出さずに問答無用で取り押さえればよかった

追いかけようとしたが夜の闇にまぎれて見えなくなってしまった

「せ、セイカさん！？」

俺の聲に驚いたのかまどからみゆきが顔を覗かせていた

「あの、少々お待ちください！！」

そう言つてみゆきは引つ込むと玄関から出てきた

「どうかなさつたんですか？」

「……………ああ、ちよつとお邪魔させてもらつていいか？」

「は、はい………」

これはちょっとやばいかもしれない

ノートを返しにきただけのつもりだったんだけどな

みゆきの周囲への警戒

そして怪しい男

これはもう………

ストーリー

E p i s o d e    みゆき    1    おわり

**E p i s o d e    みゆき    1 「追跡者」 (後書き)**

**次回予告**

日に日に悪化するストーカー行為  
もう子供ではどうしようもない  
そうだ、俺達の味方は子供だけじゃない!!

**次回**

E p i s o d e    みゆき    2 「本職」

おたのしみに



## Episode みゆき 2「本職」

Episode みゆき 2

「いつからなんだ？」

俺はみゆきの家にいる

もちろん、さっきの男についてだ

「・・・・・・3日ほど前からです

はじめは偶然かと思ったのですがさすがに毎日同じ時間だと・・・

・・・・」

なるほど、怪しいにもほどがある

「何で相談してくれなかったんだ？」

話にくいことだとは思うけど・・・・・・」

「・・・・・・すみません

ですがこれは下手をすれば警察沙汰になる可能性もあったので・・・

・・・・」

これはみゆきの気遣いだろう

警察沙汰に巻き込みたくない、騒ぎを大きくしたくない

「だけど、俺は知ったんだ

だから協力させてくれ」

「でも・・・・・・」

みゆきが何か言いたげに口を挟むが無視した

「それに、俺達には頼れる知り合いの

しかも本職の人がいるじゃないか！！」

「と、いうわけなんだ成美さん」

「むふう、なるほどね」

こなたの家

そこには俺、みゆき、こなた、成美さん、ゆかりさん、そうじろっさんがいた

そういえば、ゆかりさんとはいっぞやの料理対決以来だな

ついでに言うといまだにゆかりさんのセリフは無かったりする

「お手数をおかけして申し訳ありません

ですが他に相談できそうな方が……」

正確に言えば相談はいくらでも出来る

だが解決が出来ないのだ

俺とこなたとそうじろっさんの意見は多少ボコボコにしても捕まえる

だがそれだと過剰防衛とかになりかねない

日本の法律は難しいのだ

そこで、課はちがつても本職の成美さんに相談というわけだ

「ゆいねーさん、何とかならない？」

「うーん、私もそこまで詳しいわけじゃないから知り合いの子に相談してみただけど」

成美さんが言うには、こうだ

今のところその男はみゆきの家のほうを毎日決まった時間に見ているだけ

双眼鏡を使ったりもしていたがそれがみゆきを見るためだったのか

がはつきりしないから法的には拘束できないらしい  
「つまりは現行犯逮捕しかないわけだな!!」

と、そうじろうさんが拳を握り締めて立ち上がった

「なんてうらやま…….…….じゃなかった

けしからんやつめ!!」

「おとーさんは少し黙ってて」

ぴしゃりとこなたが言うとき少ししゅんぼりして座った

「まあ、実際それしかないんだよねー」

成美さんが頭をかきながら言った

「つまりは、みゆきに何か害があるまでは動けないんですね…….…….

…….

ゆかりさんが言った

普段はほわ〜んとしているがさすがに娘の危機となると口調が違う

「はつきり言っちゃうとそうなりますね」

成美さんが申し訳なさそうに言った

悪いのは成美さんじゃない、この国のシステムなんだ

「とりあえず、学校の行き帰り

とくに帰りが心配だな」

一人になったときが一番危険だ

みゆきの家は住宅街

登校時の駅前や通学路とは違って人通りも少ない

「そこは私が車で送ります」

ゆかりさんが言った

これで一応通学の安全は確保されたが…….…….

「ガードマンとかつけないのかな？」

マンガだとお屋敷には一人や二人いるじゃん？」

お屋敷で…….…….確かにみゆきの家はでかいがそれほどでもな

いだろう

「簡単に言っつなよ

そついった人を雇うのだって金もかかるし

それに一週間だけとかじゃなくて半年とか雇用期間がきまつてるんだ」

そう言うところなとも黙ってしまった

意見を言うのは簡単だ

だけど現実には甘くない

「・・・・・・申し訳ありません皆さん

私のせいでいろいろとご迷惑を・・・・・・」

「ああ、まったくだ

だからどうせ迷惑かけてるんだからもつとかけてくれ」

つかさの時もそうだったが一人で人は生きていけないんだ

迷惑をかけるのは当たり前

俺もこれから皆に迷惑をかけることがあるだろう

「それじゃあ、平野君

少しお願いがあるんだけど」

いつもの口調になったゆかりさんが言った

「ん？なんですか？」

「しばらく、うちに泊まってくれないかしら？」

「え」と、着替えに制服、歯ブラシ、財布、携帯、ノートPC・・・」

ゆかりさんが言うには高良家は父親が単身赴任

しかも責任のある立場らしいのでそうやすやすと帰っては来れないらしい

女二人だと不安、だからみゆきと親しい俺が泊り込みで・・・  
つてことらしいが

「・・・なんか、かなり建前な理由だと思う」  
本音はどうなんだろう？

まあ、俺もみゆきに何かあるのはいやなので断る理由も無いが  
学校にも一応連絡して問題が無いようにしておいてくれるらしい  
「さて、そろそろか」

時計を見る

もうすぐ夜の10時を示していた

さすがにあんまり遅いと逆に俺が心配らしいのでゆかりさんが車で  
ウチまで迎えにきてくれるらしい

「・・・さて、これからどうなるかな」

勝手が違う高良家での生活とストーカー

二つ心配事があるがなんとかなるだろう

ちょうど、外でクラクションの音が聞こえた

E  
p  
i  
s  
o  
d  
e  
  
み  
ゆ  
き  
  
2  
  
お  
わ  
り

## Episode みゆき 2「本職」(後書き)

### 次回予告

みゆきの家での生活が始まった  
あくまで俺の仕事はストーリーカーからの警備であって楽しむことじゃないはずなんだが………

って、みゆき!!前!!前!!

### 次回

Episode みゆき 3

「どじっ子の本領」

お、おたのしみに……

**E p i s o d e    みゆき    3 「見ている者」 (前書き)**

前回の次回予告とタイトルが変わっています  
もうしわけない



## Episode みゆき 3「見ている者」

Episode みゆき 3

「平野く〜ん、まだ〜?」

「もうちよつとですから待っててください」

ジャーツと米が焼ける音がキッチンに響く

ケチャップをかけてさらに炒める

別のフライパンでふんわりと中が半熟のオムレツを作り

「みゆき〜、チキンライス盛ってくれ」

「はい」

みゆきに頼んでチキンライスを盛ってもらいその上にオムレツを乗せ真ん中の部分を切り開くと

「わぁ〜、おいしそうね〜」

「得意料理なんだ」

その辺のレストランっぽいオムライスの出来上がりである  
この半熟オムレツ作れるようになるの苦労したんだよね〜  
濡れタオルとかで練習したっけ

「それじゃ〜、いただきます〜す」

「私もいただきますね」

「おう、じゃんじゃん食ってくれ」

ゆかりさんとみゆきがスプーンを持って食べ始める

「つて!! ちょっとまってえーい!!」

俺は叫んでいた

「あら? どうかしたの?」

「どうしたじゃないですよ!! 何でのんきに飯食ってるんですか!!」

本日は土曜日

ゆとり教育なんてものによって休日になった曜日である

関係ないけどなんで土曜に祝日が重なっても振り替えがないんだろ  
うな

その辺も改正するべきだ

「やっぱり、お一人で作るのは大変でしたか?」

「それほどでもない

いや、そうじゃなくて」

俺が高良家に泊まってる理由は?

「ストーカーを何とかするためでしょうが!!」

「いいじゃない、昨日は出なかったんだし」

そう、昨日一日は怪しい男は現れなかった

学校でも常にみゆきから離れないように行動したし

(さすがにトイレとかは行ってないからな!!)

まあ、なんかかがみに変な目で見られたけど

「現れないに越したことはありませんから……」

う、しまった

みゆきがいる前でこの話題はNGだったか!?

「ま、まあ出ないなら出ないで俺も家に帰れるんだけど……」

「

俺は何とか話題をそらしてみた

「あら、いつそのことみゆきのお婿さんになってみたら?

私は大歓迎よ」

「なっ!!」

「おおおおお母さん!?!」

みゆきが真っ赤になる

いや、多分俺も赤いと思う

「た、確かにセイカさんはカッコいいですし頭もいいですし運動も

出来ておまけにやさしいですけど!! けけけ結婚なんて……」

きゃっ!!」

どーん、とみゆきが壁にぶつかった

慌ててたとはいえ……壁にぶつかるか普通?

しまもな、みゆき?

その否定は否定になってない……っていうか、聞いてるこ  
つちが恥ずかしいんだが

「あらあら、そうね

平野君は誕生日はいつ?」

「え? 7月の24ですけど」

「そうよね、18歳にならないと男の子は結婚できないものね」  
「そういう問題じゃないでしょう!!」  
などと、ストーカー騒ぎがあるなんて考えられない楽しい会話

だが、5分後にこの楽しい時間は終わる

ピンポン

「あら? 来客かしら?」

「俺出ますよ」

「一応警備なんで」

ぱたぱたと玄関まで走る

「どちらさまですかつと」

玄関を開けると

「およ？誰もいない……」

つてことは、ピンポンドッシュか

どつかのがきんちよがやったのか……

まったく、迷惑な

「……ん？ポストになんか入ってる」

ポストに封筒のようなものが入っていた

「分厚いな……なんだろう？」

宛名も何も書いてないのでとりあえず居間へもっていく

「どちらさまだった？」

「ピンポンドッシュっぽいです

あと、なんか届いてましたよ」

俺は何気なくその封筒をゆかりさんに渡す

「あらあら、何かしら……」

中身を見たゆかりさんが固まる

さらに近くにいたみゆきがのぞきこむと

「……っ！！」

みゆきまで固まった

「ど、どうしたんだよ……」

俺も覗きこむ

「だ、だめです……みないてください……」

だが、もう遅かった

そこに入っていたのは

大量のみゆきの写真だった

食事している姿

話している姿

ひどいものだと着替えをしている姿

そんな封筒から、一枚の紙が転がり出た

俺はそれを引つつかみ、中身を見る

そこには、一見すれば普通のラブレターだが

よくよく見れば、その人間が普通でないことが分かる

『みゆきちゃんを一目見たときからあこがれてた

あのときからずっと好きだった』

そう、ここまではいいのだ

『だけど、最近変な男が君にまとわりついてるね

めいわくだろ？うつつとうしいだろ？

だから僕が助けてあげる

君を守るのは僕だから

だから早く僕に会いにきて………』

ここまでくると、もう正常な文章ではない

しかもご丁寧に筆跡が分からないようPC打ちだ

「………俺のせい………なのか」

「セイカさん？」

「俺が………みゆきが俺みたいにな奴とかかわったから」

「ちがいます!!」

そんなことをつぶやいた俺にみゆきが抱きついた

「私がセイカさんというのは、私の意志です!!」

セイカさんから拒絶されない限り、私はセイカさんの近くにいたいんです!!」

必死に叫んでくれるみゆき

一番つらいのはみゆきなのに

ああ、情けない俺は

「ごめんな、変な事言つて

俺はみゆきを拒絶したりはしないから」

泣きじゃくるみゆきの背中をぼんぼんと叩いてやる

「あああら、本当に夫婦みたいね」

「っ!!ゆかりさん!!」

場の空気を和ませるためなのか、ゆかりさんが冗談を言ってくれた  
俺の言葉に釣られてみゆきも笑った

………冗談だよな？

だ  
け  
ど  
俺  
達  
は  
  
そ  
の  
や  
り  
取  
り  
を  
見  
て  
い  
る  
人  
間  
が  
い  
る  
の  
に  
気  
づ  
か  
な  
い



E p i s o d e

みゆき

3

「見ている者」

おわり

Episode みゆき 3「見ている者」(後書き)

次回予告

いよいよ、俺達は本格的な捜査に乗り出す  
犯人は絶対に許さない  
俺の仲間を怖がらせるとどうなるかを思い知らせてやる

ああ、死ぬ覚悟は出来たか？

次回

Episode みゆき 4「なくなる鎖」

みゆき、お前は優しすぎるんだ

**E p i s o d e    みゆき    L a s t 「なくなる鎖」 （前書き）**

次回予告と変更してみゆき編の最後です  
連続で予告内容の変更    申し訳ありません

Episode みゆき Last「なくなる鎖」

Episode みゆき 4

今日、みゆきは学校を休んだ  
さすがにあんなことがあった以上、警察も動いてくれる  
だが、たかがストーリーカー  
そんなに大量の人員を動員してくれるわけもなく  
成美さんの知り合いの男性警官が見張りをしてくれる程度  
だけど、それだけでもありがたかった

けど、捜査はしてくれない  
警察が動かないなら……

「私達で犯人をみつけよう!!」  
そう、こなたが高らかに宣言したのは昼休み  
みゆきがないがいつもの面子+小早川、岩崎がいた  
「そうよ!! そんな女の敵はさっさとつかまえるべきだわ!!」  
一緒に立ち上がるかがみ  
すでにみゆきのストーリーカーについては知り合いたちは皆知っている

「ねえ、みなみちゃん

何か心当たりないかなあ？」

そうつかさが聞いた

「……………なぜ私に？」

「ゆきちゃんと同じ中学だったんだよね？」

それでストーカーさんに心当たりないかと思って」

そうつかさが言うと岩崎は考え込んだ

「……………みゆきさんに告白する人はたくさんいたので」

「しつこかった奴とかいないか？」

「……………結構いました」

それじゃあ、特定できない……………

まあ、みゆきの容姿と性格なら告白されても不思議じゃないよな

「すみません、お役に立てないで……………」

「いや、そんなことはないさ」

「そうだよ！！みなみちゃん！！」

みなみちゃんも頑張ってるよ！！」

と、小早川がフォローを入れると

ありがとう、と岩崎は言っていた

「こうなると全く手がかりがないな……………」

考える

なんとかストーカーをおびき寄せることは出来ないか

そんなとき

「ねえ、一つ思いついた

ストーカーをおびき寄せる方法……………」

「ほんとか！？」

こなたが言う

「けど、あんまりお勧めはしたくないね……………」

「どういうことよ」

こなたは説明を始める

確かにそれは、一歩間違えばみゆきに危険が及ぶ

だが、高良家に帰ってそれを話すとみゆきは了承した  
いつまでも、みなさんに迷惑はかけられない  
これで終わりにします、と・・・・・・・・

みゆきは今、一人公園のベンチで眠っている  
いや、眠ったフリをしている

ちなみにココに来る前に家の玄関の前で一芝居うつておいた  
警察官には帰ったフリをもらって俺とみゆきが玄関で喧嘩する  
フリをし

みゆきが飛び出すということ

そして、近場の公園でみゆきは寝たフリをしている

ストーカーがああ現場を見ていれば、間違いなくここにきてみゆき  
にアクションを起こすはず

だが、これは俺が助けるのが遅れればみゆきに危害が及ぶ  
つまり、みゆきが俺を信用しているから出来る作戦なんだ

（絶対に守るからな、みゆき・・・・・・・・）

物陰から様子を見る

そして、そこに一つの人影が見えた

（きたか！？）

身長は俺より少し低いくらいか……………

おそらく同じ高校生

だが、その手には……………

（な、ナイフ！？）

そう、その手にはサバイバルナイフが握られていた

俺は飛び出す

「みゆきいー！！」

俺の声に驚いたのか、男がみゆきから距離をとる

俺の声に反応してみゆきも起き上がって男から距離をとった

俺はその間に割ってはいる

「せ、セイカさん」

「大丈夫だ、俺が守る！！」

相手をにらみつける

街灯に照らされた顔は、全くナイフが似合わない整った顔だった

「な、なんだよ

何でお前がいるんだよ！！」

その男は俺がいることに驚いたのかナイフを突きつけた

「喧嘩して、みゆきちゃんと……………」

「は！！あんなの演技に決まってるだろ

お前はおびき出されたんだよ！！」

そう、こいつはまんまとおびき出された

みゆきだけを見て、周りが見えてなかった

その一途さには関心はするけど

「やりすぎたな、もうすぐ警察も来る

ゲームオーバーだ」

俺は男をにらみつける

するとその男は……………

「くくく……………あはははは！！」

笑いだした

「あはは、警察が何？」

僕の目的はみゆきちゃんとずっと一緒にいること」

「だから、お前は捕まって……………」

「それはないよ!!」

これから邪魔者を排除して……………ずっと二人でいるんだ

天国って言う樂園で、僕はみゆきちゃんとずっと一緒に暮らすんだ」

ドクン

「それは、私を殺すということですか？」

「ちがうよ、僕が君を呪縛から解き放つんだ!!」



クロス？

「ふざけないでください!!」

「ふざけてなんかないよ、僕は本気で君を愛してるんだ」

ダレヲクロスッテ？

「あなたはおかしいです!!  
狂っています!!」

「そうさ、僕は君を好きになった瞬間から狂ってしまった！！  
愛とは罪深いよね」

フザケルナ

「ふざけんな・・・・・・・・」  
一歩、前に出る  
「だ、ダメですセイカさん！！  
殺されてしまいます！！」

もう一步

「誰を殺すって？」

「殺すのは君

みゆきちゃんを呪いから解放たれるんだよ」

一気に踏み込んだ

そのまま顔面に拳を入れる

「このっ！！」

男がナイフを振る

軽く頬を掠めたが、気にしない

さらに、蹴りを入れて吹き飛ばす

「げほっ！！ごほっ！！」

むせる男

もしかしたらあばらの三本くらいはいったかもしれない

「もう一回言ってみろ

ダレヲコロステ？」

「ひ、ひいっ！！」

男は後ずさりする

ああ、なんか今なら

人殺しになってもいい気分だ

近くに落ちてる、さっきまで男がにぎっていたナイフを手取る

「さあ、死ぬ覚悟は出来たか？」

「いやだ、やめてくれ！！

死にたくない」

「じゃあ、俺がお前を呪いから解放放ってやるよ

ああ、俺っていい奴だよな？な？」

ナイフを振り上げる

「いやだーーーー!!」

どっ!!

と、何かが背中当たった

「いやです……セイカさん……」

「みゆ……き？」

後ろから、みゆきが抱き付いていた

「お願いです、私のせいで人殺しに何て……ならないでくださいっ!!」

泣いている

みゆきが、泣いている

俺は、ナイフを下ろして捨てた

男が安心して様な顔をしたので

「ぶっごっ!!」

蹴りを入れて気絶させた

「私は……私はっ……ヒック」

「ごめん、ほんとに……ごめん」

背中越しに、みゆきに謝る

本当なら、正面から抱きしめてやりたい

泣いてる顔を覆い隠してやりたい

だけど、今の俺はきつとひどい顔だ

だから、このままで

「止めてくれて、ありがとう」  
そう、礼だけ言って

みゆきが泣き止むまで、そこに立っていた

E p i s o d e    みゆき    4

おわり

Episode みゆき Last「なくなる鎖」(後書き)

次回予告

誰かが泣くとき、何かが見える  
誰かが傷つくとき、何かが見える  
守れなかったとき、何かが見える

きつとそれは 俺の罪なんだ

次回

Episode セイカ 1

「あふれるキオク」

お楽しみに

E p i s o d e    セイカ    1 「あふれるキオク」

皆といるとき、俺はとても幸せだ  
その気持ちは、とても心地よくて  
俺にとっても暖かい心くれた  
だけど、なぜだろう

ときどき、俺はここにはいけない気がするんだ

E p i s o d e    セイカ    1

「ん・・・・・・・・朝か？」

布団の中で目を覚ます

6月の下旬

そろそろ蒸し暑くなってくるころである

「今日は学校やすみだよな」

カレンダーには「土」と書かれている

うん、間違いない

みゆきのストーカー騒動が終わってちょうど一週間だ

「今日は、何の約束もないし掃除でもするか」

最近サボっていたので結構ほこりがたまっていたりする

せつかくだから、普段使わない部屋も掃除しようと思った

「うわっ！！すげえな……………」

ココは屋根裏

全く使わなくなった道具なんかがしまっている

「お、小学校の教科書！！

なつかしいな」

濡れ雑巾をかけながら物を物色していく

いろいろと懐かしいものがたくさん入っていた

そして、一冊の本を見つける

「ん？これは……………アルバムか？」

ぺらりとめくると小さい俺が写っていた

「赤ん坊のころの俺ってこんなだったのか……………」

俺を抱えて笑っている両親

なんだかんだで、やっぱり俺は大事にされてたんだな

こんど北海道の二人になんか送ってやるか

次々とページをめくる

だが、途中で手が止まった

「ん？だれだこの子……………」

途中で、俺と仲良さそうに写っている女の子の写真があった

そのあとも、その子が写っている写真がたくさんある

「親戚の子かなにかか？」

けど全く覚えがないし……………」

いや、ちがう



見覚えがある、その子の顔は

「・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・頭が痛い」

まるで、俺の脳が「これ以上見るな」といつているように  
だんだんと痛みが激しくなってきた

「少し休もう、きつと埃にまみれてたからだ」

シャワーでも浴びようと俺は屋根裏から出た  
手には、アルバムを持って

「ふう、さっぱりしたぜ」  
バスタオルで頭を拭いて湯上りの水分補給に麦茶でも・・・・・・・・  
と思っていると

ピンポン

と、チャイムが鳴った

「ほいほい、どちらさんですかっ」と

ドアを開けると、そこには見知った顔がいた

「やほー!!」

「遊びにきたわよ」

「こんにちわ」

「お邪魔してもよろしいでしょうか」

いつもの四人だった

「おう、ちょうど掃除の片付けも終わったところだからかまわないぞ」

俺は四人を招きいれる

「うお、ほんとにきれいだ」

こなたが感嘆の声を出した

ふふん、かなり気合を入れたからな

大掃除並みに張り切ってしまっただぜ……

「セイカ君、台所借りるね？」

「もうすぐお昼だし、私達で作ってあげるわよ」

「かがみんはおとなしくしてたほうが……ほぶっ!!」

「ふふ、それではセイカさん

少々お待ちくださいね」

「ああ、楽しみにしてる」

かがみに殴られたこなたはスルーして俺はソファに座る

と、かがみはやっぱ料理しないのか

こつちにやってきた

「結局やらないんだな」

「うるさいわね、適材適所なのよ」

「そうだな、お前は食べるの専門……あべし!!」

こなたに次いで俺までもがかがみの鉄拳を食らってしまった

ちっ!!最近突っ込みのスピードが上がってやがる!!

「って、あら？」

これセイカ君のアルバム？」

俺が頭を抱えているとかがみがさっきのアルバムを見つけた

「ああ、屋根裏掃除してたらでてきた……」

まだ痛む頭部をさすりながらアルバムを手取る

「ねえ、見せて見せて」

アルバムを開く

さつきと寸分違わぬ写真たちがでてきた

「ん、よく見えないじゃない

ちゃんと見せなさいよ」

「みせてるだろ……って」

今気がついた

俺とかがみの距離はゼロ

けっしてニツヰ（ ）ノポンってやってるゼロじゃないぞ

あの最終回は泣いた・・・・・・・・って、違う違う！！

そう、かがみとの距離が近い

なんつーか・・・・・・・・一つの本と一緒にいちゃいちゃしながら読んでる恋人みたいな・・・・・・・・

「ん？どうかしたの？」

「い、いや・・・・・・・・なんでも」

普段言い争いばかりだけど・・・・こいつも結構かわいいよなツンデレとは難儀だな・・・・・・・・

「・・・・・・・・なによ、人の顔じろじろと」

「・・・・・・・・黙ってたらかわいいのにな、と」

「んなつ！！ななななな！！」

かがみが顔を真っ赤にして離れる

ん？なんかまずいことを言ったか？

思ったことをそのまま口にしたただけだが

「ば、バカ！！」

「痴話喧嘩してるとこ申し訳ないけどごはんできたよ」

突っ込みたいところもあるがとりあえず後回しだ

俺はそのアルバムを腋においてこなたたちのほうへ向かった

食後

俺のアルバムが皆に見られていた

「うわゝ、セイカ君ちっさいね」

「ほんと、昔は無邪気な顔してたのね」

おい、今は無邪気じゃないとでも？

・・・・・・否定はしないが

「あー！これって小学校の入学式！？」

「ランドセルを背負って、目を輝かせてますね」

と、公開処刑もいいところだ

「・・・・・・あれ？この子は？」

「ん？」

こなたが指差している少女

そう、さっきの見覚えが無い・・・・・・いや、有ると思う

「いや、俺も全く覚えが無い」

「それは無いでしょ、こんなに仲良さそうなのに」

「んな事いわれてもな・・・・・・」

「ねえねえこなちゃん、これって名前かな？」

「ほんとですね、写真の端のほうに書いてあります」

俺も指差された部分を見た

確かに筆記体で何か書かれている

・・・・・・が、筆記対なんて俺は読めません

ああ、英語は悪いさ

だからなんですか？

「えつと・・・・・・『RIKA HIRANO』・・・・・・へ

えゝ、りかちゃんか」

「お人形さんみたいな名前だね」

りか？

「こちらは漢字で書いてありますね、『梨花』ですか」  
「なんか、オヤシロ様と話してそうな名前だね」

あ．．．．．

「セイカ君？」  
「あなたが声をかけてくる  
だが、俺はそれどころじゃなかった」

あ、  
ああ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ちょっと！！どっしたのよ！！！」

あ、  
あああああああ！！

俺の頭は、大量の情報が流れていた  
そう、俺が自分で鍵をかけた記憶  
捨ててはいけなかったのに、捨ててしまった記憶

「あああああああああああー!」

今までのフラッシュバックなんて、目じゃない  
激しい頭痛が襲って

俺は意識を手放した

E p i s o d e   セイカ   1

おわり



Episode セイカ 1「あふれるキオク」(後書き)

次回予告

これは一人の少年の幸せな過去

これは一人の少年の消し去りたいキオク

これは少年の、罪の意識

誰にも罪なんて、ありはしないのに

次回

Episode セイカ 2「よみがえる記憶」

おたのしみに

Episode セイカ 2「よみがえるキオク」

Episode セイカ

五年前

「んーっ!! 今日も疲れたぜ」

俺は背伸びをする

俺は小学校五年生だ

「おーい!! 平野!!」

帰りにサッカーやろうぜ!!」

友達の桃原が寄ってくる

「いや、ごめん

今日妹の誕生日なんだ」

「お前の誕生日でもあるだろ？」

「まあな」

そう、俺と妹……梨花の誕生日は同じなのだ  
双子ではない、本当にたまたま同じだったんだ

ちなみに梨花の年は二つ下である

「どうせ家でパーティーとかやるからお前もこいよ」  
と、桃原を誘うが

「わりの、今日は習い事あるんだ」

「あー、そっか

じゃあしょうがないか」

正直残念だが、わがままは言わない

桃原は優しい奴だから俺がどうしてもといえばきつと習い事をサボ  
ってでもきてしまう

だから、わがままは言わない

「んじゃ、また明日な平野！！

ハッピーバースデー！！」

「ああ、ありがとう！！」

桃原は他のクラスの男子と駆けていった

その日が、本当に幸せな誕生日なら良かったのに

「あー！！お兄ちゃん遅いよ！！」

「わるいわるい」

家に帰ると梨花はマンガを読んでいた  
ベルサイユのなんちゃらだ

「親父たちは？」

「今日のパーティーの買い物行ったよ」

「そうか、それじゃ俺達も行こう」

「うんっ！！」

毎年、誕生日には二人で出かけて誕生日プレゼントを買い、それを交換していた  
前に蛇のおもちやを買ったら殺されそうになったのでまともなものを買おう

「お兄ちゃん、クレープの屋台でてる！！」

「なんだ、食いたいのか？」

「うんっ！！」

しょうがないな、と俺は財布から千円札を出し

「ほら、買ってこいよ」

「えへへ、ありがとう！！お兄ちゃん！！」

梨花に渡した

まったく、現金な妹である

「お兄ちゃんはいつもの？」

「おう」

ちなみにいつものというのはチョコバナナである

残り、2時間35分

「おまたせっ!!」

「おう」

梨花からチョコバナナクレープを受け取る

梨花は俺に渡したとたんに自分のイチゴスペシャルにかぶりついた

「おいおい、落ち着いて食べるよ」

ほっぺにクリームついてるぞ」

俺はそのクリームをすくって口に運んだ

「お、お兄ちゃん!？」

何やってるの!？」

「え?クリームついてたから……」

「もゝ!!はずかしいな!!」

「な、何がですか?」

なぜ我が妹は怒っていらつしやるのだろうか

あ、クリームは自分で食べたかったんだな

意地汚い妹め

「何か失礼なことを考えてませんかお兄様」

「イエ、ナニモ」

「棒読みでも説得力ないよ!!」

まだ小学三年生だというのに、ずいぶんと突っ込みにキレがあるな  
といっても、梨花は体の成長はとつてもお早いようで

すでに胸にはそれなりのふくらみがあったりする

ちなみに男子からはモテモテだ

まあ、梨花に着く悪い虫は俺とオヤジがぬっ殺しているわけだが  
「それじゃあ、そろそろ行きますか」

「うん!!」

そういえば最近、梨花は腕に引っ付いてこなくなった

昔は何をするにもお兄ちゃん、お兄ちゃんだったのだが

これが大人になるってことか……一抹の寂しさを感じる

「お、お兄ちゃん

手つないでもいい?」

「ん? いいぞ」

どうやら、まだ梨花は子供らしい

そのときの俺は、梨花の顔が真っ赤だったのに気づかなかった

残り、2時間

「うん、これでいいか」

「私はこれかな」

俺たちは選んだプレゼントをレジにもっていき、会計を済ませる

「あらあら、小さなカップルさんね」

と、レジのお姉さんに言われて

なぜか梨花は顔を真っ赤にしていた

いや、冗談だって気づけ

残り、1時間32分

「そろそろ帰らないと親父が心配するか」

「そうだね」

時刻は4時43分

俺達がどこでなにをしているかは親父たちは知っているがあんまり遅いと心配する

ココは駅前のデパート

家に帰るには電車に乗らないといけない

が

『ただいま、人身事故のため運転を』  
『』

というアナウンスが流れていた

「やばいな、これじゃ結構遅くなるぞ」

仕方が無い、電話を入れておこう

駅には必ず一つはある公衆電話

そこから家に電話をかける

「あ、母さん？」

実は  
「」

『はいはい、わかったわ

お金残ってたらタクシー拾ってもいいけど………』

「そんなお金はございません」

『それじゃあ、電車が来るまでまってなさい』

「ほい」

電話を切る

近くにいた梨花が

「お兄ちゃん、歩いて帰らない？」

と言った

残り、28分

「えへへ」

梨花はさっきからずっとニヤニヤしながら俺の腕に抱きついていて兄としては嬉しいのだが、もう少し離れてくれないと歩きづらいだが、梨花の幸せそうな顔を見ると別にいいかとも思う

残り、6分



ようやく家の近くにある大通りまできた

そこで、梨花は突然

「のど渴いた」

と言い出した

「もうすぐ家なんだから、がまんしろよ」

「ぶー、無理ー」

いったんわがままモードに入るとこれである

さつきまでのかわいらしい妹はどこへ行ったのやら

「あー！あそこに自販機があるー！！」

「もう知らん・・・・・・買ってこいよ」

「お兄ちゃんのも買ってあげるー！！」

クレープのお礼ー！！」

と言って、梨花は信号が青になると横断歩道を渡り自販機へ走っていった

残り、28秒

「おーいー！！走らなくていいからなー！！」

と、行っても走ってくるのは目に見えている

梨花以外の人が待っていない横断歩道

それが青になったとたんに梨花は走り出した

残り、0秒

それは、突然だった

横断歩道の中ごろに差し掛かったとき、梨花が視界から消えた  
ただ、分かったことはものすごいスピードで車が走り去ったこと  
梨花の大好きなコーラのペットボトルが、ひしゃげて中身を垂れ流  
していたこと

梨花が、吹き飛ばされたこと

「ひ、ひき逃げだ!!」

女の子がひかれたぞ!!」

周りの大人が騒ぎ出す

「救急車!! 救急車だ!!」

俺にとっては、それは騒音にしかない

「り……か？」

一歩ずつ梨花に近寄る

コーラと一緒に、赤い液体が水溜りを作っていた

「り、か……」

「おにい……ちゃん」

梨花が、手を伸ばす

俺はそれをつかんだ

服が赤く染まるのにも気づかずに

「りか……」

そして梨花は、震える口で

「おにいちゃん、大好き……だよ

世界中で……いちば、ん……」

梨花の腕に、力が入らなくなった



葬式では、たくさんの梨花の友達がきてくれた

皆泣いて、泣いて、泣いて

平日だったこともあって、クラスの代表として桃原が参列してくれた

親父も、母さんも、ないている

皆泣いてるのに、俺は涙が出なかった

母さんが、抱きしめてくれた気がする

桃原が、声をかけてくれたような気がする

だけど俺の心は、現実を捉えていなかった

何でこんなことになった？

もしあの時、おとなしく電車を待っていたら？

もしあのとき、梨花が自販機に行くのを止めていたら？

もしあのとき、一緒に自販機にっていたら？

そんなIfを、俺はずっと並べていた

梨花の埋葬が終わった

骨壺を、先祖が眠っている墓に収めた

思い返されるのは、梨花の最後の一言

大好き、と言う妹の告白だけ

今まで色鮮やかだった俺のセカイは、色あせて見えた

その翌日、俺は倒れた

三日後には、何事も無かったかのように目を覚ました  
泣いて抱きついてくる母さんに「ごめん」と言った

医者、ストレスによって体の機能がうまく働かなくなっていたと  
言っていた

一週間ぶりに我が家に帰ってきた

入り口には、小さな写真たてがある  
家族旅行に行ったときの写真だ

そして俺は、その写真の中の小さな女の子を指差して言った

この子、だれ？

E p i s o d e    セイカ    2 「あふれるキオク」

おわり

Episode セイカ 2「よみがえるキオク」（後書き）

次回予告

目を覚まさない、一人の少年

少年の両親が、すべてを少女達に伝えた

少女達は言う、そんなのは彼のせいじゃないと

この世界の人々は、誰も彼をせめないだろう

いなくなった彼女でさえ

次回

Episode セイカ Last「キミがいないセカイ」

おたのしみに

Episode セイカ Last「キミがいないセカイ」

Episode セイカ Last

こなたView

すべてが白で統一されている部屋

そこで、彼は寝ていた

「セイカ君、窓開けるね」

私は病室の窓を開ける

夏だが、心地の良い涼しい風が病室に入ってきた

すでに、セイカが倒れて二週間が過ぎていた

セイカ君が倒れて、セイカ君の両親がやってきた



そこで聞いたのは、セイカ君が記憶をなくしていること  
そのなくしている記憶が、妹さんに関することだけだということ  
・・・・・・・・その妹さんは、もう亡くなっていること

「セイカ君、もうすっかり夏だよ？」

7月の上旬、すでにセミが鳴き始めている

「もうすぐ期末テストだよ？ただでさえセイカ君英語と古文ダメな  
んだから・・・・・・・・」

って、私も人の事いえないかな・・・ははは」

近くの机には、たくさんのお土産の品

この数ヶ月で、セイカ君は人の輪を広げた

いや、本当はセイカ君は人と接するのは得意分野なのかもしれない  
けど、どこかで妹さんのことを自分のせいだって

心のどこかが覚えてたんだ

「セイカ君のせいじゃ、ないのに」

けど、知ってる

彼はそういう人だから

私達には自分に頼れ、といってくるくせに自分からは頼ろうとしない

「明日は、かがみがくるよ」

アレから、私達は交代でお見舞いにきている

毎日、かならず誰かがそばにいるように

目が覚めても寂しくないように

学校以外では、誰かが必ずそばにいた

「だから、早く起きてよ・・・・・・・・」

何度目だろう

わたしは音を立てずに、泣いた

かがみview

「よ、きたわよ」

返事が無いのは分かってる

だけど、どこかで期待してしまう

この少年が、「よ！！心配かけたな」とか軽口を叩いて起きるところを

私は悲しんだりしない

だって、絶対に戻ってくるって信じてるから

「信じてる、のよ？」

点滴の針の刺さっていない手を握る

その肌は白くて、やわらかくて、あたたかい

何でこんなにもあたたかいのに、動いてくれないの？

「ねえ、あんたは今どこにいるのよ……………」

つかさview

「お、おじゃまします」

ゆつくりとドアを開ける

これは前にお医者さんがセイカ君の体を拭いてるときに突入しちゃ

ったから

はう、あの時は恥ずかしかったよ

今日はそんなことも無く、セイカ君はいつもどおり眠っていた  
そんないつもどおりは、いやだけど

「セイカ君、りんごむいちゃうね」

バスケットの仲のりんごを取って、なれた手つきでむきはじめる

「セイカ君、たべる？」

反応は無い

今日も全部私が食べることになっちゃった

「お菓子作る約束、覚えてるよね？」

わたし、楽しみにしてるからね」

泣かない

強くなるって決めたから

だから、セイカ君の前では絶対に泣かない

戻ってきたときにセイカ君をビックリさせるんだ

『がんばったな』って、ほめてもらうんだ

だから、がんばる

みゆきView

「失礼します」

セイカさんの病室に入ります

手にはお見舞いのお花

古くなったお花と、取り替えます

「セイカさん、早く帰ってきてくださいね」  
私には、これ以上の言葉は見つかりません  
ただただ、かえってきてほしい  
それだけ、ただそれだけなんです  
こんなときは、私の知識は何の役にも立ちません  
だから、私はただ

「早く、目覚めますように……」  
と、セイカさんの手を握って祈るしか出来ませんでした

## こなたView

学校の屋上から、空を見上げる  
キミがいないセカイは、こんなにも色あせている  
出会う前に戻っただけなのに、物足りない  
アニメも、ネットゲも、つまらなく感じる  
学校に来ているのも、皆に会えるから  
会わないと、つらくて押しつぶされてしまっから  
いつから、心惹かれたんだろう  
いつから、こんなにも愛しくなっただろう  
だけど、彼は目覚めない  
いつ、帰ってくるかもわからない

「セイカ・・・・・・・・くんっ!!」

ただ、私は屋上の片隅で泣いた

E p i s o d e    セイカ    L a s t

おわり

Episode セイカ Last「キミがいないセカイ」(後書き)

次回予告

人により、幸せの概念は異なる

少年の幸せとは、なんなのだろう？

少年の幸せは、いつも近くにあったのに

次回

Episode Lucky Star 「幸せの星」

## Episode Lucky Star

Episode Lucky Star

ここはどこだろう

なにもない、暗い空間

ああ、きつと牢獄なんだ

俺の罪を裁くための牢獄

なら、ここにいればいい

俺は、裁かれるべきなんだ

あいつらのそばには、いてはいけないんだ

俺のせいで、不幸になる

あいつらを、不幸にしたくない

だから、このままで

『このままで、いいの?』

空から、声が聞こえてきた

「アンタは……」

「おひさしぶり、平野君」

かなたさんが、いた

「アンタがいるってことは、ココは天国?それとも地獄?」  
おちゃらけて見る

かなたさんは、そんな俺を無視して俺に向き直った

「あなたは、このままでいいんですか?」

「このまま?」

「こんなところに閉じこもって」

かなたさんは周りを見渡した

本当に何も無い、暗い、暗い空間

「……俺は、皆を不幸にするから」

「どうして?」

俺はかなたさんに話した

俺のせいで、妹が死んだこと

しかもそれを忘れて、毎日を無駄に過ごしていたこと  
このままだと、きっとみんなも不幸になると言うこと

それを聞いたかなたさんは



ぱんっ！！

俺の頬をはいた

「あなたのせいで、あの子達が不幸になる？

そんなわけがないでしょう！？」

今あの子達が、どんな気持ちでいると思ってるんですか！？」

「そんなの・・・」

「だったら、一度見せてあげます！！

今あの子達の表情を！！」

そうかなたさんが言った瞬間

俺の足元が無くなった

足元だけではない周りも

まるでドームのように、空間が無くなっていった

「な、なんだ」

そこに、映像が写る

いくつも、いくつも

俺が、よく知っている少女達だった

こなたは、枕に顔をうずめて泣いていた

かがみは、ただ部屋でうつむいているだけだった  
つかさは、つらそうな顔で天井を見上げていた

みゆきは、顔色が悪いのに必死に医学書をあさっていた

小早川・岩崎・八坂・永森・田村・パトリシア・黒井先生・桜庭先生・天原先生・成美さん・そうじろうさん・……………

みんなみんな、つらそうな顔をしていた

「なん……………」

なんでそんな、そんな顔をしてるんだ

「あなたが、いないからです」

「俺……………」

だつて、俺は

「妹さんを、死なせてしまった？」

「……………」

だが、俺が言い終わる前に

「だつたら、本人に聞いてみてください」

「え？」

そういつたかなたさんの後ろには

「ひさしぶり、お兄ちゃん」

梨花がいた

「梨花？梨花なのか？」

手を伸ばした、抱きしめようとした

だが、俺の手は届かない

梨花が、後ろに下がったからだ

「私は、お兄ちゃんが嫌いだよ」

「……………」

そうだよ……………」

いまさら何をしようとしているんだ俺は

俺のせいで梨花は死んだんだから

「だって、今のお兄ちゃんは」

どんな言葉でも、受け止めるつもりだった

俺を呪ってもいい、けなしてもいい

だが、俺に降りかかった言葉はそんなものではなかった

「お兄ちゃん、お友達を泣かせてるんだもん」

「え？」

「私が大好きなおにいちゃんは、泣かせるところか、いつも守ってくれるもん」

私がいじめられたときも、必死に守ってくれて」

とん、と暖かい感触がする

それは、梨花の体温だった

「それが、私の大好きなお兄ちゃん」

「梨花・・・・・・・・俺・・・・・・・・」

抱きついていて梨花の頭をなでる

そして

「俺、行ってくるよ」

妹に嫌われるようなダメ兄貴にはなりたくないからな」

梨花を離れた

「うん、いつてらっしやい」

もうこんなところに来ちゃ・・・・・・・・だめだよ？」

「・・・・・・・・ああ、もう来ないよ」

目の前の空間が割れる

そこからは、あたたかい光があふれていた

「ありがとう、梨花、かなたさん」

二人に礼を告げる

もう二度と会うことは無いかもしれない  
いや、あっちゃいけないのかもしれない

「ずっと見守ってるからね!!お兄ちゃん!!」

「ああ!!片時も目を離すんじゃないぞ!!」

「無理だよ!!お父さんたちも見ないといけないもん!!」

「それじゃあ、ほどほどに見てくれ!!」

「うん!!」

そして俺は

その光に飛び込んだ

E p i s o d e   L u c k y   S t a r   おわり

## Episode Lucky Star (後書き)

### 次回予告

もう、誰も傷つけさせない

誰も、悲しませない

そのための翼を、俺に出来ないか？

このセカイを羽ばたくための、翼を

### 次回 最終話

キミがいるセカイ

俺、皆に出会えて、よかった！！

「キミがいるセカイ」

こなた view

昼休み

屋上から空を見上げる

曇り空が広がっている

最近は皆と一緒に食事をしていない

一人足りないだけで、こんなにも違うんだ……………

「セイカ君……………」

「セイカ君ってさ、空を飛んでみたって思ったことある？」

「ん？まあ、飛べたら便利だろうな

通学とか」

「夢が無いなあ

空を飛ぶ力があるってことは大抵別の力がその中に……………」

「はいはい、わかったから

その垂れてるチョコを何とかしろ」

「ふおお！！」

「ここでそんな会話もしたっけ」

会話には特に意味はなかった

話してるだけでも楽しかったから

けど、その声の持ち主はここにはいない

「……………ぐすっ」

また、涙が出そうになる

だめだ、こんな顔でセイカ君を迎えられないよ  
涙をぬぐった瞬間に、ドアが開く音がした

「こなた〜？どこ〜？」

この声はかがみだ

「うえだよ〜」

と、いつもと変わらない口調で返事をする

「おま、風邪強いんだからそんなとこ登るな

あぶないでしょ？」

ちなみに今私が座ってるのは屋上のドアの屋根の上

おもいつきりジャンプすればフェンスも飛び越えれそうだ

「お姉ちゃん、こなちゃんいた？」

「ここにいるわよ」

ドアからはつかさとみゆきさんも出てきた

「どーしたの？みんなそろって」

すると皆は弁当を掲げて

「一緒に食べませんか？」

「やっぱり、一緒に食べたほうが楽しいよね」

「………うん、そだね」

セイカ君はいないけど

いつかは帰ってくるから

そう信じてるから、今は迎える準備をしよう

いつもどおりの私達で迎えられるように

「よし！！一番、泉こなた！！」

いつきまーす！！」

私は助走の準備をする

「ちよつと！！危ないから普通に降りてきなさい！！」

「大丈夫大丈夫！！」

せーのっ！！」

かがみの静止を聞かないで、おもいつきり跳んだ

だけど、その瞬間

台風にも負けないくらいの強い風が吹いて

私はフェンスの外まで飛ばされた

かがみ view

「こなたっ!？」

立っていらなくなるくらい強い風が吹いた  
飛ばされるこなたに手を伸ばす

けどその手は届かないままこなたはフェンスの外へ飛ばされた

「こなた      っ!！」

いやだ



セイカ君の次はこなた？

神様は、私達に何の恨みがあるの？

助けたいのに、手が届かない

私には翼が無いから、飛んでこなたを助けることも出来ない

わたしは、こなたから目をそらした

こなたが死んでしまう瞬間なんて、見たくない

そのとき

私の横を何かが通り過ぎて

フェンスを飛び越えた

『大丈夫』

頭に優しい声が響く

『あの子は、飛べるから』

こなたview

ああ、私死ぬんだ

せめて積みゲーと来週発売のギャルゲやっておきたかったな  
あ、アニメの最終回今日だった

ああ、あとおとーさんに一応お礼を言っておきたかったな

あと、セイカ君と話したかった

そのとき

胸の中で何かが砕ける音がした

セイカ君から貰ったネックレス

白と黒の翼のアクセサリー

その破片が光になって、飛んでいく

どこにいくんだろう

ああ、もういいや

さようなら、みんな

（いやだ）

まだ、死にたくない

（会いたい、話したい）

大好きな、少年と

「セイカク

ん!!」

「うるせえな、寝起きに耳元で叫ぶな  
このバカ」

目の前に、大好きな人の顔が合った  
背中に、白と黒の翼を生やした少年に抱えられて  
飛んでいた

「セイカ………君？」

「なんだ？そんな狐につままれたような顔して」  
助けてくれてありがとうとか  
その羽はどうしたのとか  
いつ目覚めたのとか

待たせすぎだとかいろいろ言いたいことはあったけど  
ずっと、言いたかったことを口にした

「おかえり……おかえりっ!!」  
「……ああ、ただいま」

セイカview

桜が、咲いていた

俺の周りの人々は、皆涙を流して別れをしのんでいた

今日は、卒業式

「あつという間だったな、ほんとうに」

俺が意識不明から目覚めてから、毎日はめまぐるしく過ぎていった  
受験勉強もし無いといけなかったし、俺は二週間の欠席を埋めるの



にいつぱいいつぱい

ああ、そういえば

なぜか分からないが、こなたが落ちた件

俺が空を飛んだことは、俺達しか知らない

昼休みだから、誰かは見ていたはずだが誰も騒いでいなかった

これもアンタの仕業か？かなたさん

あれ以来、翼なんて現れることは無かった

本当に、不思議な出来事だった

「梨花、みてくれてるか？」

もし、梨花が俺をたたき起こさなかったらどうなっていただろうか

皆泣いたままで、俺はいまだに暗い牢獄にいたかもしれない

久々の墓参りには、親父たちと一緒にいった

牧場を他人任せにするのはどうかと思ったが……まあいいか

「おーい！！」

「こんなところにいたのね」

「さがしちゃったよ」

「どこにもいないので、びっくりしました」

いつもの四人

いつでも一緒にいた、最高の仲間

「もう挨拶とかは済んだの？」

「ああ」

黒井先生と桜庭先生、天原先生に挨拶を済ませてきた

がらにも泣く皆号泣していたな

「それじゃあ、帰るか」

立ち上がり、校門へと向かう

しかし、校門の前で立ち止まった

「どうしたの？」

つかさが顔を覗き込んでくる

「いや、ここを出たら皆ともお別れかと思ってさ……………」

ずっと続けばいいと思った幸せな時間

永遠なんてあるはずが無いのは分かっている

だけど、どこかで期待していた

この幸せはずっと続くんだった

けど、一歩踏み出さないといけない

生きている人は、歩かないといけない

疲れて立ち止まってしまっても、また歩き出すことはやめちゃいけないんだ

だから、俺は歩く

「さようなら、みんな」

振り返らずに、歩き出す

ここからは皆別の道を歩くんだ

だから、さよなら

「ばっかじゃないの!?!」

こなたがさけんだ  
俺が振り向くと

みんな、泣いていた

さっきまでは、なんとも無かったのに  
我慢することなく、泣いていた

「違うでしょ、ばか」

かがみ言う

「さよなら、じゃないよ」

つかさ言う

「だって、私達はつながっているんですから」  
みゆき言う

「だから、こういふときはさ」

みんなが、口をそろえて言った

「「「またね」「」

あれ？なんだろう  
なんか、目があついな  
なんか、涙がとまんねえや  
「ああ！！」「またな！！」

俺達の物語は、まだ続いていく  
紡がれる物語は、人をつないで、想いをつなぐ  
さようならじゃない

信じていれば、また会えるから

この、色鮮やかで、想いのたくさん詰まった、この

キミがいるセカイで

らぎすた キミがいるセカイ 完

「キミがいるセカイ」(後書き)

いままでお付き合いしてくださったみなさん

最後まで読んでいただき、ありがとうございました!!

これで、いったんセイカたちの物語は幕を閉じます

次回作は、少し考えたりもしてます

ブログのほうで、もしかしたら告知をするかもです

時々覗いてください

あと、RPGでセイカたちの冒険も見てくれると嬉しいです^^  
では!!! また会う日まで!!!



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2108f/>

---

らきすた キミがいるセカイ

2010年11月8日16時44分発行